
彼のとなり

幸恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼のとなり

【Nコード】

N9353L

【作者名】

幸恵

【あらすじ】

新志・コ哀の短編集です。

以前と設定変更をしました。

ふたりの相棒…恋人…恋愛関係などを書ければいいなと思います。

高校への入学（1）（前書き）

これから「彼のとなり」を書かせて頂きます、幸恵です。

殺人事件などミステリーも入ったり、ちらほら甘い恋愛も入ったり……していきたいと思います。

新蘭派はやめたほうが…。

どちらかというと、志保ちゃん可愛い系です。

本当に駄文な小説ですが、

更新されたり、暇な時覗いていただけると嬉しいです。

これからよろしく願います！

高校への入学（1）

カーテンから光が漏れている、心地好い朝。

しかしそんな中、志保はあまり寝れていなかった。

昨日の夜から、今日の事を考えていたからだ。

（本当に：子供みたいね：）

志保はそんな自分にクスツと笑った。

眠いはずなのに、意外にも頭はスッキリしている。

志保は、ベッドから身体を起こし、ハンガーにかけてある制服を取った。

帝丹高校の制服。

志保は今日から新一と同じ、帝丹高校に通う。

組織は戦いの上に消え、解毒剤も無事完成。元の姿に戻った二人。
新一は当然とはいえ、志保は何故なのか？

『オメーも行かねーか、高校』

答えは簡単。新一から誘われたから。半ば強引に行くことになって

しまった。

しかし志保は志保で、悪い気はしていない。いくら相手が気付いていないとはいえ、好きな人と同じ高校に行けるというのは、やはり嬉しかった。乙女心というものだ。

もちろん相手に好きになってもらう気も、相手に自分の気持ちを知ってもらう気もさらさらない志保だが。

『まあ、高校もロクに行ったことなんてなかったから、ちょっとした暇つぶしにはなるかもね』

とかなんとか言っていたが、そのわりには制服もわざと見える場所に置いてあったりと、結構楽しみにしているようだ。

志保が、初めての制服を着て思ったのが、似合わないということだ。周りの人からすれば、美人な志保に凄く似合っていると大絶賛なはずなのだが。

（やっぱこういうのは、似合うわけないわよね。…蘭さんとかじゃないと）

恥ずかしい気持ちを抱きながら、リビングに出た。

これから毎日着る物なのに、恥ずかしがっていてどうする。

キッチンでは、博士が料理をせっせと作っていた。あまり料理上手ではないのに大丈夫なのか…。焦げくさい臭いが漂っているのは、気のせいではないようだ。

そしてソファでは、朝っぱらから推理小説に読み耽る工藤新一がいる。

…さすが。制服は似合っている。

不覚にも志保は、ぽーっと見惚れてしまった。

（わ：何見てんのよ、わたし）

気を取り直すと、志保はできるだけ新一に気づかれないように、背中を向けてこそそと食卓に座ろうとした。

「はよ、灰原！」

新一は小説から目を少し離して、当たり前のように挨拶をしてきた。ハニカミ笑顔だった。

「おはよう：」

志保は背を向けたまま挨拶。

新一は？マークを浮かべると、小説をパタンと閉じ、志保に近づいた。椅子に座る、志保の後ろ姿に話しかける。

「どうしたんだよ？あ、制服か！見せてみろよ」

「：イヤよ」

「いーじゃねえか。減るもんじゃあるめーし。これから毎日見んだからよ」

新一は志保の身体が見えるように、強引にこっちに向けた。

「わっ！ちょっと！」

「……………」

「何よ、変？」

ジロジロと無言で志保を見る新一に、志保は横目で言った。
（どうせ、変でしょうね：）

「…あ、いや」

新一は、曖昧な答えをすると、

「意外と可愛いじゃねーか…」

と付け加えた。

それと同時に志保の体温は急上昇する。頭から湯気が出て、顔が真っ赤になってしまったので、顔をそらした。

（意外とっていうのは余計だけど）
とりあえず気にしないことにする。

「おーい！哀君、助けてくれー！」

怪しげな臭いのするキッチンから、博士の声が聞こえた。

「博士、なんかやらかしたな」

新一は鼻をクンクンさせながら、呆れ顔で言う。

「そうね」

朝からこれね…と志保は思ったが、なぜか上機嫌でキッチンへと向かって行った。

高校への入学（1）（後書き）

1話目です（#^・^#）

どうでしたでしょうか？

次回もお願いします。

高校への入学(2)

ピチチ：

快晴の中、雀の鳴き声がかわいく響く。そんな空を見上げ、新一はニツと笑った。

「じゃあ、博士。行ってくっから」

「おお、新一。あい：じゃのうて、志保君をよろしくな」

まだ志保という名前に馴れていない博士は、エプロンを付けたまま二人の見送りをしている。

ヒゲと衣服に僅かながら焦げあとがある。キッチンからの異臭は、博士の料理の失敗が招いたものだった。『志保君の高校デビューじゃからの』と、パーティー気分で腕を振るおうとした結果、散々なものとなってしまった。

結局志保が朝食を作り直し、今に至る。

『博士、祝ってくれるのは嬉しいけれど、自分の得意分野で何かしたほうがいいと思うわ』朝食を取りながら、志保は博士に言った。

博士にはこれから後片付けという仕事が残っている。

「行ってきます」

志保は素っ気なく言うと、新一を置いて、先にスタスタと歩き始めた。

「ったく…。ま、博士は心配すんなよ。宮野は俺が見ててやつから」
新一は軽く笑うと博士に手を振り、志保の後を追いかけた。

(新一も：罪作りなヤツじゃわい)

博士は目尻を下げながら二人を見送った。

「ねえ、何か顔についてるのかしら？」

「はあ？」

「志保は、さっきから新一のじいっとした視線に気付いていた。平静を装っているのにも、無理がある。視線が気になって気になって仕方がない。それで志保は新一に釘をさした。新一は特に気にも止めていないが。」

「別に、なんもついてねーけど？」

「ウソつき」

「なんだそれ」

「べ・つ・に」

「はあ？」

そんな夫婦のような口喧嘩を交えていると、志保はふと腕時計に目をやる。

「言っておくけど、急がないと間に合わないわよ？…学校」

あまりにもサラリと言うものだから、新一が反応するまでも時間がかかった。

「え…：うわっ！何でそれ言わねーんだよ！」

「聞かれなかったから」

「オメーなあ！！」

新一はまくし立てるが、志保は相変わらず。

「…ったく」

「えっ…：ちょっ」

「オメー、初日から遅刻なんて嫌だろ？とっとと行くぞ！」

志保の手を握り、走り出す新一。体中の熱が手に集中する。
戸惑う志保だったが、走る新一の後ろ姿を見ると、微笑んだ。

「ふう…」

息を吐いた新一の目の前には、久しぶりの教室があった。

志保は今、職員室に行っている。

（久しぶりだな。ハハハ：かれこれ半年以上来てねーよ）

新一はいつもの苦笑いを浮かべると、思い切り教室の扉をガラツと開けた。

教室に入ると感じたのは、周りの強烈な視線。5秒の間があり、さすがに忘れ去られているのではないかと危険を感じた時、歓声らしき物が飛び交った。

「工藤！工藤じゃねーか！」

「工藤君じゃない！」

クラスメートの歓迎のムードと、変わっていない外見にホッと一息の新一。

「お前、今までどこ行ってたんだよ？」

「進級できんのかあ？」

クラスの数人はこんなことを話してきたが、ほとんどの人はみんな毛利蘭を見ていただろう。

『夫婦』と何度もからかってきて、恋人以上だとみんなが一任でき

る関係の二人。

蘭は、どんな顔をしているのだろうか？

新一はどんな歯の浮くセリフを放つのだろうか？

全ての人がにんまりとしている。

新一は、窓際の席に座っている蘭を見つけると、バツの悪そうな顔を
をした。しかしすぐに表情を戻す。

蘭が大きい瞳をさらに開いて、新一を見ていた。まだ状況を掴めて
いないのか、ぼーっと見つめたまま。やっと口を開いたかと思うと、
新一に飛びついた。

「新一！」

「よお、蘭」

「どこ行ってたのよお、心配してたんだからっ…」

「ごめんな」

蘭の目から大粒の涙が零れる度に、新一の胸が痛む。これからもう
一度見なくてはいけない。そう思うと、余計辛かった。

今は蘭との再開を素直に喜ぼう——新一は、蘭の頭をぽんぽんと
叩いた。

クラスメートは、その二人をしばらく無言で見守った。さすがにこ
んなときに声を出す無礼者はいなかった。

久しぶりの再会を惜しむ時間は虚しくも、先生の乱入によって終了
した。

「工藤君久しぶりね。…はいはい、みんな席について！」

先生は教台に名簿などを置くと、手を叩いた。そして高校生は渋々
席についていく。

新一もすっかりうろ覚えとなった席になんとか座る。
蘭は座っても尚、新一のことをチラチラと見ている。

「そんなにダンナが気になんの？」

園子から耳元に囁かれた言葉により、蘭は顔が真っ赤になっていた。

「そんなんじゃないってば！」

「説得力ゼロね」

「う…」

「えーっと、今日の日程はいつも通り…ですね。これでHRを終わ
り…：まあいつもはこんなんですが！今日はサプライズがあるのよ」
（その下りいらねーよ…）

担任の芝居がかかった言い方に、新一は心の中で突っ込んだ。

「今日は転校生がいます！紹介するわね。入ってきて！」

これまた先生は両手をパンパンと叩く。ガラッと教室の扉が開くと、
感嘆の声があちらこちらから聞こえた。

転校生は教壇の近くまで行くと、止まってお辞儀をした。

「今日からこの学級で勉強することになった、宮野志保さんよ」

みんなが唸ったのも無理はない。とびきりな美人が立っていたのだ
から。

「理数系が得意なようだから、教えてもらおうといいわ」

「…特に薬品系がな」

新一が小さく呟いたのに、周りは気づかなかったが、転校生の志保
だけは新一を睨みつけた。

新一はゴクリと唾を呑む。志保の仕返しほど可愛いげのないものは
ないだ。

「番号教えてもらおうと」

などと早速美人の転校生を誘惑しようという不屈き者も少なからず。

「…じゃあ、宮野さんの席はあそこね」

先生の指差す先は、新一の隣。

「はい」

と志保は大人びた返事をする、席に向かいスタスタと歩き始めた。志保は新一に目線を合わせると、クスツと笑う。そして気にする様子もなく座った。

これが、二人の高校生活の幕開けだった。

高校への入学（2）（後書き）

今日はいんまりお惚気はありませんでした。

あまり改行できていなくて、読みにくいかもしれませんが、ご了承ください。携帯なのであまり空けると要領がヤバいんです、文章が打ちにくいんです。

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございました！

他の連載も早く更新したいのですが…（一ヶ月更新していない）。文章が思い浮かばなくて、挫折しています。

次回は短編です。よろしく願います！

高校への入学（3）（前書き）

割り込み投稿したものです！

高校への入学(3)

「宮野さんの髪すごーい」

休み時間、志保の周りには人がわんさか集まっていた。赤みがかかった茶髪に魅力された女子は、志保の髪をさらさら触っている。男子は「ハーフなんですか?」「番号教えてください!」「どことどこのハーフなんですか?」と言う感じで質問攻め。

(…っただけハーフが気になんだよ)

新一は横目でその光景を見ていた。

囲まれた志保は、少々ムツとしていた。こんなことにはあまり馴れていなかったからだ。しかし、いつもの冷静なポーカーフエイスは保ったまま。

一方、教室の外からも志保を見物に来ている人は後をたたず。

美人でハーフの転校生。初日から人気爆発な志保だった。

それを遠くでは、嬉しいような悔しいような、複雑表情で眺めている新一がいる。志保がクラスに馴染めたら、それはもう嬉しいことだが、自分より親しい人が出来ちまうのは…なあ…?

今までも、今でも、これから、俺が一番近い存在でいたい——と新一は思う。

(俺、そろそろヤバイな)

あと髪を触られている志保に、なんだかイライラする。

自分だって触れたことは数少ないのに……。

自分自身の秘められた嫉妬心に驚いてしまう。新一は、だんだん自分が悪に傾いている気がして、バツが悪そうに志保から視線をそらした。

「よお、工藤!」バシッ

威勢のいい声と共に、新一の背中をバシッとこれまた勢いよく叩い

た奴がいる。新一は一旦前にのめり込んだが、顔をあげた。

「こ、今野？」

「ひっさしぶりー」

今の新一に、ただ一人声をかけてきた奴だ。一応新一も有名人なのだが、志保が来たことにより、そのフィーバーは掻き消されてしまった。

（や、別に寂しくなんかねーけどさ）

今野は、サッカー部でそれなりに仲の良い友達だ。

「お前、一人でしょんぼりしてたからさー。ウケたぜ」

「ハハハ…」

ウケたぜ、とは何だよ。と新一は思った。

それから今野は、サッカーの話とか事件の話とか、今までどうしてたんだ…という具合に新一に聞いてきた。新一もそれに答えていた。

新一が、この話はエンドレスなのかと思い始めた頃、今野は急に言った。

「ところで、工藤さ。あの転校生と知り合いなわけ？」

「な、なんだ急に？」

「あの女の子…美人の宮野さん。席に座る時、お前見て笑った気がしたから」

……まんま見られていた。

言おうかな、どうかな…と新一は迷った。が、ここで嘘をつけば、志保にこれから話しかけづらくなる。

（それはやだな、さすがに……うん）

新一は一人で納得すると、

「ああ、まあな」
と言った。

「へえー。どこで知り合ったんだよ？」

「え…ま、前の依頼人？」

「なんでお前が『？』なんだよ！」

「…ま、ま、まあ、いーじゃねーか！」

追求されてたじろいだことを、隠しきれなかった新一は、この一言で話を終わらせようとした。

——そんな新一を遠くから見る目が一つ。

それは美しく、清楚な気を放つ、空手部女主将…毛利蘭。

『空手部女主将』を入れると、少し怖くなるので伏せたほうがよかったかもしれない。

「蘭！早く新一君に話しかけなさいよ！」

新一をさっきからガン見する蘭を横で見ていた園子は言った。

「うん…でもなんかタイミングが掴めなくて……」
しよげながら言う蘭。

「あの、今野君のせいねー！！待ってなさい！」

「え？」

蘭が聞き終わらない内に、園子は今野の方へ行ってしまった。

「今野君！来て！ちょっと！」

単語のすぐ後に、！マークがいちいちつくような迫力で、園子は今野に詰め寄った。

「え、なんだよ。鈴木」

今野は園子の迫力に、たじろいだ。

「いいから！」

園子は今野の腕を強引に引っ張ると、廊下の方へ連れ出した。今野は、新一を名残惜しそうな目で見ながら、廊下に消えていった。

「なんだ、アイツ…？」

新一は不思議そうに二人を見ていた。

廊下にいる園子は、こっそり蘭に合図を送る。口パクで『今よ！』などと言うが、蘭は『ええ！今！？』という顔で返してきた。数十秒後、蘭は一息つくと、新一の元へ歩き出した。

「何してんだ、鈴木？」

今野は、今だ園子に拘束されたままだった。最初は訳がわからなかったみたいだが、次第に得意げな顔になっていく。

「ははあゝ。そういうことね」

「わかった！？お願いだから、協力しなさいよ！？」

「それが人に物を頼むときの言い方かよ……。まあ、いーわ。俺もあの二人がくつつけばいいと思ってるし」

今野は独り言のように呟くと、今度はため息をついた。

「…工藤の気が変わってなけりゃな……………」

昔から勘が働く今野なのであった。

一方蘭はというと…

新一を目の前にして、どうすればいいのかわからず、焦っている。

「どうした？ 蘭」

「しっしっしっ、新一……おはよ！」

急にそんなこと言われても、上手い対処の仕方わからず、蘭は意味不明なことを喋った。

遠くで園子が「あちゃー」と頭をおさえる。

「あ？ 新しいジョークか？」

「違うわよ！」

新一のツツコミにより、事態は変わる。蘭はいつもの調子を取り戻し始めた。

やはり蘭にとって新一はすごい存在なのだ。

文字通り……天使にも悪魔にもなる人。

それは遠くで二人を見ていた志保も感じたこと。

（残酷……ね……？ あなたは……）

志保は周りに囲まれながらも、痛んだ胸を、焼けていない白い手でぎゅっと握った。

当の二人は、いつものように話を楽しんでいた。ふと、蘭は新一を見て笑った。

「よかった……」

「何がだ？」

「新一が変わってなくて……」

蘭が口にした言葉が、新一の胸に小さな針として刺さった。新一は、俯き加減で喋る。

「オレ……変わってねえか……？」

「……うん。少し大人っぽくはなったけど……私が覚えてた通りの

新一だったよ」

「…そっか」

新一は小さくほほ笑んだ。

そして志保のことを考えた。

（オレが変わらずにいられたのは…）

しばらく新一は黙っていた。蘭が心配になって顔を覗こうとしたら、

新一自ら蘭を見た。不意をつかれて、蘭は顔が赤くなる。

新一の目をまた見ると、なにか決心したような目だった。

「新一…？」

「…なあ、蘭。ちょっと話があんだけど」

高校への入学(3) (後書き)

このシリーズまだ続いていたんですねf^_^;

というか、テストを2週間後に控えておきながら、呑気に小説投稿している私ってなんなんだろう……やる気を分け与えてほしいです。

妄想が膨らみます、勉強してると。つまり勉強してないってことなのでしょいか……？

意味のないことをすみません！
次回もよろしく願いします。

窓越しの〇〇（前書き）

相棒以上恋人未満って感じの二人で、新志です。

窓越しの〇〇

太陽がジリジリと照り付ける夏。そんなときに日陰になっているこの教室はとても嬉しい。

しかし気温には差ほど違いはない。志保は、半袖のYシャツから見える自分の細い腕で汗を拭った。

今、志保は授業後の静まり返った音楽室に一人佇んでいる。

さっきまで授業を受けていたのは2-Bの女子。ちなみに男子は体育。

『志保ちゃんも行く？』との蘭の誘いを断り、教室に留まっている志保。とっくにみんな出て行ってしまった。外から聞こえていた元気な声も、いつの間にか聞こえなくなっていた。

音楽室に飾ってある額には、有名な作曲家達の顔が描かれている。

志保はそれに興味をもったようで、まじまじと見つめていた。

(ベートーベン……)

志保の目はこの作曲家の前で止まる。そして寂しそうな表情でフツと笑った。

ベートーベンこと、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン。

いくら音楽無知な人でも、この名前は聞いたことがあるだろう。

1770年に誕生したドイツの作曲家のベートーベン。モーツァルトへの弟子入りが決まった後、母が亡くなってしまふ。それにより失職した父に代わり、仕事を掛け持ちして、家族を支えた。20代後半から持病の『難聴』が悪化し、40代では完全に音が聞き取れなくなる。苦悩や挫折を味わいながらも、作曲家でいることを決意。彼の葬儀には2万人が参列した。

そんな彼が作ったピアノ曲『エリーゼのために』。これは彼が好き

だったエリーゼという女性のために作った曲。エリーゼは貴族の娘で、お互い恋に落ちてしまったが、ベートーベンは貴族ではない。結婚はもちろん、恋愛関係など許されなかった。…

（哀しいお話…）

志保は目を細めて肖像画を見つめた。

（少なくとも私は…工藤君と…）

志保は、そんなこと考える自分が恥ずかしくなり、湯気のアがる頭をぶんぶん振った。

（なに考えてるんだか……。けど、一緒に体育したかったかも…）
志保にとって新一が頭から消えることは何時足りともないのだ。

次の授業に間に合わないので、そろそろ教室を出ようとした時…

コンコン

窓を叩く音が聞こえた。

音楽室は一階にあるが、その窓と面しているのは校舎。こんな時間にこんな場所で誰が窓を叩くのだろう。

時間は間に合わなくなるが、好奇心にかられた志保は、窓際に近づいた。見覚えのある髪がちらつとのぞく。

ガラッ

窓を開いてみる。

「っ！」

瞬時に志保の手が引っ張られた。

窓から身を乗り出し、落ちそうになる身体を、誰かの胸が支えた。そして、その誰かは志保に唇にそっと唇を重ねた。

顔が離れて、私の身体を元の位置に戻した人物とは…

「工藤君！」

「よ」

新一は一文字喋ると、ニカッと笑った。

（あっ…口っ！今のって…キ、キ…）

志保は一人でお祭り状態。この体のほてりは、暑さのせいでも何でもない。

「オメー何してんだよ？」志保は、盛り上がる気を必死に抑えて言った。

「ほら、音楽だったから」

「そうじゃなくて。時間、間に合わねーぞ？」

「そんなこと大昔から知ってるわよ。あなたこそ、何でこんな所いるのよ？体育は終わったはずでしょ？」（あなたが私の足止め犯なんだけど…）

志保はそう思った。新一は、志保支えていた手を離すと、首にかけてあるタオルで汗を拭いた。

「…や、ただ…。宮野、いねーかなあと思ってよ」

「…」

「体育だってよ、男女混合だったらいいのにな？」

志保は、自分と考えてることが同じな新一が、とても嬉しくなった。

「ばか」

「あ？」

「なんでもないわ」

「ばかってなんだよ！気になんじゃねーか。教えろよ」

いつもの他愛もない話を、二人はずっと窓越しにしていた。

「宮野ってベーターベン好きなのか？」

「まあね」

そして二人とも、さっきより熱くなった体温を実感していた。
その後の授業に遅れ、先生に叱られてしまったことは、伏せておこ
う。

「…もしかしたらって思って来たんだけどよ、宮野がいてよかった
な。…キスもできたし…」

新一がそう呟いたのを、志保は聞き逃してしまった。

窓越しの○○(後書き)

短編です(＜|＞)！

こりやまた下手くそな…短編初めてなので。

音楽の授業で思いついたのですが…。ベートーベンの情報って合ってますか？Wikiで調べました。

相棒以上恋人未満ってキスってするの？っていうのは、ご了承ください。
さい。

次回もよろしくお願いします！

進路「お嫁さん」(前書き)

短編です。

恋人の新一と志保です。

進路「お嫁さん」

「はい。これから紙配るわよ」

担任の藤宮が左側から順番にプリントを配り始めた。

クラスにどんよりした空気が流れているのは、すぐに察知できた。

一方で、成績の良い生徒は、余裕そうな顔をしている。きっと将来設計がすでにできているのだろう。

志保の元にも回されてきた。プリントの上には『進路希望調査』という文字が印刷してある。

志保は「ふう」とため息を吐いた。

（秋だからそろそろ来るとは思ってたけど…）

提出は今週中。志保は紙を机の中にしまうと、新一をちらりと見た。

「ねえ、あなた何て書いた？」

「何が？」

「今朝配られた紙」

「ああ。進路調査か？」

帰り道、二人は紅葉がきれいな道路を歩いていた。

志保が話を持ち出すと、新一は思い出したように言った。

一方志保は憂鬱だった。あんな紙はビリビリに引き裂いてやりたかった。志保にとって学力は問題ない。しかし、一度組織を抜けてきた身にもなると、働くことに抵抗が出てしまうのだ。恐怖……あんな

なことに二度と荷担したくない。

志保に夢なんて、ない。あるとすれば：

（工藤君かしら…？）

それでも、高校2年生にもなると問われてしまう、大事な問題。

「平成のシャーロック・ホームズ」

「…って書いたの!？」

新一の言葉に、志保は目を大きくした。

「って書いたけど、真面目にやんなきゃいけねーかと思って消した」

「で、結局何て書いたの？」志保はホッと息を吐いたあと、また尋ねた。

「私立探偵」

（ああ…やっぱり）

志保は心の中で何度も頷いた。この人の場合、これ以外の答えだったら、逆におかしい。一人で納得する志保に、新一は聞いた。

「宮野は？宮野は何て書いたんだよ？」

少し間があった後、志保は言った。

「……何も書いてないわ」

「そっか。俺的には、科学者とか書いてんのかなあって」

「そうよね…」

（やっぱりそういうイメージよね）

志保は思った通りの応えに、ガッカリした。もっと可愛い感じのがよかった……と。

新一は、手を頭の後ろで組むと、片手で頬をポリポリかいた。

「でも今のオメーだったら、お嫁さんっていうのもいいかもな？」

「お、お嫁さん!？」

「オレは私立探偵やってるとして……オレだったら……奥さんは志保がいーけどな」

新一は横目で志保を見ながら言った。志保は頬がピンク色に染まっ
ていく。今、アスファルトの上を舞い散る紅葉のようだった。

「おお……」

志保は頭がパンクして、頭文字を何度も繰り返す。

前を歩いていた新一は振り返り、志保の様子を見ると、笑った。その顔が鬱すらと赤みを帯びていたのは、夕陽のせいで知られることはなかった。

新一的には、遠回しなプロポーズだったのだ。

「オメー……かわいいーな」

「かっかわ……」志保は、体中が熱くなる。熱でも出たのかと思うほどに。

「ほら、な」

新一はまた悪戯っぽく笑うと、志保の頭をくしゃつと撫でた。

（結構、本気だぜ？）と思いながら。

その後家に帰った志保が、一度だけ希望職業に「お嫁さん」と書いてみたことは、ここだけの秘密。

進路「お嫁さん」(後書き)

短くてすみません(＜―＞)

次回は長編?の予定です。列車で殺人事件が起きる、みたいな…

志保ちゃんかわいい感じが多いので、少しツンデレしたいと思います。

寝台列車の殺人（1）

暗い夜道の中、ライトを光らせた列車が向こうからやって来た。

新一は体を少し乗り出し、それを確認すると、志保を見た。

「そろそろだな」

「そんなこと、わかってるわよ。この音のせいでね」

志保達の周りを取り巻くように、列車の走る音は近づいて来る。そのボリウムは、志保にとってはかなりの『騒音』だったらしく、顔をしかめた。

「よし、準備しろよ」

「…ええ」

と、志保は気の落ちた返事をした。それを見た新一は首を傾げる。

「なんだよ、楽しみじゃねーのか？」

「そうじゃなくて…」

これから寝台列車に乗るのは、なぜか——単純に旅行をするためにだ。

新一が解決した事件の依頼主がお礼にくれたキップを利用して。

それは北海道行きのブルートレインだったが、キップは2枚しか入っておらず、なぜか新一は志保を誘った。

それに志保は気がひけているのだ。

「私となんかじゃなくて、蘭さんに行けばよかったのに…」

そりゃ志保にとって、二人で旅行に行けることは嬉しいに決まっている。だが、二人の関係（もちろん新一と蘭）を差し置いて、新一と旅行とは、志保は蘭に申し訳なかった。

「なんでここで蘭が出てくんだよ。あの時、宮野が助手をしてくれたから解決できた事件だぜ？オメーが行かなくてどうすんだよ」

「それは…そうだけど…」

「まー、細かいことは気にすんな！北海道の旅を満喫しよーぜ」

最初はもごもごしていたが、新一の笑顔に、志保の顔も綻んだ。

（まあ…いいわよね…）

ちよつとくらい。今回は独り占めしたって……という志保の思想も、列車がプラットフォームで停車したことにより、終了した。

ちよつと大きめの荷物を持って中に入ろうとした時、新一が「持っ
てやるよ」と手を差し出したが、志保は「いいわ」と言って、中に入って行った。

その後ろ姿を見た新一は、

（可愛いげのねーやつ…）

と思った。いつもながら可愛いげがなかった。

志保は新一の優しさに、俯きながらほほ笑んでいた。

夜6時出発の列車内、まだ明るみがあった。外を出入りしている人も多い。

依頼主のふところは中々あたたかく、二人はA寝台に乗れることになっていた。

新一を先頭に、二人は自分達の部屋を探した。

「おっ、ここだ」

新一が個室の扉に掛けられている番号を見ながら言った。中を開けると、

「すげー…」

「へえ………」

二人は感嘆の声を思わず漏らす。口はポカンと開いたまま。

「さすがだな、あのジイさん」

「いかにも金持ちって感じだったものね」

中は、高校生の二人が悠々と寝れる広さ。はっきり言って、高校生には勿体ない。簡易ベッドが一つ。

「……ひとつ」

志保は、自分の考えていたことを何気なく言葉にしてみる。

「ひとつ?………」

「ベッドがひと…つ…」

「あ!?!?!ここ寝るとこ一つしかねーじゃねーか!?!」

新一は、志保の呟きをただ聞いていたが、しばらくして気づくと大声をあげた。

志保は知らぬ間に心拍数が上がっていたが、顔には出ておらず、ホッとした。

17と18……一応いい年をした男と女なのだ。小学生の頃にも何度か寝たことはあるが、この体とはわけがちがう。

「どうするの?」

「どうするったって………」

「私、あなたと寝るなんてまっぴらよ」

志保の言葉に、新一は顔が真っ赤になった。

「俺だってイヤだったの」

「私のほうがイヤよ」

二人ともガキだ。

「じゃあ俺、床で寝っから」

「…でも…」

「いいって」

志保はためらったが、

「…じゃあ、そうさせてもらうわ。ありがとう」

「え？」 志保が言った言葉に、もう一度新一は聞き返す。

「なに？」

「オメーが『ありがとう』なんて言うから珍しーなって…」

志保は「ああ、そんなこと」と受け流したが、心の中で思った。

（いつもあなたには感謝してるわよ…）

――

（どうするの………？

私………

いくら恨んでいたからって、これじゃあ私も殺人犯……)

一人の女が食堂で考え事をしていた。蟀谷にしわを寄せて。そして、テーブルに顔を埋めてしまった。(大丈夫……彼を殺るのは今日しかないんだから……あの男……)

顔だけ起こすと、思い立ったように自分の個室に向かって行った。

寝台列車の殺人（1）（後書き）

サブタイトル、漢字長々とすみませんf^_^；
最高に堅苦しいですね。

アガサ・クリスティーの「オリエント急行殺人事件」を読んでいたら、
書いてみたくなりました。

初めてミステリー書くので、おかしなところ多いかと思いますが、温
かく見守っていただけると、嬉しいです。
次回もよろしくお願いします！

寝台列車の殺人（2）

「いいか？」

「ええ」

新一は志保に確認すると、寝台の個室を出た。これから二人で食堂に行くのだ。

それは数十前のこと……『ぐう』というお腹の音と共に、二人は目を合わせた。そういえば夜ご飯がまだだった。いつだって体は正直。

7時：車内は賑やかである。かすかに揺れる廊下も、オレンジ色の光が、高級感を引き立たせていた。

志保は、薄黄色のワンピースに、緑色のカーディガンを重ねている。相変わらず『美人』。新一はそんな志保をじっと見ていた。

「なによ？」

「へ！？」

「なんか隣から気味の悪い視線を感じたわ」

「気味の悪いってなんだよ」

「あら：見ていたの認めるのね？」

ここで新一の顔が赤くなる。最近新一は、志保のペースに巻き込まれてしまっただけだった。

「ホント……名探偵さんの名が聞いてあきれるわよ。……きゃっ！」
志保が新一の方に倒れ込んだ。後ろ側から来た男からぶつかられたのだ。

男は、男にしては小柄な体型で、ベージュのコートを深く被り、マスクをしていた。

その男は、志保を見向きもせず、走り去って行った。

「なんだよ、あのヤロオ…」

新一は男を睨みつけると、自分にもたれかかっていた志保を起こす。

「大丈夫か？」

「ええ…」

食堂につくと、席の半分はうまっていた。テーブルクロスがしいてあり、淡い色の小さいランプがひとつ……。そこで食事をするように入り口で二人は突っ立っていると、ウェイトレスの女の人がやって来た。

「食事券を頂戴できますか？」

「はい」

と、志保がポケットから、ハンコで『食事券』と書かれた紙を出して渡す。

「確かに。こちらへどうぞ」

ウェイトレスの人が席へ案内してくれるので、二人はついていく。一番奥のテーブルで、新一は寝台の車両に背を向けるように座った。「お食事をお持ちいたしますので、しばらくお待ちください」

女の人は、うやうやしく礼をして奥に消えていった。

食事をしているのは、A寝台に乗っている乗客ばかり。ここは金持ちしか食べれない、ということ聞いたが、本当だったらしい。みんな中々高貴な服を着ていた。新一は、藍色のワイシャツにジャケットを着てきて良かったと思った。

「でもこんな所で食事なんてない。蘭との展望レストラン以来だな」
「ああ。あなたが告白できなかったヤツね…」

そんな話をして、十分ほど経った。もちろん半数以上を新一のシャ
ーロック・ホームズ話。

「お待たせいたしました」
と再びウエイトレスがやって来ると、お盆から美味しそうな料理の
のった皿を置いていった。

「うわー…うまそー」

新一がそう言っていると、ウエイトレスさんと灰原がクスツと笑った。

「あなた小嶋君みたいね…」

「元太あ!？」 そんなに食いしん坊に見えたのか…と新一は思った。
こんな所で二人のように、子供みたいな会話をしている人はいない。
ウエイトレスは言った。

「もしかして、お二人は夫婦なんですか？」

「え」と二人は目が点になる。顔がちよつと赤い。

「あまりにも仲がよろしいので…」

「まさか！」

否定する新一を、志保は横目で見ながら素っ気なく言う。

(まさかって何よ)

「私はこの人の助手よ」

「助手ですか…？」

「探偵なのよ、この人」

「へえ…探偵なんですか！」

ウエイトレスはきらきらした目で新一を見た。顔は一般的に『カッ
コイイ』新一なのだ。そんな会話をしていると、ウエイトレスは、
上司と思われる男に注意された。耳打ち程度の小さな声で。

「コラ、なに無駄話してるんだ」

「すっ、すみません！……それではごゆっくり……」

女は、そう残してせかせかと仕事に戻った。それを見送った二人は、食事に再び視線をやる。

「よし、食うか！」

新一がフォークとナイフを握った時……

食堂がざわざわし始めた。

新一は、辺りをキョロキョロ見渡す。

「おい！B寝台で人が死んでるってよ！」

「ええっ」

客達の会話はボリュームが大きすぎたようで、二人の耳にもしっかり届いた。

『死んでる』という言葉に素早く反応した新一と志保は、目で合図をし、頷いた。二人は立ち上がり、噂話をしていた客に近づいた。

「死体が見つかったのは何処ですか？」

「あ、あなたはっ？」

「探偵です！早く教えてください！」

「Bの104号室で……」

新一の気迫に押された客。新一はそんなことお構いなしに、走り去った。

「ありがとう」

と後ろを追いかける志保が、新一の変わりに客に礼を言う。

向かうは……Bの104号室。

「あなたといるといつもこうね……」
走りながら、志保はそう呟いた。

寝台列車の殺人（2）（後書き）

寝台列車……実際は、食堂とかお金持ちとかいう設定はないかもしれませんが、ご了承ください。無知なんです。

コナンの22巻に出てくる、北斗星みたいな内装を想像していただけると嬉しいです。

次回もよろしくお願いします。

夕陽と俺達のキョリ（前書き）

今回は短編で新一目線です。

コメディがあまり入ってません。それでもいいっていう人だけ、お願いします。

自信ホントにありません。

夕陽と俺達のキヨリ

「宮野ー？ 帰ろーぜー」

そんなことを叫びながら、ほぼ無人の校舎を歩き回る。

なんでこんなに探してんのにいねーんだ、アイツは。

放課後……生徒はみんなとっくに帰ってる。部活をやる生徒も、テスト前が影響して、いない。

デケー声を出してるからか、廊下に俺の声が何度もこだまする。それとも人がいないからか――？

学校中ほぼ歩いたが、宮野はいない。あんなヤツ、かなり目立つと思うんだけどな。

宮野みたいなキャラと、あんな美人なヤツはそう簡単に存在しない。

ここに居なかったら、あと帰るか――

駄目元で寄ったのは、2－Bの教室だった。

扉の向こう側に誰がいる。少し希望が湧いてきた。

「宮野っ……!？」

思いっきり開けてみると、こっちに背中を向けて立つ人物がひとり。

その人が宮野志保だってことは、背中だとしてもすぐにわかった。赤みがかかった茶髪に、か弱い小さな肩が目に入ったから。

ん…か弱い…？

いつから宮野はそんなイメージになったんだっけ。

俺の発した声に気づき、こちらに振り向く。俺は安堵の息を漏らした。

「なんだ、ここにいたのかよ」

「あら、いたら悪い？」

いつもの憎まれ口。それでもいい。

「探したんだぜ」

「別に、探してって頼んだわけじゃないから」

こういう時、後ろからそーっと近づいていって、抱きしめてやればロマンチックなんだろうか。

無理。俺にそんなベタなこと無理だ。

「何見てたんだ？」

「……赤いもの」

「あ？」と一瞬だったが、すぐに頷いた。

「夕陽か」

窓から見えるのは、真っ赤に染まる夕陽。真っ赤かオレンジか——
—けど今日の色は、紅。

「断末魔——血の色」

相変わらず不思議なことを言うもんだな。

「どういう意味だよ？」

「わかんなくていいのよ。……哀しい色ってこと」

哀しい。今まで夕陽を見て、そんなことを考えたことあっただろうか。

「哀しいって言えば、オメーの名前も『哀』だよな？」

「……………」

宮野は黙る。

「コーデリア・グレイとか、V・Iウオーシヨースキー……意味があるみてーだけど。なんで『愛』にしなかったんだ？」

しばらく返答がなかった。ただ宮野は夕陽を見つめるだけで。

「……似合わない……じゃない……」

突然宮野は消えるような声でそう言った。

「『愛』なんて私には似合わないから。……私には愛なんてないから」意味はなんとなくわかった。

宮野のことだから、どうせ愛されてないとか、そういうことなんだろうな。

「はぁ、まったくよお……」

俺は思わずため息。いつだって宮野は、自分の価値を下げてばっかだ。

だから俺は言っちゃった。

「……オメーは最っ高に『愛』が似合う女だと思うけどな」

まだ黙って夕陽を見つめる宮野だったが、さっきのような哀しい瞳じゃなくなっていた。

よかった。オメーが哀しい顔してんのが一番嫌いだ。

……これが好きっていうことなんだろうな。

教室と宮野と俺を、赤く染める夕陽。
近くにいて、遠くにいる。

俺達二人は不思議な距離。

近く感じたり、遠く感じたり。
俺達二人は夕陽みたいな距離。

そう感じる度に、近くの存在だけにしておきたい——って思うんだ。
だから、後ろからこっそり近づいて抱きしめてみた。

「わっ！ちょっと！」

驚いて声をあげる宮野。あったかい体温なのがわかった。
俺も宮野も、真っ赤な顔になってると思う。

そんな顔も、今は、夕陽のせいできつから。

夕陽と俺達のキヨリ（後書き）

夕陽を題材にしたかったけど、こんなふうになるなんて……思っ
てませんでした。

次回は寝台列車殺人（3）です。
よろしく願います！

寝台列車の殺人（3）

新一と志保は、Bの104号室の付近まで来た。…が、群がる野次馬が多く、中々部屋に近づけない。

「すみません！通してください！」

声を張り上げながら、新一は人混みを掻き分ける。志保は、新一のあとを続く。埋もれそうになった志保は、さりげなく新一の服の袖をぎゅっと握った。

やっと先頭に来たかと思い、部屋の中を見ると……小さなベッドの中で、胸にナイフを一突き。人が死んでいた。

「……どうやら本当のようね……」

志保が死体を見ながら言った。

「ああ、そうだな」

「本当に……あなたに休暇はないのかもね」

新一は既に身体が動いている。現場に入って、倒れている人物の息があるか確認する。脈が動いていないのがわかると、立ち上がった。「人が死んでいます、ここから入らないでください。僕は探偵です」新一が手慣れた言動で、周りの群衆に指示を出す。よけいザワザワし始めた。

「あの人！高校生探偵の工藤新一よ！」

一人の女の人が歓喜の声をあげたことが、周りにも広がった。特に

女性がキャーキャーする。

「うそー！工藤新一！？」

「彼がいれば大丈夫！これで一安心ね！」

新一はそんなことお構いなし。ハンカチ取り出し、指紋を付着させないように、丁寧に遺体の様子を観察し始めた。

志保も屈み込んで、一緒に死亡推定時刻などを予測する。

歓声を掻き切るように「警察です！はい、どいて！」と声を出す人物がいた。

（警察がいたのか…よかった）

と安心した新一と志保だが、この声に聞き覚えがあり、二人して顔を見合わせた。

「おお！工藤君じゃないか！」

割腹のいい体型をして、Yシャツに緑のネクタイ、いつもの帽子を被ってきたのは…

「目暮警部！」

その後ろから追いかけてきた若手の刑事の顔にも見覚えがある。冴えない顔も、前よりはマシに、頼もしく見えてきた刑事。

「高木刑事も！」

「あれー工藤君じゃないか！」

高木刑事はビックリしたような、嬉しそうな声をあげた。

「何でここにいるんだい？宮野さんまで」

「ちよつと旅行を…。警部達はどうして？」

新一は頬をかきながら言った。目暮は苦笑いをしながら答えた。

「いや、指名手配犯が北海道で捕まったらしくてな…その引き取りに行くんだ」

「…そうですか」

ご苦労なこった…と新一は思った。

「ところで、この人は死んでいるのだな？」

「はい。心臓を一突きで、即死ですね」

「そうか：君はいつも事件を呼び込むなあ。工藤君、休暇中に悪いが、捜査に協力してくれんかね？」

新一は、フツと笑った。

「喜んで」

乗客から借りた使い捨てカメラで、現場の写真を何度か撮るのを終えると、高木刑事は口を開いた。

「死因は、心臓を刃物で貫いたことによります。凶器は刃渡り20cmほどの包丁かと思われます。所持品から、身元がわかる物は他にありませんでした」

「財布や携帯、定期券、免許証なども無かったんですか？」

新一は聞いた。

「ああ。無かったよ」

「：おかしいですね。そんな必須用品を所持していない人なんて。ここは被害者の部屋ですよね？」

「多分ね。正確には言えないなあ。何しろ切符も無いものだからね」

高木刑事は苦笑いした。

新一の隣に、腕を組んで立っていた志保が口を開く。

「切符までないなんて…益々おかしいわね」

「そうだな。まるで身元を知られたくないようだ。どっちにしろ、犯人が隠し持っているのは間違いないな」

「物取りの犯行じゃないのかい？」

「いや、それはないと思います。携帯や切符、免許証……いずれも見つかった時、持っていれば不利な物。できれば所持していたくないはずですから」

「ああ、そうか」

高木刑事が相槌をうつ。新一は目暮警部に向き直り、言った。

「目暮警部、とりあえず関係者達の話聞きましょう」

そして新一は、野次馬に混ざりながら、ひどく怯えた表情をしている一人の人物を指差した。

周りの見物人とは違い、震えている。明らかに関係者だということがわかった。

目暮は野次馬を帰すと、震えていた男性に話を聞いた。

「あなたは、この被害者のことをご存知なんですか？」

「はっ、は、はい…」

「そんなに緊張なさないでください」

…そんなこと無理な気がする。

「名前など詳しく教えていただけると、有り難いのですが。ついでに、あなたの氏名などもお願いしますできますか？」

「はい」

知り合いという女はようやく冷静さを取り戻してきた。

話を聞いている男の名前は、桜井正介（26歳）。死んだ男の会社員だという。

サーモンピンクのポロシャツを着た桜井は、好青年なイメージで、事情聴取にも快く引き受けてくれた。

桜井さんの話によると、被害者の名前は平野謙蔵（56歳）。東京の銀行の社長。本も何冊か出版している金持ちだ。

桜井は、たまたま列車に乗り合わせたらしい。

「騒がしかったので来てみれば……まさかこんなことになるなんて…」

「お気持ち、お察しします…。他に平野さんの知り合いが列車内にいないか、探してみてください。…これが乗客リストです」

目暮は先ほど駅員からもらったリストを、桜井に手渡した。

一方新一は、警部からもらった手袋をはめて死体を観察していた。

「ん…これ…」

ポケットの中を探っていた新一は、グシャグシャにされた紙が入っているのに気づき、取り出してみた。

新一の横に屈んでいた志保が声を出す。

「それ、食事券ね。私がさっき出したのと同じだもの……ここにハ

ンコも押してあるし、間違いないわ」

「すると、金持ちなのは間違いねーな」

あの食堂で食事ができるのは、お金が裕福でないと無理なのだ。

桜井の証言は嘘ではないようだが……

「けど、じゃあ何で被害者はB寝台で殺されてんだ？」

新一は立ち上がり、桜井に近づいた。

「被害者……つまり平野さんですが……儉約家な方でしたか？」

「いつ、いえ。金遣いは結構荒いほうだと上司が……」

「ついでに聞くと、会社の経営状況はどうでしたか？」

「景気が良かったかっていうことですか？——ええ、ウチの会社は破綻みたいなことはありませんでした。けど、そこが私にも不思議で……あまりお金を借りる人も少なかったはずなんです……まあ、私は下っ端なんで、詳しい事はわかりかねます……」

萎んだ声を出した桜井だったが、次の瞬間大きな音量になった。

「あ！いました！リストの中にいます！」

「なにいー！？」

目暮は少々芝居がかかりながら言った。場にいるみんなが桜井に近づいく。

「えっと、この……真藤千鈴さんと、有村秀生さんの2人です！」

リストの氏名を順番に指していく桜井。

「よし、その2人を今すぐここに連れてくるんだ！」

「ハッ！」

寝台列車の殺人（3）（後書き）

変な切り方ですみません。長くなってしまったので…。

ミステリーになってるか不安です。あんまりお惚気ありませんね…

次回は短編の予定です。

次回もよろしくお願いします！

当たる占い（前書き）

短編です。

相棒以上恋人未満な二人です。

当たる占い

外では雨が降り続けている。

梅雨の時期——外の雨を見ているだけなら、涼しそうに見えるのに。実際は蒸し暑いものだ。

新一は半袖のYシャツの首元をパタパタと扇いだ。

その数メートル先。ソファの上で、志保は本を読んでいる。新一はそんな志保を不思議に見た。

…ここは阿笠博士の家。

二人は学校帰りに雨に見回れ、逃げ込むように飛び込んだ家がここだった。幸い近くを歩いていたので、濡れずにすんだ。

志保が阿笠博士の家に入るのは当然。だが振り向けば、新一まで入って来るではないか。志保は最初『何で家に帰らないのよ?』と怪訝そうな顔をしたが、新一の顔を見てため息一つ漏らすと、新一を家に入れた。

(…えっと……)

志保は自分の星座と血液型のページを探して見ていた。

(AB型……あなたはいつも冷静沈着で、周りの人を安心させている。無愛想ではあるけれど、本当は優しい心の持ち主——そう……かしら……?)

当たっているのか、と志保は首を傾げる。

そう、これは。人間がついつい頼りがいにし、見てしまう物。そして女の子が、恋をすると見ずにはいられない代物。

——占い。

この占い本は、もちろん志保が買ったわけではない。クラスメート（鈴木園子）が無理矢理志保に貸してきたもの。

志保はそんな占いには興味がないのだ。自分のことは自分の意思で決めないでどうする。占いは非科学的する。という考え。なので断ったのだが、帰って鞆の中を覗くと、入っていた。『よく当たる、自分の性格！女の子のための占い48』という表紙を向けて。

……いつの間に入れたんだ。

と呆れたが、見てみることにした。

女が何故こんな物に引き付けられるのか、気になったからだ。

この占い本は、星座と血液型で占うタイプ。つまり、48通りがあるというわけだ。

最初に基本的なその人の性格、そして次に恋愛傾向などを紹介している。

射手座のAB型の志保。

——そして、ポーカーフェイスをよく使うあなた。これは心を表情に出すことが怖いと考えているから。けれど、あなたの隣にいる彼だけは、騙しきれていないみたい——

（…あ）

志保は、窓際にいる新一を見た。

（隣にいる人…）

どう考えても彼しかない、と。そしてフツと優しい笑みを浮かべた。

すると急に新一が振り向いた。

「！」

志保はビックリした。自分が新一をちょうどよく見ていたからだ。視線をそらす志保に、新一は近づいた。

「オメー何の本見てんだよ？」

「なんでもないわよ」

本なんか見せて、自分のことを占われて、変なことを言われたらとんでもない——と志保は咄嗟に本を胸に隠した。が、新一は見事に取り上げた。

「ん…？ 占いか」

新一は曖昧な感じ。

「なによ？」

「珍しいなって。宮野って占いとか信じねーイメージだから」「そりゃ、そうよね。けど、工藤君って私にどんなイメージを抱いてるのか、時々疑わしいけど」

「ハハハ…」

新一は苦笑しながら、本を志保に返した。そして志保の隣に座った。

志保は少しドキッとしながらも、（意外と当たるのかも）と、また視線を本に戻す。

（れ、恋愛傾向…）

いよいよ肝心な本題に突入。

——あなたの恋愛はとももどかしいものになりそう。あなた自身も相手も恋に関して鈍感。そしてあなたは素直になれない。相手と不器用な恋愛を送りそう。

けど、今好きな人があなたにとって最良の相手。
鈍い彼には、あなたが正直にならないとね？———
少し辛口な意見。

「無理よ」

志保は思わずそう呟いた。今好きな人が最良の相手……またも新一をちらりと見る。

「なんだよ？あ、俺にも見せろよ」

「いやよ」

「なんでだよ」

拒む志保に、新一はまたしても勝手に本を取り上げた。

「あ、ちよつと！」

「相性占い……？なんだコレ。宮野と相性がいいのは……」

そして勝手に占い始めた。志保はなぜだか顔が真っ赤になっている。
『恋』に関してはまだまだ不器用で、子供なのだ。

「俺」

「え？」

「相性がいいのは、牡牛座O型！」

志保は一気に心臓が高鳴るのがわかった。

「ウソ……」

新一と相性がいいなんて夢にも思わなかった。こんなに性格が真逆なのに。

（私、ひねくれてるのに）

新一は何故か嬉しそうに笑う。

「私は別に嬉しくないけど」

志保は強がって言う。

———そしてあなたは素直になれない———

さっきの占いの記述が、志保の頭を過ぎった。

「なんだよ」

新一は楽しそうに、志保に顔を近づけた。

志保の心臓が異常なくらい波打つ。顔が真っ赤になるのを、ポーカ
ーフェイスで抑えて、代わりに胸と手の平が熱くなる。

（ポーカーフェイス：見破られてるのかしら？）

どうせ見破られているのなら、素直に正直になってみるのも悪くない。

志保は口を開いた。

「…好き」

当たる占い（後書き）

志保の星座や血液型がわからなくて、勝手に考えたものです。ご了承ください。

部活中に思いついて、一気にできました。いつものように駄文ですが：

次回もよろしく願います。

このままで（前書き）

短編です。

志保目線になってます。

このままで

この長さでいいの。

この長さが私達に最適だから。

今日も放課後に事件に遭遇し、彼の名推理で事件解決へと持ち込まれた。

今はその後の帰り道。すっかり周りは暗くなって、街頭だけが道を照らす。冬の始まりで、少し寒いくらいなはずなのに、夜のせいかなんまり冷えている。

私も工藤君もマフラーをしている。

わたしは彼の相棒役だから、もちろん付きっきりで探偵さんの手伝いをした。それは疲れるけど、私はいい。

隣にいれるほど嬉しいことはないのだから。

『相棒』

この名前が私から取られたら、私と彼はただの同級生でしなくなる。

そんなの嫌だから。

どんなに疲れ果てたって、傍にいれるのなら、私はいいの。

…単なる欲。

「宮野、今回の事件どう思った？」

工藤君が突然話しかけてきた。思いにふけていて、ハツとする。

「ああ…。あの旦那さんのせいね、今回の事件は」

今回の事件は、夫が妻を殺したということ。夫は浮気をしていて、妻にそれがバレて殺害した。

……くだらない。

「旦那さんが弱いからいけないのよ。ちゃんと伝えないから。伝えなきゃいけないこと、後回しして後回しし続けて……」

今のは自分自身に向けた言葉。

本当の気持ちを言えばいいのに――――

この距離を壊したくなくて

怖くて

彼を困らせたくなくて

素顔のまままでいたくて…

だから内緒。いくら彼に恋をしていたとしても。

「ふうん……オメーらしいな」

「そうかしら？」

あなたのそんな声も大好きだから、もっと聞きたくなる。もっと近づきたくなる。

心のどこかでは、自分の幸せを願っていて。

工藤君の隣を自分の特等席にできたら、どんなに嬉しいんだろう。

この人の『恋人』になれたら………頭がおかしくなっちゃうくらい、幸せなのに。

組織にいた頃は知らなかった。いつか自分がこんな想いを抱くことになるなんて。

今の生活だけでも、予想外の幸せなのに——人間って幸せを掴めば掴むほど、欲張りになっていく。

こわいわね？

「でも、そうだな。宮野言う通りだよ。旦那さんもよ、あの様子からいうと、浮気相手が好きだったんだろ？それなら尚さら伝えるべきだったよな。

奥さんと浮気相手と自分のためにも——」

工藤君は優しい。彼は両手を頭の後ろで組んだ。

気づけばもう、住宅街。彼とわたしの家まであとちよつと。

寒い時期は歩くのが辛いのに、工藤君と一緒になら時間が早く感じる。ふと彼が口を開いた。

「宮野は、好きなヤツとかいねーのか？」

何気なく……じゃない。さっきとはガラリと印象が変わるくらいに、真剣な声音。

わたしの胸に何か詰まる。

『あなたよ』

って素直に言えばいいのだろうか。

告白したって、彼が私を避けることなんてしない。優しい…人だから。

けど、必ず今のままじゃいられなくなる。私が一番に。

「いないわよ」

いつもの調子にいつもの答え……ちゃんとできてた？この話は終わりにしたい。

なのに彼は、まだ言う。

「俺とかは？」

ふざけているのならやめてほしい。

「…何言ってるのよ。からかってるつもり？」

急に工藤君の足が止まった。私に背を向けたままで。なぜかドキッとする。

「俺はさ……このまま宮野と終わりとくねえんだけど」

夜、静かな寒空の空気に工藤君の声だけが悲しく響いて。胸がキュッと苦しくなる。

反則。

『このまま』って何？

「俺は、宮野が大っ好きなんだけど」

「え？」

「俺は宮野と『相棒』じゃなくて『恋人』になりたい」

……気がついたら抱きしめられていて。
意識が飛ぶくらいにドキドキしていて。
意味がわからなくて。

「宮野はさ、俺のことどう思ってたんだよ…?」

私は、開けっ放しにされていた口を結んだ。

彼の体温が温かい。私だけじゃない。

そうなの?

同じなの?

体温も気持ちも…。

私の顔に彼のマフラーが当たって、くすぐったかった。

答えたいけど、

まだ照れ臭くて、

『好き』の代わりに彼を思いっきり抱きしめた。

しばらくして、空から小雪が降り始めた。今年の初雪。

それに気づいた彼は、私をそっと離し、私もそっと起き上がる。

そして顔を見合わせると、

雪と正反対なお互いの真っ赤な顔を見て、笑い合った。

このままで（後書き）

季節はずれの冬設定ですみません。

こういう話は、絶対に冬で寒いのがいいなと思ったので…。単なる作者の好みです。

テスト無事終了したので、更新これからも頑張っていきたいです。音楽の点数が悲惨でした。新一と似ているのかもしれませんが。

次回もよろしくお願いします。

姫と王子（前編）

「姫を愛しています……。王子は姫の手を握ると言いました。その目には姫しか映っていません。」

そして王子様とお姫様はめでたく結ばれたのでした……。って、はあ!？」

新一は、真剣な語り口調で読んだかと思えば、アホみたいに大きな声を出した。

「真面目にやりなさいよ」

新一の横にいる志保は言った。志保も注意はしたものの、正直この物語にはかなり呆れていた。

5日前の5限目のことだった。夏の文化祭の話し合いがクラスで行われていたのは。

『今年もやってきました、夏の帝丹高校文化祭』という具合で、話し合いは始められた。

まず何を出すのか、ということを決めなければならなかった。しか

しそれは意外にも早く決まったのだ。

出し物は面倒くさくないものもいい、という人はクラスで志保しかいなかったからだ。

新一など話し合いにも参加していなかったが。

二人を除く全員一致で『劇』ということは決定。そこまで決まると早いものだ。

「恋愛モノがいい！」

「や、ここは工藤をつかって推理系とか！」

「王子様とお姫様とか」

いろいろな声が飛び交う中、園子は大きな声でまとめる。相変わらずこういう才能はある。

「過半数で決めなきゃ！手挙げて！…恋愛が26で、推理が8。っていうか、宮野さんと新一君も挙げなさいよ！まあいいわ。勝負はあったわね。

恋愛モノに決定！」

26名は、楽しそうな声をあげ、8名も、負けた割にはやる気があるようだ。

志保は読書をし、新一はもはや寝ている。

「話は私が書くとして、ヒロインはどうする？相手役も」

『相手役』で新一をみんなが見る。学校一のモテ男、学校一の有名人、学校一のイケメン…と言っても過言ではないこの男。準主役はコイツしかない。

「新一君ね！さあてヒロインは？」

『ヒロイン』と聞くと、みんなが志保と蘭を交互に見る。

「毛利か宮野さんだよな」

そう、どっちもヒロインに相応しい美貌なのだ。

新一とお似合いなのは…。前なら蘭だと即答できるだろう。しかし、事件の度に志保を連れ出す新一を見ると、もしかして今は蘭以上なのかも…。とみんなは思うのだった。

クラスで半々な状態だ。志保と新一応援派と蘭と新一応援派。

「宮野さんかな」

「蘭ちゃんじゃない？」

蘭は少し戸惑いながら、顔を赤らめる。志保は本に没頭しつつ、聞き耳もしっかりと立てていた。

「毛利でいいんじゃない？」

「宮野さん読書中だしね」

「悪かったって！それより何で俺が王子様役なんだよ？」

「さあ？寝てたおバカさんが悪いんじゃない？」

「オイ、おバカさんって俺かよ？」

「他に誰がいるのかわからないわ」

口論？をしながら、そんなわけで、二人は劇の練習を阿笠博士の宅でやっている。

新一はさっきからグチグチ文句を言っていて、練習になっているのかわからないが。

「人の気も知らないで」

「あ？なんか言ったか？」

ふと志保が呟いた言葉は、新一に届きはせず、ホツとする志保。

新一から付き合えと言われて、嫌々やっている自分の身にもなってほしい。

志保は、そんなことで気が乗らないわけではない。

結局ヒロインは蘭で決まった。

別にいいことか？そんなはずがない。

王子様のお姫様役なのにもかかわらず、それにキスシーンがあるからだ。

この劇には『キスシーン』があるのだ。

一番最後に。園子はフリで終わらせるなどと言っていたが、本当にやっちゃいそうだ。新一の場合なら。

新一と蘭…お互い好き合ってるんだから、別にいい話なのだが……。 (やっぱりダメよ…)

二人のそんなこと、見届けたくない、させたくない。志保の忌まわ

しい恋心がストップをかけたがる。

「推理モノがよかった…」

新一は練習をしている最中で、肩を落とす。

「あなたが起きてたら、何か変わってたかもね」

新一はパラパラと台本をめくりながら言った。

「もし推理モノで俺が主役だったら、オメーも出れたのにな？」

「え…？　なんでよ？」

「俺のパートナーには宮野しかいねえじゃんか」

まったく志保にとっては、こういうのが。

（心臓に悪い…）

顔を少し赤らめた。

その後も新一のやる気のなさから、まともな練習にならなかった。

志保は棒読みながら、齒の浮く台詞を言っているのに。

好きな人とラブストーリー…：…こんなに嬉しいことないはずなのに。
と志保は思った。

姫と王子（前編）（後書き）

意味わからない文になりました、すみませんでした。
2話なので、前編と後編にしました。

次回もよろしくお願いします。

姫と王子（後編）（前書き）

サブタイトル変更しました！

中身は同じです。

前サブタイトルは関係なくなってきたので…

姫と王子（後編）

「なんだ、この数…」

新一は、目の前にいる大勢の群衆の多さに圧倒された。文化祭当日となり、20分ほどすれば、2－Bの出し物の劇が始まる。

新一は舞台袖で外の様子を伺っていた。が、見れば人・人・人…。さすがにこんなに客がいるとは思っていなかった。隣にいた、監督の園子が言う。

「『王子と姫の甘く切ないラブロマンス！』ってめっちゃくちや宣伝したんだから！これくらい来なきゃ張り合えないわよ。それに工藤君は、学校の人気者だから。それ見たさにこの数よ」

「…園子、キスシーンとかやんなくていいんだよね？」

「別に蘭とやりたきゃ、やっちゃっていいのよお？キ・ス」

嫌味なくらいにんまりした顔の園子に、新一は顔をしかめた。それと同時に、

（何でコイツが監督なんだ）
と思った。

新一自身は、フリで終わらせるつもりだ。前の新一ならやっていたかもしれないが。事実、黒衣の騎士の時もかなり未遂だったのだ。今は蘭じゃなく、好きな人が別にいるから。新一は、何気にファーストキスだったりする。

そんなことを考えていると、新一の耳に園子のバカでかい声が響いた。

「ええ！蘭が来れない！？」

そんな園子にたじろいだ衣装係の一人。

「う、うん…熱出したらしくて…」

「そんな…！？どうするのよ。こんなにお客さんいんのに、今さら中止できないわよ」

体育館のステージで準備をしているクラスメートも、園子の声が聞こえたのかザワザワし始めた。

新一は蘭の熱が心配だったが、内心嬉しくもあった。あの甘い劇をやらずに済むのだから。

しかし、人生とはそう上手くいかないものだ。

「誰か代役できる人いない！？」園子はステージで声を張り上げるが、

「そんな…台本覚えてる人なんているわけないよ」という声がちらほら。

「あーもう！」

園子が苛立つ。その時新一はピンと来た。できるヤツいるじゃねえか！新一は笑いながら園子に言った。

「宮野ならできるよ」

「え？宮野さんが？」

「ああ。毎日練習に付き合ってたから」

ここで園子の元気が戻ってきた。

「そうなの！？よし、誰か！宮野さん連れて来て…！」

しばらくして、志保が手を引っ張られながらやって来た。大分走っ

たのか、少し汗をかいている。

連れて来た男子は、志保を園子の前に突き出した。かなりの息切れ。
「なんなのよ、一体…」

志保は顔をしかめて言った。しかし園子はそれを完全無視し、ドレスを着させて、と衣装係に目で合図をした。

志保は個室に押し込まれ、目隠しをさせられた。

「ちょっと…！」

勝手に服を着替えらせられる。もちろん女なので一安心だが。訳がわからない志保が、目隠しを取られた頃には……。

「わぁ…宮野さんキレイ！可愛すぎる！」

「本当だ！これは工藤君、惚れちゃうかもねー」

という声が、着せ替えをした人から聞こえた。

志保は自分の姿を確認すると、目を見開いた。

「な、な、何よこれ…」

水色と白の華やかなドレスを身に纏っている自分がいるのだから。

戸惑っている志保に、向こうから園子が近づいてきた。

「蘭の代役頼んだわよ、ユリ姫！」

「…な！？」

「宮野さん、お願いね！あなたは新一君の推薦なんだから！」

「は、はい！？」

園子の説明不足&多少の嘘まじりのせいで、状況が掴めない志保だったが、

（工藤君の推薦って……）

少し胸が高鳴った。

そんな中、アナウンスが流れた。『まもなく、2－Bの劇”ユリ色の真実”を開演いたします』

園子はアナウンスを聞くと、ニコツと笑う。

「よーし、早くスタンバイして！」

(そういうこと…)

志保はなんとなく状況が分かってきた。ユリ姫をやる蘭さんが休んだらしい。それで志保が代役をやるということ。

志保が位置につくと、舞台袖から新一が自分を見ているのに気づく。彼の衣装姿は、幕のせいで見えなかったのが、志保には少し残念だった。何故か新一は笑っている。

(あなたのせいで、この状態なんだけど)

そう志保は思った。目立つのは苦手な方だからだ。もういい。今さらだ、やるしかないじゃないか。

新一が、「がんばれよ」と口パクで言っていたことに気づいた志保は微笑んだ。

一方新一は、志保のお姫様の姿に見とれていた。

(アイツ……かわいいーじゃねーか)

が、それは誰にも知られることはなかった。

…志保は、結局のところ、台本は丸暗記と言っても過言ではないくらいに覚えていた。毎日毎日同じ台詞を繰り返していれば、覚えるのも当然。

ビー…

「2－B劇『ユリ色の真実』を開演いたします」

もう一度アナウンスが鳴り、体育館内が暗くなった。さすがの志保も緊張する。

———ユリ色の真実：

ある王国：スペア王国に、ユリ姫というそれはそれは美しいお姫様がいました。そのユリ姫は、なかなか素直になれないお姫様でした。ユリ姫の父は、スペア国の拡大化に力を入れており、争い事の多い国でした。

姫は今日も窓辺で外を眺めて、ため息をついていました。———

「ああ、神様：なぜこの世では、みな争いたがるの？」

ライトを浴びた志保が言うと、客席では歓声が飛び交う。

「あの人、きれー！」

「あれ、2年の宮野先輩じゃない！？」

「代役か？ま、可愛いからいいか」

それは無視し、話は進む。

———ユリ姫は、争いが嫌いでした。それは姫の姉が、争いのために命を落としてしまったからです。それからユリ姫は、抜け殻のようないくつ日も過ごしていました。

そんな姫の心の傷を癒せる者が、たった一人いました。

隣にあるヘリング国、王子のシンイチでした。二人は昔からの幼なじみです。———

（何で工藤君だけ本名なのよ？）と志保は思った。が、また演技を続けた。

———シンイチ王子は、ユリ姫に恋をしていました。ユリ姫もシンイチ王子が好きでしたが、中々素直になれず、いつも冷たい態度を

取ってしまいます。

二人は友達以上恋人未満でした。――

この話はまるで、新一と志保を描いているように似ている。

――さて、今までそれでよかったのですが、その二人にも悪運が立ち込み始めました。スペア国とヘリング国で戦争の渦が巻き起こっていたのです。――

「ユリ姫！僕はスペア国と争いなどしたくない！」

「…私だってそうよ、けどね…世の中には仕方のないこともあるのよ」

――シンイチ王子は、どうにかしてスペア国との戦いを防ぎたかったのですが、天は誰の味方をしたのでしょうか…？ユリ姫の他国の王子との婚約話まで持ち上がり始めました。――

「遂に明日か…ユリ姫の婚約は……。この想いを伝えなきゃ一生後悔しちまうよな」

ここでシンイチ王子の口調が変わった。新一が台詞をとちったのだ。ついつい自分の言葉に変えてしまっている。

――そしてとうとう…ユリ姫は今日、婚約する国の元へ旅立つこととなりました。

シンイチ王子は急いでユリ姫の乗る馬車へと走りました。敵対国の王子が、ユリ姫を追いかけて来たということで、結婚する相手国の護衛は剣を抜きました。――

「!」

ユリ姫は馬車の中、何が起こったのかわからない。シンイチ王子も剣を抜くと、飛び上がり、男達を気絶させた。体育館いっぱい盛り上がる。

「シンイチ：どうしてここに……?」

ユリ姫は目は見開き、馬車から降り立った。

「俺、オメーが結婚するなんて許せなねーから」

新一は、完全に自分の口調になってしまい、園子が袖で頭を抱えている。しかし、客は逆に興奮しているようだ。

「え…」

ユリ姫の頬に赤みがさす。志保以外、これは演技だと思っているだろう。

「俺、オメーが好きだから」

シンイチ王子はユリ姫を抱きしめた。

観客は絵になるような二人の演技に吸い込まれている。

「…でも……わたしにはっ…」

「国王のこと気にしてんだろ?…そういうの抜きにして、オメーの本音を聞かしてくれよ…?」

この劇を見ている人も、新一自身も、台本か本音かわからなくなってきた。

「……大好きよ」

ユリ…いや、志保は新一の服を握り返した。ぎゅっと、強く。しばらく抱きしめ合って、志保自体意識が飛ぶくらいドキドキしている。

そつと顔をあげると、新一の顔が近づいてきた。志保は瞼をゆっくり綴じた。

(……!!!!)

志保はビックリした。綴じた瞳のせいで、見たわけではない。けれど、確かに唇に感触がある。

(フ、フリじゃないの!?)

志保は異常な心臓の波打ちを確認する。パニックで頭が回らない。

(私…工藤君とキ…キ…ス)

新一はもちろんファーストキス。

客席では、志保の胸の中と比例するように盛り上がる。

「わあ! キ、キスしてるよ…」

「え、あれ…マジで!？」

「いいなあ〜!」

そして新一の顔が離れる。新一の顔は真っ赤だが、志保はそれ以上にまっかだ。

ドキドキしすぎて台詞が出て来ない志保に、新一が助け舟を出す。

「姫……僕はあなたを愛しています」

新一のほほ笑みに、また志保の胸は高鳴った。コイツは本当に悪魔なのか。

(演技なのに…バカみたい…)

紙の上の言葉なのだが、志保はこれが本当だったら…と思った。

志保は、新一にほほ笑い返した。新一の頬がほんのり染まる。

ここで、また朗読が始まった。劇の終わりを告げる合図。

——ユリ姫は素直になれたようです。

それから、ユリ姫の結婚も取りやめになり、スぺア国とヘリング国との争いもなくなりました。

今は二人のことを、世の中では夫婦と呼びます。——

体育館の明かりがついた。幕は静かに閉まっていく。

幕を挟み、パチパチと多くの拍手が聞こえると、新一はニカッと笑ってみせた。

「大成功みてーだな！」

端正な顔立ちに、端正な唇。その斜め上にあげられた口元を見ると、意識して頭から湯気が出る志保。

裏舞台で劇を見守っていたクラスメートなどが、二人に走り寄ってきた。

「わ！本当にキスしたでしょ、工藤君！」

「客の過半数、志保さんに嫉妬してたわよ。工藤君人気あるもの。逆に言えば工藤君にも。志保さんも大人気だから」

「何やってんだよ、工藤。この色男っ！」

バシッと新一の背中を、護衛で新一に切られた役の男が、勢いよく叩く。

園子は腕を組んで、新聞を丸めて、監督らしく言った。

「工藤君！！あなた、よくやったわね！大好評よ！」

そして宮野さんもありがと！あなたの美貌のおかげもあったわ」

「私もありがと……結構楽しませてもらったわ」志保は言った。

（工藤君とやれて、楽しかった…）

密かな願いが密かにに叶った。

『楽しかった』の言葉を聞いた新一は、安心して微笑んだ。

そして話は志保のドレス姿へと持っていかれた。

「宮野さん！キレイっす！」

男子の一人が拳を振り上げて絶賛する。

「そう、ありがと…」

礼を言う志保を、新一は複雑な目で見た。それに気づいた園子は、話題を変えた。

「よし！みんな教室でプチ打ち上げしよっか！」

みんな打ち上げに流されていく。高校生もやはり単純なものだ。ほとんどの人々が舞台裏から去って行ってしまった。

残るは新一と志保のふたり。先に口火を切ったのは、志保だった。

「私たちも行きましょう？…いい加減この格好は恥ずかしいし」

クールな印象の自分が、こんなヒラヒラしたドレスを着るなんて。

志保は、もう一度着た服を見た。

「そうかあ？」

「蘭さんほどは似合わないわよ」

「宮野、オメーな…めっちゃくちゃ似合ってるぞ」

「お世辞をありがと」

「バ―ロ、違うっての。でもさっきは焦ったぜ」

「何がよ？」

「あの台詞、全部アドリブ。ど忘れしたから」

「どこから？」

志保は驚いた。新一に、あんなアドリブの才能があるとは。台本か
と思ってすっかり聴き入っていた。

「口調が変わり始めたところから」

と言うと、新一は志保に近づいた。顔との距離が数センチしかなくて、志保は体温が5度も上がった気がした。

（また、されるのかしら）

志保に良からぬ考えが過ぎったが、それは裏切られた。

新一は口を耳元に移して囁いた。

「さっきの台詞、全部本音だから」

「蘭さんへでしょ」

志保はからかってみる。本当は、胸をグサグサと刺される気分だったが。

「宮野へのだよ」

それだけ言うと、新一はみんなの後を追って行った。

志保がしばらく顔を真っ赤にして立ち尽くしていたことは、言うまでもない。

姫と王子（後編）（後書き）

長かったですね…。

途中で意味わからなくなった方、大変多いと思います。

国の名前とか、劇の話はありきたりですみません。

新一の役柄の名前が思いつかなくて、シンイチ王子になりました。
ただカタカナにただけです。

ユリ姫は、志保ちゃんに似合うかな！と。

次回はそろそろ寝台シリーズに戻りたいと思います。

寝台列車の殺人（４）（前書き）

すみません。意味がわかりません。

寝台列車の殺人（４）

しばらくしてやって来たのは、桜井が見つけたリストの二人。

一人は眼鏡をかけた、真面目なサラリーマン風の男。目が斜めに吊り上がり、灰色のスーツを着用。サラリーマンの印象をより引き立たせている。

もう一人は、そばかすを頬につけ、少しおどおどした印象がする女。白い無地のＴシャツに、黒のシックなスカート。内気そうなイメージとは反し、清楚で気品溢れる服装だった。

「では、あちらが有村秀生さんで、こちらが真藤千鈴さんですね？」
目暮は男と女を交互に見て、桜井に問うと「はい」と桜井は頷いた。

「すみませんが、私はなぜ呼ばれているんですかね？」

有村が、くいつと特徴的な四角い眼鏡を小指で上げる。小さく消えそうな声で、真藤も続いた。

「わ、わたしも…」

「高木くん、説明しなかったのか？」

「いや、一応一通りしましたけど…」

高木は関係者と思われる二人を交互に見る。

「まあいい。オホン…ええと、あなた方は平野謙蔵さんをご存知ですか？知っておられていると思いますか？」

「は…はい…」

「まあ、そうですが」

「実は、その平野さんが殺害されました」

「えっ」正反対らしい二人の声がそろった。

「そ、そんな…謙蔵様が…」

真藤の手は口元で微かに震えている。一方横では有村が真っ青な顔をしていた。口も利けないようで、何も発言しない。

目暮と新一と志保は、その二人の様子をしつかりと観察していた。
(怪しいな…) 目暮はもう既に目星をつけたらしい。強盗ではなく、
この中にいる犯人による殺人だということのか。

「ではご存知なかったのですね？こんな騒ぎになっていたのに」

「わっ、わたし部屋で寝てましたので…」

「私も同じく部屋で音楽を聴いていました」

「そうですか。まず、お二人にご質問がいくつかありますから、ご協力ください」

「それは、私達を疑っているということですかね？」

「はいいえ。もう少し被害者の情報がほしいんですよ。
まず、お二人と平野さんのご関係は？」

初めに口を開いたのは、そばかすな千鈴だった。目暮の疑いの目に多少ビクつきながら。

「私は真藤千鈴といいます。亡くなられた謙蔵様のメイドをやらせていただいています…。なぜ列車に乗り合わせていたかといえば、謙蔵様の休養のお付き合いで…」

「へえ、メイドさんですか。後でもう少し聞かせください。次は…有村さん」

新一は警部に代わって、話を進める。目暮警部はジロリと横目で新一を見た。もちろん新一は全く気にしない。

「私は、この…平野社長が経営する銀行で働いている者ですよ。会社で休みをもらったので、北海道でも旅行しようかと思ひましてね」
有村は眼鏡をくいと小指で上げた。細く吊り上がったキツネ目は、こちらを見下しているような感じを受ける。高木は心の中で威嚇していた。

「そうですか。……じゃあ千鈴さん。平野さんの性格を教えていただけませんか？」

「…謙蔵様は、とにかく自由奔放な方でした。やろうと考えたことは、行動に移す、冒険家であり——お金もそのためには惜しみませんでした…」

千鈴は一旦言葉を切った。ここまでの話の中で、平野謙蔵という男の人物像が出来上がってきた。

千鈴は何やら不思議な笑みを浮かべた。

「そして何より…女遊びの好きな方でしたわ…」

新一の目が一瞬鋭く光った。そんなことは、志保しか気づかなかった。

「へえ、なるほど…」と呟きながら、新一は警部に近づいた。

「警部、あとは任せました。僕はちょっと調べたいことがあるので」

あ…おいっ。と目暮は慌てて言ったが、新一と志保は二人で去って行ってしまった。

離れて来た二人は、謙蔵の死体をまじまじと見つめていた。死体にはナイフが胸に突き刺さったまま。上に掛けてあった毛布は、新一が取っ払ってしまった。

片方の手をポケットに入れ、もう片方は顎に。いつものポーズで考え事をする新一の横にいる志保は言った。

「平野さんは何故B寝台で殺されていたのかしら？」

「…そこが謎だよな。見つけた食事券は、A寝台に泊まっている人しか手に入れることが出来ない代物だ。ここは平野さんの部屋じゃないとして…何故B寝台にいるのか…だ。104号室は予約した人もいないらしい。発見されたのも8時で、列車の車掌だった」

新一は少し間を入れた。

「俺が思うに、この列車にはこの事件に関係のある人が、他に乘っていると思うんだよ。まだいるはずなんだ……そしてその人達を含めた中に、犯人が……。だってほら、この事件はさっきも言ったように物取りじゃねーだろ？」

千鈴が言っていた平野謙蔵という人物は、金遣いが荒く、冒険心があり、やると決めたことはやる頑固者——そして女たらし。世間一般的には恨みを買う性格の人物らしい。

加えて銀行会社の社長とくれば、上記のことがより一層深まるだろう。

「オイ、宮野……これはもうちょっと調べないといけねーみてえだぞ」

そんなこと言う新一の顔に一切不安はない。むしろ楽しそうに輝く顔。志保はフツと笑った。

「宮野はもうちょっと死体を調べてみてくれ。何か見つかるかもしれないねーから。あと、俺らの中での容疑者からも目を離すなよ」

「ハイハイ。わかったわよ」

志保は両手を小さく上げて、ふっとため息を吐いてみせた。こんなことを言いつつ、しっかりやってくれる志保を、新一は信頼している。

「あ、それと」冗談地味た雰囲気から一変、突然真剣になる新一。「さっき警部には言わなかったんだけどよ。食堂に行く前、宮野にぶつかってきた小柄な男……忘れるんじゃないぞ」

（小柄な男ねえ…）

新一が忘れるなど言っていたということは、事件に何か関係があるのか。志保はもう一度あの時のことを思い返してみた。

（…そういえば、あの男はB寝台の方に向かっていたわね…）

志保は死体を前にしゃがみ込んだ。

死人を見ても特に平気。今までにも何人も見てきた。だから新一は現場に連れて行きやすいのだろうか。女の子らしくない。しかし、それでもいい。

信頼されている相棒なのだから、私も何か役に立たなければ。

志保が見るに、状態からすれば、死亡推定時刻は5時から6時半の間である。やはり死因は、胸を刺されたことによるものだ。

（あまり抵抗した様子がないわね）

服や部屋の中も荒らされた様子はなく、近くに置いてあるアタッシェケースの中の物が周りに散乱しているだけ。ケースの中身は男物で、服のサイズからして、肥満体の平野に間違いない。

そして、平野は部屋の中央で亡くなっていた。

（なるほどね…顔見知りの犯行ってわけ…）

新一は、列車の窓を覗いた。

どの辺りまで来たのだろうか。あと10時間で北海道に着く…が、何度か駅で止まる。犯人が車内から下りる可能性は大。それまでに見つけなければならぬ。

外の景色が速く速く流れていく。ガタンゴトン、列車の走る音。シユンシユンと風を切る音が聞こえた。

「まずは聞き込みか…」

コナンの頃…少年探偵団の一員だった頃から、捜査には聞き込みが第一なのは心得ている。よく子供の身体で町ん中走り回ったけな…などと、思い出に浸ってしまう新一。

発見現場というB寝台104号室は、列車の一番端である。なので、聞き込むのはほんの数室に限られる。それは逆に不幸でもあり、目撃者が少ないという点がある。

新一がそこに向かおうと踵を返した時、何やら物陰が見えた。…人だ。

新一は瞬時に陰に隠れる。ピポパポと機械音が聞こえた。

（携帯か？）

しかし話し声は聞こえない…メールなのか。

音も消え、人が立ち去ろうとする。新一は身体を壁により寄せ、知らぬふりをしてみせた。

「…ふうん…なるほどな」

しばらくし、新一は意味ありげに呟いた。メールをしていた人物は、四角い眼鏡にスーツ……有村だった。

新一は個室で控えていて、警部達の下にある千鈴に近づいた。

個室には有村もいた。

千鈴はちょうど外を眺めていたので、新一に呼びかけられると、ひどく驚いた。

「あつ、なんででしょうか？」

「緊張しなくていいんです。色々聞きたいことがあったんで。…平野謙蔵さんのこと、有村さんのこと…そして、あなたのこと」

新一は最後に含みを持たせて言ったが、千鈴は少しも動揺しなかった。

「はい、なんなりと。私も、謙蔵様をこんな目に遭わせた犯人を早く捕まえてもらいたいので」

新一は千鈴の耳元で、小さく呟いた。千鈴は少し顔が赤くなる。

「…そうですね。まず、あの有村さんのイメージを教えてくださいませんか？」

「あ、有村さんですか！？有村さんは今日初めてお会いしましたんですけど、あまり…いい印象は…。ここだけの話、先程も携帯をこそこそいじっていて…なんなんでしょうか…？」

「あ、僕も見ましたよ」

「そうなんですか」

「では、平野謙蔵さんのこと…どう思っていましたか？」

「大事な…大事な…ご主人でした。わた…犯人が許せません」

千鈴は下を俯き、手を握り締めた。拳が身体の横でふるふると震えている。新一はごくりと唾を飲み込んだ。

「ねえ」

そんな中、後ろから声がかかった。振り向くと、志保が腕を組んで立っていた。ほんの少し不機嫌なオーラを出しながら。

「おわっ！びっくりした！」

シリアスな雰囲気、新一の素っ頓狂な声がかぶっ壊していく。

「そんなに驚く必要ないと思うけど」

「…オメー何怒ってんだ？」

新一は首を傾げながら、志保の顔を覗き込んだ。

志保はただ…千鈴と話している新一に妬いていただけなのだ。だが、それを言うわけにもいかない。新一の顔が近すぎて、志保の顔が赤く染まっていく。

「フッ」

「「え？」」

新一と志保は千鈴を見た。今の笑いは内気な千鈴だったのだ。視線を浴び、千鈴は目を見開いた。

「なっ、なんですか？」

「いや…どうして今笑ったのかって…」

「べっ、別に……ただ、可愛いなあって」

そう説明する千鈴の言葉の意味がわかった志保は、顔を背けた。新一だけは理解できなかったらしい。が、気を取り直して話を戻した。

「それで…何だよ、宮野」

「事件のことよ」

「何かあったのか？…あっちで聞かせてくれよ」

新一は志保の手を引いて、人がいない隅っこへ歩いた。

「大したことじゃないわ。死亡推定時刻のことくらいよ」

「いや…結構大したことでもねえぞ？重要なんだ、聞かしてくれよ」
新一はニカッと白い歯を見せて笑った。

「大体…5時から6時半ってとこね。私達が食堂に向かったのが7時くらいだったかしら？」

「なるほどな…。変な男に会った時にはもう殺されていたってことか」

志保にはわかっていた。新一には、もう犯人の目星がついていることに。新一の表情が、少年のように輝いているから。

ふと、目の前の少年が方向を変え、歩き出したので、志保も急いで後に続いた。近づいたのは、桜井だった。

「……うーん…」

「どうしたんですか、桜井さん？」

唸る桜井に新一は話しかけた。

「あ、工藤新一君…！僕は嬉しいよ！日本警察の救世主と謳われる君と会えるなんて！」

当の質問には答えず、桜井は新一の手をぎゅっと握り締めた。目がキラキラと輝き、顔を紅潮させて。

「ありがとうございます。…それで…」
遠回しに新一は促した。

「ああ、はいはい。ごめん、話をそらして。えっと…唸ってたことかい？…さっきあの太った警部さんから貰ったリストの中に…知ってる名前がある気がするんだよなあ…」

あやふやな解答の桜井は、頭の後ろを掻いて、ごまかすように笑った。

しばらく間のあった後、形のよい新一の口元が斜めに上げられた。

「解けたのね…」
志保が言った。

寝台列車の殺人（4）（後書き）

本当にすみませんでした。

久しぶりの更新で、これか！っていう感じですよね…。

初めてのミステリー。全く意味がわかりません。

トリックも特になく、謎もあまり散りばめられていなく、勝手に知ったかぶりの登場人物達…。

焦ったり、自分でも意味不明な気持ちもあり、投稿してしまいました。

この話に、できれば感想お願いしたいです。ダメ出しお願いしたいです。

恋愛要素が全くなかったです。

次回は短編です。

ふたり乗り（前書き）

なんともいえない関係の二人です。短編です。

ふたり乗り

夏の太陽がジリジリ照り付けるコンクリートの道路を、汗をただただ流しながら歩く。歩くというか、足を懸命に動かしているだけ。歩いている感覚は一切ない。

通学路。周りに人は、お昼という時間のせいかな誰もいない。今日は、夏休み開きの終業式ということで、みんな早上がり。今は12時半ほど。しかし志保は日直だったが為に、下校が遅くなってしまった。

半袖のブラウスも、緑色のネクタイも、スカートも。全部脱いでも足りないくらいの猛暑日。逆に脱いだら暑いかもしれない。

（さすがに倒れるかもね）

元々体が貧弱な上に、夏が苦手な志保には堪える。

家に帰ったら冷たい飲み物が飲みたい。と志保は汗を拭った。

しばらくし、一人ぽつりだった熱気の漂う道路を、後ろから自転車走ってきた。タイヤの回る音、ペダルの漕ぐ音でわかる。

（通りすがりのお爺さんかもしれないのに…）

その音が近づいていく毎に、何故か心拍数が上がっていく志保。なんとなく気づいていたのかもしれない……アイツだと。

「きゃっ」

ふいに冷たい物体が、志保の頬に当たり、奇声を発した。隣を見れば、自転車に乗ったまま止まり、志保の横でニカッと笑っている新

一がいる。

「冷てーだろ？」

「とんだサプライズね」

志保は冷たい頬を手でさすった。とかなんとか、新一が自分の頬に冷たいコーラを当ててくれたことは、かなり気持ち良かった。

「博士の家に帰ってから飲もーぜ。ほら、乗れよ」

新一は当たり前のように、自転車の後ろに乗るように促す。

（当たり前ね…）

志保は不覚にも嬉しく思った。乗させてもらうことにすると、荷台に腰かけた。

「ええ。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうわ」

家までこんな地獄の鍋底ロードを歩くななんてまっぴらだ。それに…後ろに乗ってみたい。

「よし、昼飯タダな」

「あのねえ…」

「ほら、鞆。よこせよ」

「ありがと」

志保が鞆を差し出す。新一は受け取ると、バスケットに放り投げた。

そして、自転車は走り出した。

新一の背中意外と広くて、やっぱり男の子なんだな、と改めて思ったりする。半袖のYシャツが、太陽に照らされて真っ白に光る。

「今日は何で自転車なのよ？」

「暑かったから。：オメー倒れなくてよかったな」

新一はそのあとに『貧弱だから』とか『オメー軽いな』とか付け加えた。

走る度に吹く風が、心地よく髪を靡かせていく。

こんな素晴らしい席も、普段は蘭さんの物であり……今日くらい、私が独占したっていい。

志保はそう思った。

性格に似合わないとは知りつつも、志保は工藤君のYシャツの裾をぎゅっと握り締める。

「気持ちいいーな？」

新一が笑った。

「そうね」

端から見れば、カップルにしか見えないことを、二人は知らない。

ふたり乗り（後書き）

特に展開も無く…（？）

ありきたりな短編でした。

いいですよ、新一と志保ちゃんは。大好きです。

次回は寝台シリーズ終了です。やっとかーって感じですよ。

次回も駄文に見舞われるかもしれませんが、よろしくお願いします。

先輩の大事な人

私は、工藤新一君のことが好きです。

工藤新一君と同じ帝丹高校に通っていて、いっこ下の私は、木下千穂といえます。

いつからだっけ……？ 工藤先輩が好きだって思ったのは。

ふとしたことだった。

去年のこと。私は志望校だった帝丹高校を、友達と見学に来ていた。ますます通いたくなるなって思いながら回って、帰ろうとした時。グラウンドで騒がしい声がして、何かと覗いてみると、サッカー部が練習をしていた。

サッカー観戦が好きな私はつい見入ってしまつて。その中でも特に目立つ人が一人……いた……。

一人でプレイヤーを何人も抜いて、ゴールの前に立ってシュートを決めた。

『あの人誰だろう？』

『あー、あの人？ カッコイイよね』

そんな会話だけで、その時は済まされたけど、私の頭から離れることはなくて。

ああ……一目惚れだなあ。

って感じた。勉強もヒートアップして、合格することができたんだ。本当にあの人のおかげ。

先輩の名前が『工藤新一』だって知ったのは、ニュースを見て。私が入学してから一週間。先輩が探偵として活躍するようになってからだった。新聞やテレビに工藤先輩の顔アップがでかど掲載されていてビックリした。

嬉しい反面、知り合う前に名前を知ってしまったのは、ちょっと残念だったし。より遠くに行ってしまったのも、寂しかった。

私のこと…工藤先輩は知らないんだよね…

用があると言っては、2年生の教室に遊びに行つて。廊下ですれ違ふ度にドキドキして。

そして、今日も廊下へとやって来ている。

わっ！向こうから工藤先輩がやって来る！

あくびなんてかいて、眠そうに抱持つて。こんな時間に登校つて…
…事件だったのかな？疲れてないかな…？

ぽーっと見とれていると、後ろから走ってきた男子にぶつかられた。持っていた本がバサバサッと落ちる。

男子達（といっても先輩）は、謝りもせず振り向いただけで、どっ

かへ行ってしまった。

はい！？謝ってよ！！

もうムカムカしながら、しゃがんで本を拾う…と、手が見えた。

顔をあげると、く、く、工藤先輩！

顔の温度が急上昇。

や、や、やばいです。

目の前に工藤先輩がいる。

驚きやらドキドキやらが混ざって、勢いあまって、尻もちをついた。

「オイ、大丈夫かよ？」

「は、はい！大丈夫ですっ」

「お前さ……ホームズファンか？」

工藤先輩は、私の落とした本を見ながら言った。

まともに見れない工藤先輩の目が、キラキラ輝いている。

「は、はい…」

「お前もか！？俺もすっぱーファンなんだよ」

普段は比較的大人っぽい工藤先輩が、少年のようで。か、か、かわいい。

「お前、1年生だよな？名前なんていうんだ？」

「き、木下…千穂…」

「木下か。俺は2年の工藤新一。よろしくな」

工藤先輩の名前を、私は知っています。

工藤先輩が私と話している幸せに溺れる。といっても、私はただ受け答えしてるだけだけど。

今まで見るだけだった、雲の上の人だったけど、私の名字を呼ぶけど、会話もそう長くはない。

「じゃあな」

そう残して行ってしまった。工藤先輩の背中を見ると、少し切なくなる。

ドクン、ドクンと波打つ胸を、片手でぎゅっと掴んだ。

でもでもでも…！

顔覚えてくれた、名前覚えてくれただけでも奇跡。

工藤先輩は優しい。

…一目惚れとか、ルックスとか、何もかも抜きにして。

「好き」

それから以前にも増して図書室に通うようになった私。普段がら空きの図書室に、工藤先輩は、たまのたまーに来ることがあった。話

せる時間がある度に、来てよかったなあって思えた。
あとで聞いたけど、工藤先輩の家には沢山の小説があり、図書室にあまり来る必要がないんだって。

もう告白は間近かもしれない。

ううん。今日、工藤先輩が図書室に来たら…する。

優しいかも、気さくさも、笑顔も…大好きになってしまった。もう、胸がいっぱいなんだ。

来て

来ないで

来て

いろんな思いが頭をぐるぐる回る。けど、告白する時はきた。
扉が開いたから。

「工藤先輩…」

「あ、木下か。お前いつつもいんな」

工藤先輩に会いたくて通いつめてるなんて言えない。

工藤先輩は、Yシャツにカーディガンにブレザーを着て、マフラーを巻いて、鞆を持っていた。

もう、放課後か…帰るんだね。

冬のせいか薄暗い図書室。

私は俯いたまま、声を振り絞った。

「工藤先輩…あの…っ」

「ん、なんだよ？」

「あの…っ」

冷たい冬の風が、窓をカタカタと鳴らす。

「…好き…です」

…言った。

恐る恐る顔を上げると、工藤先輩の顔が見えた。目が見開いていた。心臓が波打つ。こんなに寒いのに、体温だけが温かいのは、緊張しているから…？

無言が続く。これが生殺しってやつなんだね。しばらくして、工藤先輩が口を開いた。

「…ごめんな」

そっか。やっぱり……そうだよな。
涙こらえろ、こらえろ。
必死に頭で念じる。目頭がぎゅっと熱くなる。

「好きなヤツがいんだ」

「…どんな…人ですか…？」

「強がりで、クールで、落ち着いていて、いつも内面を見せなくて、愛想はねーけど、本当はいいヤツなんだ……守ってやりたくなるし、俺はすっげー可愛いと思う」

ああ…本当に好きなんだ。

工藤先輩の愛おしむ目。

私には絶対向けてくれない目。

涙こらえろ。

ってあれだけ願ってたのに、頬を伝ってきた。隠すために、下を向いた。

けど、工藤先輩は気づいたんだ。私に近づくと、頭をポンポンと叩いた。

「ありがとな…」

二週間くらいして、工藤先輩が女の人と歩いているのを見た。

赤みがかかった茶髪のショートに、ハーフっぽい綺麗な顔立ち。美人な女の人。

笑って話してた。先輩がその人に向ける目からは、やっぱり愛おしさが伝わってきた。

お互い好き合ってるんだなってわかった。

工藤先輩のほうが、遊ばれてる感じなのは驚いたけど。

工藤先輩、好きです。

だから、先輩の恋を応援します。

相棒のおわり

雪の降る街を二人は歩いていった。キラキラ輝くイルミネーションを志保は、黙って見つめる。その志保を穏やかな目を向けるのは新一。周りから見れば美男美女カップル間違いないのだが、二人の関係は：相棒というもの。

今の時代、二人の男女が信頼し合うというのは珍しい。

「なんか目がチカチカするな」

「全くだわ。クリスマスだからって、こんなに飾るなんて馬鹿みたい」

志保は、新一とは目を合わせずに素っ気なく言った。

23日、しばらくしたらクリスマス。恋人達の運命の日といっても過言ではない。

二人は恋人でもなければ、事件現場の帰りというロマンチックの力ケラもない経緯で、この街を歩いている。

「お前ってさ、クリスマスなんか予定あんのかよ？」

「貴方は蘭さんと過ごすんでしょ？熱くていいわね。ちゃんとやりなさいよ」

「俺の質問に答えてねーし！」

「…ないわよ」

志保のこの一言を聞いて、新一はにんまりと笑った。志保は「なに？」と睨んだ。

「今年は楽しくなりそーだな!!」

「良かったわね」

そしてまた歩きだす二人。

「というか、私あんまり貴方と歩きたくないのよ」

「何だよ?」

「誤解されるじゃない。帝丹高校の生徒とか。こんな街なら、必ず誰かは見てるはずよ」

「そういうことか?別に俺は誤解されても構わねーけど」

新一の無邪気な顔に、志保はふうと溜め息をついた。

人の気も知らないで……清純な心と鈍い態度は、私を苦しめるだけなのに。

東京はあまり雪が降るわけではなく、志保はハラハラと舞う雪を両手で掴みこんだ。

手を開けば、丸め込んだはずの雪は消えていて。隣の彼もそんな存在だと重ねてみた。

そんな志保を、新一はじっと見つめた。新一は白い吐息を一つ吐いて、頬を少し赤らめると呟いた。確かに聞こえるボリュームで。

「志保」

志保はビクンと身体が反応した。この声が新一だということは知っている。だから胸が高鳴った。

普段呼ばれない呼び方…、特に名前だと、人は緊張するものだ。

自分の愛おしい声が、自分の名を呼ぶ。新一に顔を向けた志保は、思わず赤くなる。

ダメだとわかってる。けど、抑えが効かねえよ。

新一の顔がみるみる近づいてきて、唇が志保の唇に触れた。しっかりと感触があつて、口だけがお互いに熱い。

「俺、宮野が好きだ」

離れた途端に繰り出す新一のことば。普段は白い二人の顔も、熱く赤く染まる。志保の目は微かに潤んだ。

もう、相棒には戻れない。

道路を挟んだ道で、クラスメートの一人がこの行動を目撃しているとは知らずに。

相棒のおわり（後書き）

久々の投稿と、予告とは反した短編と、自信がないというのと……
たくさん謝りたいです。更新してない間も、お気に入り登録増えたり：見捨てないでくださって、ありがとうございます。

この作品、いろいろ設定悩んだんですが、こうなりました。続編つけた方が良い場合は、お伝えください。急遽書くとこんなことになります。

寝台シリーズとか、次回予告すると、全く更新できなくなるので、予告を無しにします。

長文でした。次回もよろしくお願いします。

名探偵のライバル（前書き）

自信ありません。

名探偵のライバル

「宮野ー！」

そう叫んで、教室を見渡した新一は、首を傾げた。
いない。いつもいるのだが、あの席にいるのだが。新一が大きな呼ぶと不機嫌そうな顔を見せるのだが。

「あれ、宮野は…？」

いつものように帰りを誘おうとした新一。もう帰ったのか？そんな早くか？新一の頭を、ぐるぐると疑問が駆け巡る。
それを解いたのは、クラスメートの男子、今野だった。

「宮野さんなら、体育館裏に行くの見たけど」

どうやら今野は、今まで外にいたらしい。体育着の首元を暑苦しそうに、パタパタ仰いでいる。ああ、そういえばコイツ体育委員だっけ。

「ああ、サンキュ！…でも何で体育館裏？」

「さあなー…、そーいや男といたっけかな」

ぽつりと何気なく言った今野の言葉に、新一は顔をしかめた。しまった、今野は口を慌てて閉じ、目線を逸らしたが、もう遅い。

「…マジかよ。俺、行ってくつから!」
「お、おう…」

そのスピードに今野はたじろいだ。新一は教室から飛び出し、気づけばもう今野の視界から消えていた。サッカー部だっただけあり、足の駿足は健在だった。

新一を見送り、教室へ入ろうとした今野を、一人の女が止めた。園子だった。

「なんだよ」

「『なんだよ』じゃないわよ! 一体どうなってるの?」

何が? なんて聞かなくても、今野にはピンときた。園子の剣幕は凄まじいもので、怒りの声がよく響く。

「宮野さんと工藤のことか」

「アンタ、蘭と工藤君を応援するんじゃないの!?!」

園子は拳まで振り上げ始めた。怒りが半端じゃねえな、と今野は思った。

帰りの時間だというのに、みんなが教室に留まっているのは、二人の口論が気になっているから。
今野は頭の後ろをかいた。

「やー、まあ別にいいじゃん」

「良くないわよ!」

放課後、園子の声が学校中を駆けた。

新一は身体を潜めていた。体育館裏の近くの木に隠れていた。表情はとても不機嫌そうに、首に僅かな汗をかいて。

あれは間違いなく、宮野だ。赤みのかかった綺麗な茶髪。

心拍数が激しいのは、走ってきたからか、緊張しているからか。

「……………たっすね」

たっすね？

離れているせいか、よく聞こえない。一言二言…一、二文字聞こえるのみだった。分かったのは男の声だということ。

「そうね…」

宮野が言う。何が『そうね』なのか。声に籠っている表情が聞きた
い。

その時、涼しい秋風が頬を掠めた。この体を冷ましてくれたら、どれだけ嬉しいだろう。

「プリントのことでさ…」

相手の男はまた口を開くと、紙をポケットから取り出した。俺はAの視力を持つ目を、じっと凝らして見てみた。

ああ、なんかモヤモヤする。

俺は柄にもなく口を膨らませた。アイツ…アイツは、確か野球部の……見たことがある。正しければ、いっこ下の一年。

あのプリントには何が書かれているのだろうか。告白の文？
探偵の勘か、男の勘かは知らないが、恐らく……あの一年は……

こんな木陰に隠れていないで、今すぐ飛び出したい。二人が笑い合う度にイライラする。

オレの知らない男と？

宮野のとなりは俺が特等席で、アイツに近い男なんて俺以外にない。宮野を一番知ってるのも、多分俺で、俺を知ってるのも宮野で。

だから俺が見ているこの光景は、夢なのかと思う。

「じゃあ、宮野先輩、また明日なっ！」

男は元気よく頭を下げると、走り去って行った。ようやく、二人の密談も終わったようだ。

ホッと息を吐くと、すぐさま木陰を飛び出した。

俺は何も言わずに、宮野の前に現れた。

「工藤君……」

特に驚いた様子もない宮野。

「やっぱり、いたの」

知ってたのかよ。少し恥ずかしくなり、頬が熱い。

「あなたひょっとしてストーカー？」

「すっ、ストーカーって！それはねーだろ？」

「じゃあ、何？」

「……………」

宮野と口喧嘩をすれば、必ず負ける。統計資料でも出したらわかるはずだ。打ち負かせるのは、この世にいないと。ここは話を転換する他ない。

「アイツ誰だよ」

「ああ、あの子？一年生の相沢君よ」

「相沢あ？」

眉の辺りにシワを寄せて、ごくりと唾を飲み込んだ。

「…どういう関係なんだよ？」

俺があまりにも真面目で気迫がはったらしく、宮野は目を丸くした。そして悪戯っぽく笑う。

「何かあったらどうするの？」

こういう顔にも、俺は虜になっているのだろうな。今度は違う意味で、顔が赤くなる。

「ど、ど、どうするって…」

どうするんだろうな、自分…

「…宮野は、俺の大事な…」

「大事な？」

「…相棒で、好きで、愛おしいヤツだから、手を出さないでもらい

たよな」

宮野を見据えていると、瞳がゆらゆら揺れるのを確認した。一応人生で初めての告白だったが、相手は全く態度にでわしなかった。

「ほら、そろそろ帰りましょ」

宮野は俺とは目を合わせずに、辺りを見回すと、歩き出した。去り行く女性の背中をぼんやり、口惜しそうに見る。

まあ…いいか。

俺は微笑を浮かべると、宮野の後を追いかけた。すると背中の方から、不器用に呟く声が聞こえた。

「…相沢君のことだけど、委員会が同じなだけだから」

宮野が顔を赤くしていたことに気づくのは、もっと先のことになる。

名探偵のライバル（後書き）

自信ありません…

当初の予定とは大幅なズレがありますね。志保ちゃんが相沢君に告白される予定だったのですが…

もしかしたら、続編あるかもです。けど、ないかもしれません。

相変わらず駄文なのに、読んでいただいている方には感謝が絶えません。

今だに新一と蘭の決着ついてないんですよ…うーん。今は日光江戸の國を舞台にした短編作成してますが、いつ載せることやら。

この小説、結構志保ちゃんいじられ体制なので、今回は新一をいじってみました。

長文でした；次回もよろしくお願いします。

校内幽霊退治（前編）

「あーあ、何でこんなことしなきゃなんねーんだよ」

溜め息混じりの声が、静まり返った校内に響いた。聞こえるのは、会話と足音：そんな状況だった。文句を言う新一の隣にいる志保も溜め息をついた。

「私だって、あなたに着いてきてこんな目に遭ってるんだから……ぐちぐち文句言うのやめなさいよ」

「へいへい」

そう、二人は学校の要望により、幽霊退治に来ていたのだ。場所はもちろん帝丹高校。

事の発端は、約一ヶ月前に遡る。クラスの大島が居残りをしていたことから。

辺りも暗くなり、時計の針も6時30分を指していた。大島はテキストを鞆にしまうと、教室を後にした。

下駄箱に向かうまでに、技術ルートを通らなくてはならない。技術ルートというのは、音楽室や美術室、技術室など、実践系の教科で使う教室が並ぶ道のこと。

朝はどうってことはないが、夜の帰り道、誰もが震えながら歩く廊下。秋分の日を過ぎたからか、陽が落ちるのも早くなり、大島は余計に震えていた。蛍光灯は廊下の端と端に二つ。薄暗く、気味が悪い。仕方なく、何も言わず全速力で駆け抜けることにした大島。男であり、柔道部に所属してはいるが、気は小さい臆病者なのだ。文化祭のお化け屋敷でさえ、気絶し、ゴールしたことがない（むしろ自慢になってきた）。

大島は走った。最後の教室の前を通り抜ける時までは、順調だったのだ。

耳から入ってくる音に気づき、思わず足を止めた。顔を向けたのは、美術室だった。

ピタッ、ピタッと。水の滴る音。そしてペチャッと液体が何かに触れる音。

大島は、暑がりのため汗をかいていたが、一気に吹き飛ぶような寒気に襲われ、

「ひっ、ひいっ」

と小さな悲鳴を上げると、下駄箱へと駆けつけた。

翌日、大島がクラスで体験談を熱弁すると、皆に笑われてしまった。大島が聞いた音は、大したものではなく、怖さのレベルが低かったのかもしれない。

『蛇口の水道から水が滴っていたんだよ。美術室だし、誰か絵を描いてたかもしれないだろ』

これが、クラスメートの見解だった。

大島の体験談の噂は、大して広まりもしなかった。奇怪な事件が立て続けに起こるまでは。

数日後、他の学年やクラス、なんと教師達まで奇怪な物や音を目撃したという。そう、幽霊までもを。

広まる噂で、学校生活に支障をきたす（授業中の話し合いなど）程にまで発展した。極度の者は、登校拒否にまでも。

ということで、保護者からの意見もあり、学校側も放っておけない問題になってしまった。校長は、我が校が誇る名探偵ということで、一番手っ取り早い工藤新一に、内密な捜査を依頼したのだった。

最近では工藤新一の再来と持て囃され、事件で呼ばれる数も増えた。いくら事件好きとはいえ、疲労が溜まってきた。

休養が欲しかったが、校長直々の頼みとあらば、断る訳もいかず、渋々この状態に至る。

「全く：探偵の仕事の中に、幽霊退治なんて項目ねっつの。：わりいな、オメーまで付き合わちまって」

考えてみれば、事件と一緒に解決してるわけで、志保も同じくらいに疲れているのだ。弱音を吐かず、いつもアドバイスや助手をしてくれるのに、新一は心底感謝していた。

「まあ、私はあなたの助手だから。大概私を誘ったのも、それが理由でしょ？」

二人は廊下などを懐中電灯で照らしながら、会話を続けた。

「それもあるけどな……、宮野がいると楽しいし、元気が出るんだよ」

ハハと新一はいかにも楽しそうに笑う。志保は内心嬉しくあり、表

に出さずにいることには、毎度のこと大変だ。

新一が、あまりにも素直に恥ずかしいことをぶつけるものだから。自分だけ意識過剰で、志保は新一をうらめしくも思った。

「でもオメー怖くねえのか、夜の学校とか」

「別に」

新一の問いに、志保は二文字で答えた。そこで、新一の足が止まり、懐中電灯で上を照らした。美術室と書かれた札がぶら下げてある。

「まずは大島が妙な音聞いた、美術室からだな」

新一が扉を開けると、志保も続いた。中には、机と白い彫刻が並べである。昼間はなんともなくとも、夜になれば形を変える：学校の中でも代表的なのは美術室だ。

「うわー、薄気味悪りー」

電灯で照らす度、彫刻がまるでこちらを見ているような気がする。他にも辺りを見渡してみるが、置いてあるのは、筆を拭いたりするための新聞紙や、絵の具、生徒たちの作品だった。志保は教室のはじにある、水場の蛇口を捻ってみた。

「工藤君、見てこれ」

「ん、なんだ？」

新一は志保に近づいた。

「…水の色を見てみなさいよ」

「あっ！」

蛇口から流れる水は、血の色に染まっていたのだ。志保はそれを手で触り、指の腹で擦った。

「血では…ないわ」

「絵の具か？」

「ええ。多分、誰かが蛇口か水道管に、赤い絵の具を入れたんでしようね」

志保は隣の蛇口を捻り、水を出すと、透明な水が出てきたので、それで手を洗った。

「おい、宮野！見てみろよ」

「え？」

新一が指したのは、黒板。宮野の身体が一瞬引いた。声にすら出なかったが。これまた同じ赤い色で、書いてある。

『出てけ』と、一言。

校内幽霊退治（前編）（後書き）

知らず知らずにこの短編、2話になってしまいました。1話で終わらせるよりも、怖いかな、というホラーに全く詳しくもない作者の勝手な理解のためです。文章力がなくて困っております。

昨日に引き続き、更新することができました。寝台シリーズどうしましょうか……次回もよろしくお願いします。

聞いてはならない寝言

「ふー、食った食った」

美味しく作られ、きれいに並べられた料理を、新一は満足げに完食した。その横に居る志保も、もう食べ終わり、一息ついていた頃。新一とは対照的に、志保はしらっとした視線を送っていた。しばらく黙っていた志保だったが、ついに口を開いた。

「何であなたがここでご飯食べてるの？」

突然の一声に、新一は目を丸くする。

「なんだ、今頃それかよ」

「…わたし、いつからあなたの食事係になったのかしら？」

「まあ、いいじゃねーか。事件が長引いて、遅くなっちゃったんだし」

そう、新一は今の今まで仕事をしていた。探偵という仕事を。もう当たり前になってしまったかの様に、授業中、新一の携帯が鳴った。もちろん警視庁、お馴染みの目暮警部からだった。そして相棒というか、助手の志保も否応なしに早退するという結果になった。

簡単かと思われた事件だが、意外の意外の平行線が続き、解決したのは呼ばれて6時間後。家に着いた頃には、時計の針が8時を指していた。

これまた当たり前のように新一は博士の家に上がり、夕飯にありついている。

「まったく：毎回付き合わされる私の身にもなりなさいよ」

「へー、へー。すいやせんでした」

投げやりな新一の応答：近頃は何度このやり取りをしたことか。

志保が嫌がるのにも訳があった。随分前から志保を悩ませるもの、恋心。蓋をしようにも溢れ出る好きという気持ち。一緒にいれたいほど、時間が長くなるほど、それは抑えが効かなくなる。

新一は蘭に何も言わないという、じれったい今の現状。いっそのこと二人がくっついてしまえば、この縛りから解放されるのか。触れたい、伝えたい、もっと近くに…。

「どした？」

志保の思考回路は、新一の一言によって現実へと引き戻された。心配そうに志保の顔を覗く新一。

「疲れたか…？ やっぱし…」

やはり振り回して過ぎてしまったか、と新一なりに反省していたのだ。

「…大丈夫よ、気にしないで」

志保は顔を背けて言った。これ以上新一の顔が近くにあったら、どうかなりそうだったが為に。

「顔赤えし：熱あんじゃねえのか？」

（あなたのせいよ…）と志保は思った。

「とりあえず、早く寝た方が良さそうだな」

相変わらず彼は優しすぎるお人よし。新一は立ち上がり、皿を片付け始めた。志保への気遣いであり、普段よりも2倍動いている。志保は新一に気づかれないように、切なく、優しく微笑んだ。

「もう二階行って寝ろよ。俺は適当に帰るから」

台所から新一の声が聞こえて、志保は「いいわよ」と返した。そして椅子から立ち上がると、自分も片付けに参加し始めた。すると後ろからそつと手が握られる。

「まず、いいから。オメーは寝てろ」

新一の手は、志保の手をしっかりと握る。真剣に心配そうな新一の顔を見ると、志保は吸い込まれそうで、大丈夫と伝えたくて。

体中の熱が手に集中する志保を、新一は二階へと引っ張って行った。寝室に志保は入れられ、静かに新一は扉を閉めた。

中で志保は息を吐いた。外で新一は顔を赤らめた。

（もう、言いてえよ…）

そんな新一の胸の内も知らず、志保はベッドに横になった。

「別の意味で疲れたわね…」

志保は余程疲労がピークに達したのか、いつの間にか眠りについていた。

一通り家事は終わった。馴れないことをしたせいで溜まった疲労により、新一はソファになだれるように座った。

もう10時。明日も学校がある、そろそろ帰らなければ、と新一は重い腰をあげた。

しかし志保のことが先程から気掛かりであり、新一は志保の寝室へと踵を返した。ゆっくりゆっくり起こさないように、ドアを開ける。小さなテーブルランプが優しいオレンジ色の光を放っていた。制服のままで、志保はベッドに横たわっている。静かな寝息を立てて。

新一は近づいて、志保の額に自分の額を重ね合わせた。

（よかった…熱はないみたいだな）

と改めて安心すると、途端に新一の胸は跳ね上がり始めた。

目の前には自分が惚れ込んだ美しい女性が寝ている。

（黙ってれば天使なんだけどな）と新一は思う。まあ、アイツの毒づく姿勢も、最近は可愛いと感じる。そろそろ自分は重症だ、新一は苦笑いした。

胸の高鳴りを必死に抑えて、男を抑えて、新一は隣に座る。

部屋に響くのは、時計の針が動く音。チクタクと一秒一秒、時間を奏でる音。

「好きだ」

独り言のように新一は呟いた。ああ、コイツが寝てれば、こんなにも簡単に言える言葉なのに。

「…ん…」

志保が小さな声をあげた。新一の身体が驚きで制止する。

「…くど…う…くん」

とぎれとぎれの志保の声に、新一は首を傾げる。

「…どうかしたのか？」

問い掛けてみるが、応答なし。

寢言かと、新一の緊張がするっと解けた。が、志保の寢言に自分の名前が登場してきたことにより、続きが気になった。

新一は志保に顔を近づける。次の瞬間、志保が寢返りをうった。それが故に、二人の顔の距離は数センチと化した。

新一の心臓はおさまることを知らない。確かにはっきりドクンドクンと聞こえるのだ。

『キスしたい』いけないとは承知の上。だが衝動に駆られる。新一の目に映る、志保の唇が微かに動いた。

「…愛し…てる…」

ぽっかり開いた新一の口元も次第に微笑みへと変化してゆく。

「俺も」

優しくそう囁くと、新一は志保の髪をさらさらと撫でた。

次の日、新一は上機嫌に、何も知らない志保を思いつきり抱きしめてやった。

聞いてはならない寝言（後書き）

約一時間で書き上げたものなので、最初の方は文章不足かもしれません。

気がつけば「彼のとなり」読時間もこんなに来てました。読んでくださっている方には感謝が絶えません。新一と志保ちゃん…どっちも大好きです。

次回は幽霊退治の後編です。次回もよろしく願います。

寝台列車の殺人（5完）（前書き）

またもや予告とは違い、申し訳ないです…
グダグダな文章を覚悟して、ご覧になっていただけると嬉しいです。

寝台列車の殺人（5完）

高木刑事から耳打ちをうけた工藤君は、フツと笑った。

これで確信がより強くなったのか。キラキラと輝く彼は、私が大好きな顔をしている。

「関係者を集めてください」

工藤君はそう言うのと、私に向かって笑いかけた。

事件の関係者達が、ぞろぞろと現場に入って来た。不安そうな面持ちなのは、桜井と千鈴と有村の三人。目暮警部はどちらかといえば、楽しそうだった。

ここに呼び寄せたのは、そう…工藤君。

「犯人が分かったんだね!？」

目暮警部が単刀直入に言った。その興奮しきった顔は、早く真相が聞きたいという気持ちを表わにしていた。

「ええ、まあ」

工藤君はいつもの自信たっぷりとした感じ。

「早く教えてくれよ、もったいぶらずに」

「そう焦らずに：皆さんで、ゆっくりと順を追って、話していきま
すから。」

さあ、説き明かしましょう。今夜起こった殺人劇を」いつものキザ
な言い回しも、今日は控えめだった。

「まず事件を振り返ってみましょう。」

午後8時に平野健蔵さんは、この現場で死体となって発見されまし
た。発見者は車掌の一人だったそうです。死亡推定時刻は、午後5
時半から6時半と、俺の相棒は言っています（コイツの言うことは
信用できるんで：）。

気になることがあります。午後7時：俺と宮野は、夕食をとるため
に食堂へ向かっていました。その時、前から宮野にぶつかって来た
男がいました。男は、小柄な身体にベージュのコートに帽子、マス
クで顔を隠していた。そして何も言わず走り去って行きました。と
ても急いでいる様子で：

話は、平野さんが発見されたところまで戻ります。

平野さんは心臓をナイフでひとつきだったので、即死だと見られま
す。

ここでも気になる点がひとつ。ポケットには食事券が入っていまし
た。この券は、A寝台に乗っている人でないと、持っていないはず
です。しかし死体はB寝台にあった…。

桜井さんから事情を聞くと、乗客リストの中に関係者がいるとのこ
とでした。それで呼び寄せられたのが、このお二人です。

平野さんの性格を聞いていくと、自由奔放で、やろうと考えたこと
は実行し、金遣いは荒く、女遊びの好きな人…。どうやら人々に好
かれる人物ではないようです。殺害された理由もだいたい想像がつ
きます。

そこで僕は、桜井さんと有村さんと真藤さんに伺いました。平野さんのことをどう思っていましたか、と。だいたいの人は、慕っていた…など、ここで嘘をつきます。疑われたくないから。

桜井さんは、会ったことは数少ないので分からない。有村さんは、正直好きではないと言った。真藤さんは、素敵な旦那様だと言った……」

「待ってください！それじゃあ、私が嘘をついたって言うんですか…！？」

真藤さんは、慌てて口を開いた。

「…落ち着いてください。まだ誰もあなたが犯人だなんて言ってませんから。」

真藤さん…しかし、殺してはいなくても、殺人は計画しましたよね？最初は直感で考えました。探偵の勘ってやつです。

さっき言った宮野にぶつかってきた不審者、それは真藤さんだと僕は思っんです。そいつは、小柄でしたし、顔は隠されていたので、男だとは断定できません。

ここはまず、不審者が真藤さんだとして考えてみましょう。僕達がぶつかって去っていく真藤さんは、現場の方向へ向かっていました。今から殺しに行くのか…？しかし時間が遅すぎます。午後7時に僕らと出くわしたのですから。

真藤さんが行った時には、既に平野さんは殺されていた…じゃあ殺したのは別にいる……。

平野さんは金融業だった、もっと敵がいたのではないだろうか。さつき桜井さんが思い出しました。

この事件には、もう一人関係者がいます」

工藤君はここで話をやめ、目暮警部に頷いた。そして高木刑事が一人の女性を連れてきた。

茶髪が少しかかった髪。キャミソールに白いズボン。綺麗な女性だった。

真藤さんをふと見ると、視線は斜め下に、俯いていた。

「工藤君…この人は？」

私は皆が気になっていたであろうことを聞いた。しかし工藤君が答える前に、謎の女性が口を出す。

「あの…私、何で連れて来られてるんですか？」

声には強気なものが込められていた。

「この方は、原美江子さんです。そして…この人が、平野さん殺しの犯人です」

「え!？」

工藤君があまりにもサラリと言うもので、みんな耳を疑った。来てすぐに犯人だなんて、冗談もいいところだ。

一番頭にきたのは、誰よりも、原美江子という人物だ。

「急に何を言うのよ!？私、ただ訳がわからないまま連れられて来ただけなのに!!平野謙蔵?誰よ、それ!」

イメージを吹き払い、野次を思い切り飛ばしたが、まだ気が収まらないようだった。女性は気づかなかったが、工藤君は確かにニヤリとほくそ笑んだ。

「なぜ平野さんの名前を知っているのでしょうか？ 訳がわからないまま連れてこられたなら、知っているはずはないのに。警部達にもそう頼みました。事件のことは喋るな。他の理由を持ち出して、おびき出せと。…そうですね、目暮警部？」

目暮警部は頷いた。女性は一瞬にしてうなだれた。さっきの気迫はどこ吹く風。

「とりあえず、話しましょう。この事件の全貌を。」

まず女性は何らかの理由があり、平野謙蔵さんと知り合いになりました。何度も言いましたが、平野さんは好かれる性格ではありません。

女性は恨みを持ちました。それは日に日に増していく……

この女性は、あるメイドに興味を持ちました。メイドも平野さんに恨みがある一人だった。そしてメイドを誘ったんです。自分の立てた殺人計画に。

メイドは計画に乗った……それは北海道に療養しに行く途中、列車で殺害するというものだった。メイドを使ったのは、平野さんの近くを怪しまれずに接近できることが良かったから。

しかし、メイドの欠点は気が弱かったこと。思い直した、何度も何度も。殺人という罪を犯しているのか？ 悩みに悩んだメイドは殺害を決意した。

女性はそうとは知らず、苛立っていた。約束の時間になっても、メイドは一向に行動を起こさない。女性はついに自分で決行してしま

った…。

ご存知の通り、メイドは真藤さん。
女性というのは…そう、原美江子さん、あなただ」

原美江子：爆発した怒りも今は静まり、ひた走る列車の窓から外を眺めていた。その目には何の感情も伺えなかった。何を考えているのか、私は気にかかった。

「…俺らが見た、不審な小柄の男は真藤さんだったんだよ」

工藤君は静かに言った。

「真藤さんは、変装して平野さんを殺害しに行ったんだ。…これで小柄の男の謎は解決しました。

もう一つの謎は、平野さんがB寝台で亡くなっていたこと。この現場、ご覧になりたいとは思いますが、ご協力ください。

平野さんはA寝台に乗っていたのが、殺すにはB寝台の方が都合が良かった。それは死体の発見を遅らせたかったからです。

真藤さんはメイド。嫌でも平野さんとは顔を合わせなくてはならない。B寝台だとしたら、『途中で姿が見えなくなった』とでも言えればいいだけ。

お忘れかもしれませんが、ここは走る列車の上。そう簡単に下りられません。北海道につくまで発見されなければ、逃げおおせますし、自分に辿り着くことも避けられますから。

これで俺の推理は終わりです」

工藤君は原美江子に視線を移した。原美江子は、ようやく顔を向けた。

「ほんと、馬鹿みたい」
と楽しそうに笑う。

「：私の人生は、すべてこの人から狂ったの……全てね…」

脱力しきったように、近くにあった椅子にドンと座った。個室の中では、皆が原美江子の話に耳を傾けていた。

「私は、あの男の娘よ——平野謙蔵のね。

この男は女遊びの激しい性格だった。私のお母さんは、アイツの初めて的女だったの。二人とも熱い恋愛をして、結婚したわ。貧しくとも温かい家庭で、後に私が生まれた……私が3歳になった頃かしら？あの男は、金融業を始めたのよ。それからだった。不幸な人生へと変化していったのは——仕事は大当りして、私の家にはお金が溢れてきた。そのほとんどはアイツが使ってしまったけどね。

酒と女とギャンブルに溺れて、儲かったお金は遂に底をつきた。アイツのストレスのはけ口は、私達だった。私とお母さん……。私は小さかったから、お母さんが私を庇ってくれた。幼かったから、何故自分がこんな目に遭うのか、全くわからなかった。

耐え続けた私たちだけど、お母さんは遂にヤバイと思ったのね。私だけを逃がしてくれたの。二人で暮らしていくだけの経済力がなかったのかもしれないし、理由はわからない。

私は遠い親戚に預けられて……お母さんが死んだということを告げられたのは、大人になってから。飛び降り自殺だって……笑っちゃうでしょ……？」

いつしか原美江子の瞳には涙が溜まっていた。

「私は確信したわ。平野の暴力に耐え切れなくなって、自殺したん

だって…」

北海道——札幌

北海道の冷たい秋風が、身体を包む。プラットホームに降り立った俺達は、流れる人々の後から、ゆっくりと目暮警部と容疑者が出てくるのを見つめた。

真藤さんは、反省しているのか俯いていた。もっとも実際手を加えたわけでもないのに、警察で事情聴取をするだけだ。

：原美江子は、時節顔を上げると微笑んでいた。

列車内での有村の電話は、どうやら同僚にかけていたらしい。会社が潰れるかなど、身を案じてのことだった。

計画だけで幕を閉じた真藤さんの殺害動機は、平野さんのセクハラが原因だった。その日B寝台に呼び出したのも、真藤さんだというオレが一番気になるのは、桜井さんのこと。何故一社員の桜井さんが、遠い親戚に貰われ、名字を変えた原美江子さんのことを分かったのか？『見たことがある』とは、どこで見たのか？きつと、恐らく桜井さんは……

宮野が言った。

「いいの？行かなくて…」

事情聴取のことか。

「ああ、いいんだよ」

結局、また迷惑かけちまったな。宮野にはいつも付き合わせてばかりだ。推理となると、どうしてもブレーキが効かない。

殺人現場にも連れて行きやすく、宮野は俺にとって大事な……

大事な『相棒』……？妙にしっくりこねーな。

俺達は黙ったまま、ホームを後にした。宮野はアタッシェケースを大変そうに引いている。ケースは俺が引くことにした。

「あ、ありがとう」

宮野は驚いたらしく、細々と言った。

「まあ、北海道の旅、満喫しよーぜ！」

「そうね。……あなたも蘭さんだったら、もっと楽しかったんじゃない？」

悪戯でも、遊び半分でも、そんなこと言うなよ。

「バーロ。おめえだから——宮野だから誘ったんじゃないか」

俺は笑って、宮野の手をぎゅうっと握った。

「わっ、ちよつと……！」

宮野の焦る声が隣から聞こえた。

寝台列車の殺人（5完）（後書き）

長期でした！

長い月日というのは怖いです。自分が何かしら仕掛けたトリックを忘れてしまうからです。

謎が多い結末や、新一の証拠の少ない時点での解決や、最後にまとめての解説…苦笑です。

初めて推理モノの大変さを知りました。

読んでいただいて、ありがとうございます。

次回こそは幽霊シリーズです。よろしくお願いします。

校内幽霊退治（後編）

「なんだよ、コレ…」

新一は厳めしく、顔を歪めた。

水とは真逆といえはいいか、ドロツとしたペンキの様な物で書かれた乱雑な文字。文字の端の液体が、垂直に垂れ始めている。

『出てけ』真っ赤な色で、それは書かれていた。まるでここに悪魔が舞い降りて、呪いの血文字を書いていったような…

暗闇の校舎でこれを見たら、人は恐怖を感じるもの。しかし新一は、微だの恐怖しか感じなかった。好奇心の方が遥かに勝ったのだ。

新一と志保は黒板に近づいた。志保は、赤い文字を手で撫でてみる。

「これも…血ではないわ。臭いからすると、ペンキかしら？」

志保の一言に、新一は辺りを見渡した。突然、赤色の物が新一の視界に入った。しゃがみ込み、ガタツと音を立てて、何かを持ち上げた。

「モップ…？」

「ああ、これでこの文字を書いたんだな。ほら、先に赤いペンキが着いてるだろ。」

落ちんのかな、この文字…」

志保はホッと息を、胸の中で吐いた。あくまで、胸の中で。新一は

そんな志保の気持ちはお見通しだったのか、フツと笑った。

「まあ、超自然現象とか、幽霊の仕業でないことは、これでハッキリしたから。怖がんなよ」

「別に、怖がってないわよ」

志保はごくりと唾を呑むと、平静を装って言った。新一は何故か笑い出す。

「ウソつけ」新一は悪戯っぽく言うと、（可愛いヤツ）と心の中で思った。志保は読まれていると感じ、話を転換した。

「…人間の仕業だとして、何故こんなことをするのかしら？」

「驚かせたいのか？——何の為に？」

しばらく顎に手を当てて、物思いに更けていた二人だったが、「とりあえず他も見えてみようぜ」という新一の言葉で、その行為は幕を閉じた。

相変わらず、静まり返っている不気味な校内にも、二人は馴れてきてしまった。一通り一階は覗いたので、志保も新一の後を追ひ、二階にやって来た。

階段をすぐ上がって右側にある教室は、理科室だった。

「ここは、ヤバイぞ」

さすがの新一も入るのを一旦躊躇し、身震いをした。その姿を見た志保は、さっきの仕返しか、挑発してきた。

「あら、なあーに？ 貴方みたいな名探偵が、こんなところ怖いのかし

ら？」

「ニャロ…」

新一は眉をひくひくさせると、勢いよく理科室の扉を開けた。志保の作戦にまんまと引っかかってしまった。

美術室と良い勝負の不気味さを誇る理科室。入口の近くには実験道具がきちんと並べられてあり、細かい物は木の戸棚に入っていた。一列ずつ、合計3つの長いテーブルには真ん中に小さな水道がついている。窓際には水槽があり、魚類の生き物が飼われていた。

新一はらしくなく、小さい歩幅で中を見ていた。志保は臆することなく、偵察して回る。

いつも自分達が勉強しているところが、こんなに薄気味悪くなるとは……

「げっ、お前なに見てんだよ」

志保に近づいた新一は、嫌な顔をした。志保が見つめていたのは、人間の至る所を細やかに再現した人体模型だった。

暗がりの中、窓から入る月明かりに照らされた模型は生きているようにも見える。

志保はじいっと見つめていた。何を考えているのか、新一には察しもつかなかった。

「新しい薬品のことを考えてたの」

志保は新一の心理に気づき、人体模型を見たまま答えた。“薬品”の言葉を聞き、新一は小さな身震いがした。コイツの実験…何をする気だろう。

「オメー、そんなの見て怖くねえのかよ？」

「え？」とようやく志保は新一に顔を向けた。

「：別に怖くないわ。本物を何度も見てきたし。それに、あなたの体内もこれと同じものなんだから」

「本物！？：相変わらず可愛くねーヤツ」

「結構よ。あなたに“可愛い”なんて思われたくないわ」

「そうですか」と多少カチンときた新一だったが、いつものことなので、新一の怒りはすぐに消えた。志保の隣に置いてある骨の人体模型を少しいじってみた。

二人は理科室から通じる隣の部屋、薬品や高価な実験道具などが保管されている準備室の前にいた。新一は校長から貰った鍵を使って扉を開けた。揃って出てきた時、表情は暗く曇っていた。

：戸棚に入っているはずの薬品の中で、数個消えていた物があった。
「フェノールフタレインとアンモニア：」

廊下を並んで歩いていると、志保が呟いた。

「何か昔、そんな薬品を使った事件を解いた気がすんだよな：」

「あなたみたいな推理フェチさんなら、一個くらいあっても納得するわ」

廊下は相変わらず暗闇に包まれていた。火災報知器が点滅し、非常

口が赤く光っている。

「あれ…煙り…？」

志保の目線の先は、階段であり、そこから白い煙りが立ち上っていた。黄泉の国からのお迎えのように、濛々と立ち込めている。新一は見つけるなり走った。

まさかとは思うが、念のため口を制服の袖で塞ぎながら奥へ進む。しかししばらくして、袖を外した。

「…冷たい」

煙りは冷たく新一の身体を包んだ。後から来た志保を向き、新一は言った。

「これはドライアイスだ。水にドライアイスを入れると白い煙りが出るから。しかし一体誰が……？」

煙りの奥を探索しようと、新一は歩み出た。しかし白い煙りはしばらくで消えた。やはりこの煙りの作り方だと限界がある。多量が発生させられないのだ。

行き着いた先、階段の真ん中で、大きな水槽に、まだ溶けかかっているドライアイスが入っていた。

（収穫はナシか）

新一は志保の元へ戻ることにした。あまり長く一人にさせたくない。何が目的なのかは分からないし、大事件でもないが、用心に越したことはない。

志保に何かあったら…。それにしても、俺達が今相手にしているのは、誰なのか？

数段上ると、すぐ煙りを見つけた場所までやって来た。

「宮野ー」

暗闇が辺りを包んでいるため、人がいるのを確認するのもやや困難だ。

新一は呼びかけながら周りを見渡してみるが、一向に声も聞こえない、人影すら見えない。

「宮野……」

新一の心臓がバクツと鳴った。暑くもないのに、冷たい汗が身体を付き纏う。

ああ、そうだ。

——『志保が消えた』

校内をひたすら走り、探し回り、体が遂に着いていけなくなってきた。衝動で、ただひたすら衝動で。

ハハ……たく……何焦ってたんだ？

壁に身体を預け、俺は笑った。ここは知らない謎の世界なんかじゃない。いつも何気なく通う学校の中じゃねえか。

宮野がいなくなっただけで、焦る……重症だな。

ようやく冷静になった俺は、息を吐いた。涼しくなった夜の空気が冷やしたのか、俺は冷たい窓を手で触った。

「んっ？」

外を見た俺は、一瞬目をつぶった。白い閃光が目の前で光った。

『行動力がある』よく宮野に言われてたっけか。俺は低く腰をかかめ、窓の向こうから見えないようにした。

そのままの体制で、閃光が光った方向へと向かう。捜査する時、一人だなど近頃は珍しく、変な気分を感じながらも。

物音を立てないように、現場付近まで来た。僅かな月明かりが、人影を照らしてくれた。

「誰だッ!!」

「きゃっ」

俺の叫んだ声とが重なる。

「お、女…!？」

相手は持っていた懐中電灯で俺の目をくらます（悪気はなかったのだろうが）。とりあえず、その明かりを頼りに、俺は麻酔針を相手に打ち込む。

運よく的中し、女らしき相手は、その場にぐずれた。後ろに隠されていた宮野が姿を現し、俺は胸を撫で下ろす。

「はぁーよかった」と、宮野を縛っていたロープを解く。

「工藤君…ありがとう」

珍しい宮野のお礼に、妙にドキリとする。

「まったく…心配かけんなよ」

「そんなに…心配したの？」

「…あつたりめーだろ」

なんだか理由わけの分からない照れ臭さに襲われ、目を逸らした。静かな空気が漂っていたが、しばらくしてそれは壊された。

「くっ、工藤新一！」

声の主は眠っていたはずの女だった。もう、目を覚ましたのか。

「オレ？」

「…あなた、誰？」

的外れな質問をした俺を窘めるように、宮野が言い直す。

「わっ、私！草野涼です！あなたのっ工藤新一さんの大ファンなんです！」

俺も宮野も一瞬で目が点になった。

「大ファン？」

「そうなんです！」

「あ、ありがとうございます」

何故か礼を言ってしまった。

「だからこんなことまでして…あなたに会うために……」

俺達は顔を見合わせて頷いた。だいたい状況は読めた。

「自分の高校で不可解な出来事があったら、必ずあなたが調べてくれると思って…！狙い通りだったけど、写真を撮ったのはさすがに不覚だったわね」

彼女は全く反省するどころか、興奮覚めやらぬようだった。仕方なく、俺達は無言で警察に電話し、この行きすぎたファンの女性を、不法侵入のため、逮捕してもらった。

宮野を縛ったのは、『嫉妬したから』と語っていたが、どういう意味なのか。フェノールフタレインなどの薬品を使って、また何か驚かす物を作ろうとしていたようだ。

…彼女がパトカーに乗り込む際には、もう夜は明け、朝日が上り始めていた。

「一日が始まっちゃったな」

「…眠いわね」

走り出したパトカーの後ろ姿を見つめた。

「ホント…モテモテさんは困るわね」

宮野が吐き出すように、横目で言う。

「今回の事件のことか」

「プライベートでは蘭さん一筋で、頭が上がらない工藤君なのに……面白いものね？」

嫌味かよ。

「なに言っただよ。」

俺が一筋なもの、頭が上がらねえもの——宮野志保だぜ？」

校内幽霊退治（後編）（後書き）

なかなか久しぶりの更新でした。オチが苦笑ですね…。あはは。

お付き合いくださいまして、ありがとうございます。

次回もよろしく願います。

さよならのかげら（前書き）

蘭ちゃん登場です。

さよならのかけら

志保は遠くを眺めていた。2階の喫茶店で、どこか遠くをぼんやりと。隣にはすっかり冷めたコーヒー。そして目を綴じると、手の中のネックレスをぎゅっと握りしめた。

罪悪感が頭からくっついて離れずに。それがさっきからの頭痛の原因なのか。

（これくらいの罰は当たり前なのに）

志保は自嘲の笑みを浮かべた。

あの時決めたはずなのに。この罪悪感から逃れることはできないと知って、この道を選んだ。

時計は気にしなかった。待つことは、何の苦でもなかった。しかし、待ち人は来ない。

本日5度目、コーヒーを口に運んだ時、後ろから聞き慣れた声がした。

「志保」

振り向けば、そこには待ち人。志保は安心したように笑った。

「蘭ちゃん、上がっていいわよ!」

店長の声に「はい」と返事をし、蘭はエプロンを脱いだ。既に空腹で倒れそうだったから、ホツとした。辺りを取り巻くパンの匂いが痛いほどお腹をつく。

いつもならこのまま店の裏へ向かい、手製の弁当を食べる蘭だが、今日は店の出入口へと走った。

「あら、今日はあるの?」

レジからは店長の声。

「あ、はい! 友達と食事です」

コートを片手に、蘭は振り向くとニコツと笑った。店長は、元気な蘭の背中を見送りながら思う。本当にいい子だ、と。

初恋であり、私の中で永い恋が、ビターな味で幕を閉じたのは、つい一ヶ月前のことだった。新一が高校に戻ってきた時、隣には人がいた。美人なハーフの顔立ちの女性。

途端に嫌な予感が体を付き纏った。新一が楽しそうで、瞳が愛しそうで。その視線は、隣の女性に向いていて。――私じゃなかった。

ほんと、笑えないジョークだね。

新一が私に言った言葉は、

『ただいま』

『ありがとう』

『恋人ができたんだ』

『すまねえ』

この4つ。

今までの温められた気持ちを、そんな少ない言葉だけで忘れろって？無理だよ。

私はコンピューターじゃないんだから。

一番辛いのは、近くにいること。何で二人して同じクラスなのだろう。間近で眺めなければならぬ、あのふたりを。

捨て台詞のひとつでも残して去ってくれたら、楽になるのかな。

時計台の下で園子と待ち合わせ。『お昼ごはん食べに行こ！』今朝の急な誘い。沈む私を、気遣ってのことだと思う。

12月中旬。街はイルミネーションで彩られている。冬になったら新一と歩けると思っていた。甘い甘い恋。コートだけでは防ぎきれない寒さで、マフラーと手袋に縋る。

ふと、白い物体が手袋についた。ああ、これは…と空を見上げると、思った通り雪だった。

「初雪かあ」

白い吐息が口から出る。嬉しくとも、切ない。雪にはそんな力がある。

思い出が蘇る。去年は一緒に見たよね？寒い中、一緒に帰ったじゃ

ない。

ねえ、新一：

「…新一……」

いた。目の前の通り、ショーウィンドーの前。黒のPコートを着て、灰色のマフラー巻いて。何を立ち止まっているの。思わず声をかけそうになる。

「しんいっ…」

躊躇した。景色がぼやけた。隣には宮野さんがいたから。

新一の一言に、普段は無表情の宮野さんが笑う。新一の一言に宮野さんが顔を赤くする。

二人は黙って近づいた。

17年間という付き合いと、半年という別れを重ねてもダメ。半年の間に、心は奪われてしまう。

……ダメだよ。未来を描いて、強くならなくちゃ。

もう、新一に恋愛感情なんか望まないから。

でも今は。私の涙も、ふたりも、二人のキスシーンも……粉雪が舞う空、すべてを隠して。

唇を離れた彼女の顔は、幸せそうだが、寂しそうだった。

「どうしたんだよ」

「……………」

黙りこくる志保を見て、だいたいは予想がつく。

「蘭、か…」

志保は視線をずらす。

「なあ、もういいから……おまえに苦しまれるのが、一番嫌なんだよ。結局はすべて俺のせいなんだ。志保……頼むから、一人でしょい込むな。俺は、おまえの抱える闇も分け合いたいんだ」

志保の冷たな白い頬を、そっと触った。

さよならのかけら（後書き）

ご存知かもしれませんが。小松未歩さんの歌から頂戴しました。

書いてたら切ない内容になりました。蘭ちゃん介入編です。三角関係は否応なしに寂しくなりますね。この話で短編書いてみたいです。下手な文章のためもあり、理解していただけたか不安です。次回もよろしくお願いします。

終電を待ち侘びて

「こねーな」

「ええ」

「なんか、長閑だな」

「新鮮ね。まあ、いいんじゃない？　こういう景色も、たまには――
―気温を抜きにすればの話だけど」

「…ハハ、何でこんなことになっちまったんだか…」

「それは、マヌケだったのよ」

「誰がだよ」

「…………あなた」

「はあ…！？」

長々と日常の会話を二人は続ける。寒くて意識が遠退いてゆくのを、繋ぎ止める唯一の手段なのかもしれない。

白い息が口から吐き出てゆく。新一は手をポケットに突っ込んだまま、ベンチに腰をかけている。その隣には、白の手袋をはめた志保が震えながら座っていた。ふたりの隙間は、40センチほど離れていた。何故なのかはわからない、成り行きというヤツだ。

気温は氷点下だった。氷も凍るということで、自分達も固まって凍死してしまうのではないかと、恐れをなすほど。東京に住居を置く二人には更に堪える。

簡素な駅のプラットフォームに、人は見えず。一日に数本という電車も、残り一本3時間後。駅を出たら、荒地地。目の前には雪の降り積もった山。見事に過疎の進んだ日本の田舎だ。詳しく言えば、長野県の山奥。

なぜ、こんな寒い中、3時間後の電車を待っているのかといえは、それは数時間前に遡る。

「ありがとうございました。本当に君はすごいなあ」

そんな一言を受ければ、誰だって悪い気はしない。

「いえいえ」

小さく謙遜しつつも、顔の筋肉が緩んでしまっているのは工藤新一。横に、呆れ顔で佇んでいるのは宮野志保。

お馴染みの二人は、東京で起きた事件の為に、長野県の奥へと来ていた。犯人が逃亡し、その行き先がここだと解ったからだ。事件に携わったということで、新一も犯人を追うことにした。今しがた見事に捕まり、犯人はパトカーに乗せられている。

「これで私もようやく昇進できそうです！」

喜びに満面の笑みを浮かべる警部補今村は、車の助手席で新一に感謝の言葉を伝えた。

「それでは、工藤君！そして宮野君！」

鳴るエンジン音に、遠ざかっていく車。遂には今村の振る手も見えなくなった。

何となく人助けしたようで、気分が良くなったふたり。

「あの今村って人……途端に若々しくなったわね」

「昇進が嬉しいんだろ。もうすぐで50過ぎるらしいし……よかつたじゃねえか」

「そう、ね……」

「ああ」

「ところで、私たちってどう帰るの？」

「あ？……アッ！」

気がつく頃、時既に遅し。

パトカーは見えない所を走っている。農村風景の中、細い道路の一角に、二人は取り残された。

徒歩30分、やっと見つけた駅で、東京行きの電車を待っていると、今の状況にたどり着く。

（ふたり…）

最初は考える度に高鳴ることばだったが、今となっては、どうでもよい。寒さで考える余裕がないのだ。

「宮野……ごめんな」

不意の新一の声に、志保はぬくっと顔を上げた。

「なによ、今頃」

今ごろ素直に謝られても、『後の祭り』というヤツだ。その言葉は何の効力も持たないのだから。

寒さに一番効く薬。

その薬とやらを哀は知っているのだが、教えたりは決してしない。教えたところで、お互いが固まり、自分が発火してしまうことは、目に見えている。

「怒ってんのかなって」

「別に。そんなことで怒るほど子供じゃないわ。あなたみたいに？」

「ああ、そうですか」

志保の嫌味を、新一は軽く受け流した。

「あ…」

志保が小さく声をあげた。新一が声に気づき、志保の視線の延長線を辿る。視線は線路の向こう、空の下。白い物体が空を舞っていた。

「雪、か——」

新一も思わず口をあけたまま。先ほどから、降り積もった雪は飽きるほど見てきたが、舞い降りる雪はこれが初めてなのだ。

都会でも珍しい雪。

志保は線路に下り、一掴みしてみようかと思ったが、『これでは私

が子供』と思い直すと、立ち上がることはなかった。

「雪っていえば…オメーって色白だよな」

となりの何気ない一声に、志保は慌てて新一を見た。

「それは…良い意味で受け止めてもいいのかしら」

「ああ、多分」

多分ってなに、と志保は顔をしかめる。

瞳も青く、髪は茶髪、顔立ちもハーフで、日本人とは掛け離れている。新一は『宮野志保』について思考を巡らせたが、口には出さないことにした。

（たしか、母親が英国人、父親が日本人だったような）

志保はあまり血色がいいほうではなく、健康とはお世辞にも言えない。

「わっ…」

志保の頬に温かい何かが触れた。…新一の手の甲が触れた。

「やっぱ冷たい。…しばらくこうしててやつから」

目の前に新一が立ち、志保を見下ろしながら頬に手を当てていた。

新一は、いたずらっぽく、しかしどこか優しそうに笑った。

そして志保の隣に腰をかけた。

さっきの40センチは嘘のように。距離は僅か5センチあるかないか。

頬に触られていては、こんな近くにいては、自分の体温と心拍数の

劇的な変化があつという間にバレてしまう。

志保は新一の手を握ると、そつと下ろした。寒さとはまた種類の違う、頬の赤らみ。

「……これなら……お互い……あつたかいでしょ」

たどたどしく、志保は呟くように言った。一瞬新一は目を見開いたが、すぐに優しく笑った。

電車が来るまであと一時間。さあ、これから二人に何が起こるのだろうか。

終電を待ち侘びて（後書き）

ありきたりですね…あはは。

今回はほのぼの系だったので、次回はシリアスにしようかと思えます。

作者は雪国生まれなもので、雪は見馴れてしまっています。私、雪も冬も好きなので、作品にもそういう傾向があるようです…。笑

次回もよろしくお願いします。

You are necessary.

水溜まりの向こうで、口を真一文字に閉じた女性がひとり。
……私だ。わたし？

ひんやりと湿り気のある裏庭。コンクリートの上に腰を下ろすと、私は頬杖をついた。

『何だか疲れた』そんな理由で授業を抜けてきた。世に言うサボリ。サボリということ、見つかる訳にもいかず、行く当てもなく。屋上へ通じる階段のドアには鍵がかけられてあり、入れはしなかった。結果的に“ここ”なのだ。

心地好い小春日和だった。けれど、裏庭はお構いなしのようだ。

まあ、今の私の気分にはちょうどいい。

表のグラウンドに行けば、綺麗な桜を眺めることができるのに。私は“ここ”に来る。

明と暗があれば、私は暗を選ぶ。それは日常でも、今だに消えない性質らしく。

帝丹高校に来てから、より毎日が眩しくなった。以前は、小学生という『異次元なファンタジーランド』とでも言えばよいのか、7歳の子供と過ごし、現実を離れ…、それでもよかった。周囲の環境がそうさせた。

けれど、今は違う。

同年（実年齢は18だが）の同級生がいる。より、私の人生とのギャップを感じさせられて。

“死”なんてほんの数ミリの距離。抵抗も何もなかった。死を選び、そして呑んだAPT X4869。運よくか悪くか、私を生かした。

人間なんて所詮、

必要としてくれる人がいなければ生きてゆけない……弱いイキモノ。私も同じ。

ギャップを埋めるひとつ。私も恋をした。冷たい黒の私が、恋をした。

愛してよ。

どうしようもないくらい。

抱きしめて、壊して。

自分という存在を否定したくないから。工藤君に愛されることで、“宮野志保”を肯定できる。

「みーやの」

え？顔を徐に上げてゆくと…、当の人物がいた。

「……なに」

疑問符すら付けず、一言面倒臭そうに返す。可愛いげなど一切ない。

「眠そうだな、オメーは」

「そうね、否定するつもりはないけど。眠いもの。仕方ないわ」

「へーへー」

風がそよそよと吹いた。私達に届けたのは、ジメツとした風だったけど。独りでいる時よりは、明らかに爽やかに感じられる。

「サボリか？」

「ご覧のとおり？」

「オレも」

「そう」

「今日は気持ちいいな。雨上がりだから」

背中で腕を組み、空を見上げる彼は機嫌上々らしい。時節見せる少年らしい笑顔に、『キュン』と少女マンガらしき擬音が、胸の中で生まれる。

気恥ずかしくなり、思考を別に向けることにした。

昨日は激しい雨だった。それを埋めるかのように、今日は快晴。目の前に残る水溜まりに映る自分の顔を、私は見つめた。考えることは、さっきと同じ。

「なに見てんだ？」

「わたし——？」

わたし…なのかしら。

「…なんだ、それ。じゃあ、俺も！」

工藤君は私に寄って、30センチほど水の鏡に、自身を映した。私と工藤君は隣同士。こんなことをして、彼が楽しいのかは不思議だったが、私は…まあ満足なのでよしとしよう。

ふたりで映るこのカットが、当たり前になったら…。

彼の傍にすることを許される…だけで十分幸せなこと。

今の願い、それは高望みなことだけど。望まずにはいられない。

やはり、恋とは不思議。謎の魔法。

「…戻ったんだよな」

無言の数分間。彼には彼なりに思うことがあったらしく、ふと、呟いた。

「まだ、信じられない？」

あなたが一番、実感してそうだけど。

「なんかな、うん。コナンでいた時と、あんま景色は変わってねーんだ」

「そうかしら。『坊や』から『高校生探偵』よ？大幅な違いじゃない？」

私の一言に、工藤君が黙る。私は黙って返される言葉を待っていた。

「…………おまえがいたから」

「は…」

予期もしない私の登場。一瞬耳を疑った。どういう意味なのか。

「宮野志保がいたから、俺は変わらずにいられた。ほんと、オメーには感謝しっぱなしだ」

感謝なんてされる立場じゃないのに。工藤新一という人間は優しい。改めて感じる。何がなんでも、私は彼が好きだ。

彼は、私の必要性を生み出してくれる。

「♪」

思わず出た鼻歌に、工藤君はおっと笑った。

「珍しいな。なんか良いことあったか？」

「まあね」

“ 今 ” 言えること。彼が私を生かしている。

You are necessary. (後書き)

題名カッコつけてみました。笑

予定は『愛』について書こうかなんて考えてたんですが、全然方向が……道を外したらしいです。

時代劇っぽい規格外の作品を投稿したい（私歴史マニアです）のですが、やっぱり許せませんよね……あはは。

今回はシリーズ物にしたいです。もうひとつ、PV11万超えました！本当にありがとうございます。感謝です。まだまだ駄文でございますが、次回もよろしく願います。

長々とすみませんでした。

スポーツの冬到来（前書き）

不安作です…。

スポーツの冬到来

ピンポ、ピンポ、ピンポ、ピンポンッ——！

さっきから何度聞いたのだろう。

数えれば切りがない。事態を把握しきれずに、寝ぼけた頭でのっそり階段から降りてくる博士に目をやり、チン！と勢いよく出た食パンを取ると、私は早歩きで玄関に向かった。そろそろ気が滅入ってきたから。

鍵をあけて、

「…どうぞ？」

と言えは、これまた勢いよく彼が中へと侵入してくる。

「はよ！」

「…おはよ？」

「何でさっきから疑問形なんだよ」

「…さあ？」

起き立てのくだらない会話を済ませ、彼を無視し、キッチンへ足を運ぶ。

「まだパジャマかよ」

ソファに座ったらしい彼が、私を咎めるように言う。

「悪い？ “まだ” 6時なんだけど」

『まだ』を少し強調させてみる。一応早めに宣告しておくが、私は朝が苦手だ。6時という時刻、それでも体と格闘中。

「あなたこそ、今日は早起きじゃない？」

私がパンにマーガリンを塗りながらそう質問し、彼が答えかけた時、洗面所から博士が出てきたので、彼は挨拶を優先した。

「はよ、博士」

「あ、ああ。おはよう、新一君。今日は一段と早いもう」

まだ夢から覚めきれないらしい博士。眼鏡を拭くと、微笑んだ。

工藤君は私に視線を戻すと、笑った。

「今日は球技大会だろ」

「…そうだったかしら」

そんな行事あった？当然とでも言いたげな彼には悪いが、全く知らなかった。

「この前体育祭やったばかりじゃない？」

「帝丹はな、体育祭と球技大会の2つがあんだよ」

その2つに、果たして大きな相違でもあるのか。体育祭といえば、ほとんどの種目が球技だった。ただでさえ体力に自信がなく、ようやく終えたはずだった。しかし、その試練はまた舞い戻ってきたらしい。

「それで？楽しみで仕方ないから6時にやって来たってわけ？」

「おー」

「……小学生ね」

「けっこー盛り上がったぜ？」

「想像できるわよ」

彼が子供だということは重々承知だが、これほどまでとは。ため息をつきながら、私は、パンを乗せた皿とブラックコーヒーの入ったカップを、工藤君の目の前にあるテーブルに置いた。

「あっ、サンキュ」

工藤君がありつこうと身を屈めた瞬間、私は皿を取り上げた。

「えっ!？」

「誰があなたのだと言ったかしら」

顔をしかめた彼を見て、私はクスッと笑った。

「がんばれー！B組ー！」

隣にいるクラスメートらが、黄色の大きな声を張り上げる。体育館のギャラリーから、下で開催されているスポーツに目を向けながら。先程の朝から数時間経ち、今は帝丹高校の球技大会が開かれている。帝丹では、学年別に日付を変え、さらに男女別に分け、午前と午後でふたつの種目をやる。体育館で、男女交互に、それぞれふたつの試合をスタートとしている。

今、ギャラリーで観戦しているのは、Aコートで行われているB組男子バスケの試合だ。

その応援するのはもちろんB組女子……だけではない。イベントⅡ出会いの場、恋愛成就の時。工藤新一見たさに、多くの他クラス女子が見に来ている。

「きゃーっ！工藤君よっ！」

「サッカーだけじゃないんだよねー」

あ、ちょうど今工藤君がシュートを決めた。ほんとに彼はサッカーだけではない。『運動』ができるのだ。

容姿端麗、頭脳明晰、おまけにスポーツマン、人望は厚い、自信家。人は3つのものを手に入れたがるという。名声・富・地位。彼はほぼ持ち合わせている。憎らしいほど、ずるい。

しかし、なんだかんだいって、つい工藤君を目で追う私が恥ずかしい。そんな彼に惚れている私が恥ずかしい。

あ、またシュートを決めた。周りの子のように声をあげる自信はさすがにないので、仕方なしに小さく拍手をする。

「ピーッ」

ちょうど工藤君が1点入れた時に試合終了となった。彼は軽い汗をかき、クラスの男子と談笑しながら、コートから出てくる。

「工藤君〜！」

「こっち向いて！」

なんてまたまた女子から声がかかる。工藤君はふと顔をあげた。目が合った。私に向かって、工藤君はニカッと笑ってみせた。

わたし…？

…違うに決まってるじゃない。蘭さんだ、きっと。自惚れ。

「ねえねえ！今、こっち向いて笑ってくれたよ」

「ええ？それ、あたしだよ」

隣から聞こえる声に、思わず苦笑した。

「次は女子一回戦です」

審判の声を聞いて、寄り掛かっていた身体を起こした。一気に2試合ごと行われるため、AとD組の女子がぞろぞろ移動し始めた。向こうから試合を終えた男子も来るため、大きな波に飲まれる。ようやく階段付近へ来た時、工藤君の声が微かに聞こえた。

「はあ」

どうしようかしら。

球技は苦手ではないが、体力には自信がない。途中で息切れしないといいんだけど。

「宮野さん！がんばろーね！」

コートに入ると、ジャージを捲った蘭さんが笑顔で声をかけてきた。絶対強そうだと、その笑顔で確信した。

「ほら、宮野さんも！」

「わっ」

成り行きで円陣を組み、試合が始まった。一気に応援の声が飛び交った。今井さんが持っていたボールが蘭さんに回り、シュートを決めた。ボールが来て、相手チームに近く、コンタクトが付いていない仲間へとボールを回した。

対戦クラスD組に3点リードされていた。残り1分だった。鈴木さんが（意外に）バスケが得意らしく、2点入れた。…あと20秒。得点板に目をやった。あと2点…！

その時、D組がボールを持っていた。けど、見えた。パスを受け取ろうとした相手チームの選手。たまたま近くにいたので、急いでボールを横取りした。

こういうの…：ロングシュート…？

ああ、遠い。

そう思ったけど、時間の猶予がなかったため、思いっ切り投げた。リングにゴンとボールが当たった。そしてしばらくリングを回り続けた。

「やったぁー！！」

クラスメートの歓声と試合終了のホイッスルが雑じった。どうやらネットに入ったらしい。勝ったらしい。

「スリーポイントだよ！宮野さん！」

クラスメートが周りを囲んだ。

「よかった」

と思わず微笑んだ時。頭に刺激が走り、意識が遠退いた。

機械音と薬品の匂いがした。加湿器をたいているこの場所は…保健室ね。多分。だいたい今の状況も把握できた。

あのあと、バスケットボールが頭に勢いよくぶつかったのだ。隣のコートでの試合は、延長だったから。ボールがそれで、どうやら私に当たったらしい。それで倒れて、保健室のベッド行き。
はあ、情けない。

次第に、ぼんやりしていた景色が鮮明になってきた。誰かが話をしているのも聞こえた。

この声…工藤君…と蘭さん。

無意識の内に寝たフリをすることにした。…会話の内容が気になったから。悪趣味だけど、盗み聞き。

「でも、さっきはカッコよかったよ、新一」

「あ？」

「宮野さん倒れた途端、真っ先に駆け付けてさ、医務室に運んで行ったじゃない。まさに風の如しだったわよ」

「そうか？」

なんか…衝動でいてもたってもいられなかったっていうか…」

「新一も恋愛に関しては鈍いよね。新一は、好きなんだよ、宮野さんのことが」

「はあ！？ねーだろ、いや、まじで」

『ねーだろ』って何よ。というか、どんな話してるのよ。
イライラを押し殺し、寝息を静かに立てた。

「よくわかんねーんだよ。大事なヤツってことに変わりはねえんだ
けどな…？」

「後々、いやというほどわかるよ。…私もそうだったから」

「…『私も』？」

「ううん、なんでもない！」

ほら、宮野さんの様子見てきなさいよ。あ！起きたら言っておいて
ね！さっきのシュート凄かったって」

「あ、ああ」

しばらくして、ガラツと扉を開ける音がした。そして同時にカーテ
ンが開いた。音から察すると、彼はベッドの隣にある椅子に腰をか
けたらしい。

「はあ…何なんだろうな。」

このモヤモヤの正体、教えろよ、宮野……」

その眩きが耳に届く度、私の頬は熱くなった。

工藤君は再び息を吐くと、私の手を握った。

ドクンと心臓が大きく波打つの確認した。

スポーツの冬到来（後書き）

意味のわからない終わり方でした。笑

バスケット詳しくもないのに、調子乗って書いたので、とてもヤバい気がします。すみませんでした。

次回は多分、姫のはなしです。次回もお願いします。

Why(前書き)

今日は志保ちゃんお休みです。

Why

「蘭……？」

胸のあたりを、ぎゅっと固く抱きしめられていた。理解しきれない状況に、つい彼女の名前を呼ぶ。しかし彼女は黙ったまま、絡めた腕をより強くした。

……………なぜ、彼女は俺を抱きしめる？

発端は数時間前に遡る。

たまたま道で蘭と会い、お茶することになった。近くの喫茶店に入り、珈琲を頼んだ。蘭は「変わらないね」とどこか寂しげに笑った。……どうしたんだ？

そんな疑問を飲み込んでしまい、会話を続けた。話してゆくと、次第に、普段と変わらない蘭に戻っていった。そう思った。

「ほんと、抜けないよね。新一の推理オタクは」

「しゃーねーだろ？生活の一部になっちまったんだからよ」

前より蘭と接する機会が減ったせいかな、前よりも、話は止まることを知らなかった。

初めは戸惑いがあった。蘭が俺を避けてるっていう噂を耳にしたことはあったから。

俺自身が蘭を振ったんだから仕方ない。仕方ないが、俺なりの正義がそれでは許せない。蘭と元通りの幼なじみに戻り、和解してこそだ。

そんなのただの理想。

宮野にはそう言われた。アイツが苦しむだけだから、この話は出来るだけ持ち出さないようにはしていた。が、アイツは俺の心を読んだらしく、言った。

あなたの正義ってなに。

何で私を選んだの？

確かそう責めてた。

俺は気づいたら宮野が好きになってたから。理由はそれじゃ駄目か？
蘭と自分に嘘をつきながら、人と接するなんてできなかった。それは、蘭にも俺自身にも無情な行為だと思ったんだ。それが、俺なりの正義。

結局宮野は答えを出さずに平行線なわけだが、この選択に誤りはなかったと思う。

「新一？」

「あ？」

「話、ちゃんと聞いてる？」と蘭が意地悪げに顔を近づけた。

「あ、わり。なんだっけ」

「だから、今度のクリスマスの話。誰か過ごす人できた？…あ、宮野さんかっ」

妙に胸が苦しくなった。

宮野の仕草が嫌というほど鮮明に現れた。アイツは俺のこと、何とも思っちゃいねえんだよな。

これが所謂恋の悩みというやつなのか。

宮野を想うと息苦しい。

「いねーよ…誰も」

「……上手くいって…ないの……?」

「もともとアイツは俺に”相棒”っていう感情しか持ち合わせてないからな。告白はしたけど、返ってきてはねえし。…俺の完全な片想いだよ」

情けなくなったので、俺は冷めかけた珈琲を口に運んだ。

「………」

蘭は無言で俺を見つめていた。

言動を思い返していると、自ら振った相手に自ら恋愛話を持ち掛けるとは。蘭に悪く思った。彼女が立ち直っているのなら、余計な氣遣いかもしれないが。

話でも変えようかと、顔を上げた次の瞬間。

「っ…!」

目の前には蘭の顔があった。

触れた唇。

珈琲の匂いがした。

触れるだけのキスに、俺は頭が真っ白になっていた。

「ら、蘭……？」

テーブルから乗り出していた身体を戻した蘭は、今にも泣きそうな表情で、声で、「ごめん」と呟いた。

「おま…なんで……」

「好きだから」

「は…」即答した蘭に、俺は言葉が上手く出てこなかった。続けて蘭の口から零れてくるのは、涙で潤んだ声だった。

「まだ好きだよ…、新一のこと。簡単に何もない幼なじみに戻れなんて無理だよ…」

言葉を失うことしかできずに。

ただ、罪の意識に苛まれ、俺は席を立った。蘭を隣に連れ、公園まで来た。

こんなことがあった日の蘭は、決まって必ず家に帰っていたが、今日は違った。沈んだ様子で、元気を取り戻すことはなかったが、俺の傍にいた。

公園のベンチに腰をかけた時には、辺りはもう暗くなっていた。冬、気温も低く、寒くなってきた。蘭は俺によっ掛かり、もう涙を止めていた。

「新一：この優しさもさ、幼なじみとしてなんだね……」

俺が立ち上がった時、蘭は言った。

「ごめんね、まだ好きで……」

寂しげに笑う蘭。無理して笑うなよ。

途端に蘭は立ち上がり、俺を背中から抱きしめた。

「蘭……？」

無言で力を強くする彼女。しばらくして、彼女は言った。

「宮野さんと上手いかならないなら、私と付き合ってよ……」

声は力無かった。

それでも、俺の選ぶ道は変わることがないのだろう。

もう、戻れない。宮野を愛してしまったんだ。どうしようもねーくらいに。

Why(後書き)

新一のキャラが壊れかけてる気がしているのは、作者だけでしょうか。高校生の設定が大前提なので、似たり寄ったりの話が多いんですよね(苦)。

今、寝台に続く殺人シリーズと、姫のはなし制作中です。クリスマス設定の話も執筆中ですが、年内に載せられるのは一話のみかなあと思います。

いつも応援ありがとうございます！

次回もよろしくお願いします。

年の暮れに君と

「はあっ——」

両手に重い感覚が走る。手袋はしているはずなのに、指先は悴んで。雪はほんのり積もっていた。空を見上げれば、もうこんな時間か——と思い起こす。

少々買い過ぎてしまった。まあ大晦日とお正月だからいいわよね。歩みを止めることなく、ふと考えるのは、工藤君のこと。

今年は元の身体に戻れたわけだし、蘭さんと過ごすのかしら。

当たり前のことだ。必然すぎて、そうじゃなければと思う自分が馬鹿みたい。

コートのポケットの中から着メロが流れてきた。携帯に内蔵されている、何の変哲もないメロディ。

サブデイスプレイに光る名前は、工藤新一。

溜息ひとつついてみるものの、僅かな笑みを浮かべていては、全く嫌悪を感じさせないだろう。

「…もしもし」

「あ、宮野か？ A H A P P Y N E W Y E A R !」

「…は？ まだ明けてないでしょ。それに何よ急に。用があるならさ

っさと言いなさいよ」

「ほんっと可愛くねー」

……でしようね。

携帯の向こう側から聞こえてくる彼の言葉に、思わず同意。

「で、本題なんだけどよ。今日俺もオメーらと年越ししていいか？」

「…要約すると、工藤君が私たちと大晦日過ごしたいわけね。

でも博士今日はいないわよ。学会が昨日まで入っててね。今日まで帰ってこれそうにないから」

「えっ？マジか！？」

何喜んでるのよ、工藤君。

「じゃあ、尚更！一緒に年越ししようぜ」

自分が内心嬉しがっていることは認めざるを得ないけれど、疑問符が次々と頭に浮かぶ。

「…なんで？」

「あ、いや——それは、まー内緒内緒」

「じゃあ無理」

「っちょ、待て待て待て！切るなって！」

親指をHOLDボタンにかけようとしたことに、何故工藤君は気づいたのか。

「頼むよ、宮野。この通り」

どんな通りよ。

工藤君の焦った顔が目には浮かぶようで、苦笑してしまう。

「ダメって言っても来るんでしょ？——勝手にしなさい」

「よっしゃあ！じゃあ後で博士ん家な！」

工藤君の大声の後、ツーツーという機械音が聞こえた。気がついたら、家に着いていた。

自然と陽気な鼻歌が漏れた。

多くはないが、明日の為のお節料理を作り終えた。珈琲をいれるとソファに座った。

料理本を見て無理矢理作ったお節。味の保証が全くない。

コーヒークップから立ち上る湯気に向こう、玄関へと目を移す。湯気のせいかぼんやりした景色。外へと通ずる扉、それが開くことはない。

もう、11時50分。気がついたらこんな時間になっていた。静かな家の中で、賑やかなテレビをつけてみても、皆がカウントダウンを迎えようとしている。

工藤君が、遅い。遅い。

イライラと不安が入り混じる、変な心地だ。携帯に目をやる。あ

れから何の音沙汰もない。

工藤君、遅い。

…プルプル

携帯が震えた。

待ちに待ったかのように、立ち上がる。ふたつ折りの携帯を開くと、また彼の名前があった。

急いで靴を履いて外へ出た。上着を羽織らなかったせいか、外の空気が肌を刺した。

「…もしもし」

低い語調で彼を威嚇しながら、電話に出た。

「あっ宮野か？」

悪イ！急に事件で呼び出されてよ、今さっき終わったところなんだ！

「あなたねえ…何時だと思ってるの？」

あくまで冷静に。彼のことだから予想はついていたけど。白い煙りがふわふわと立ち上る。

「…今どこいるの？」

「宮野…やっぱ怒ってる…？」

電話から聞こえる声はシュンとしていて。怒ってるに決まってるじゃない。けど、これには弱いという事実。腕時計を見た。

……11時58分。

「もうすぐ年明けるじゃない」

「……………」

しょうがないから家に入ろうとした時。「わっ…」ものすごい力から、後ろから、抱きすくめられた。

「宮野、こんばんは」

背中越しに工藤君の声や吐息を感じる。『こんばんは』なんて初めて聞いたけど。

「何やってるのよ」

「わるい、遅れて…
オメー寒くねえのか？」

タートルネックのニット一枚。あの時は、上着を着ることを忘れていたから。

「暑いと思う？」

「……………すいません」

遅れたことについては、深く言及しないことにした。事件と聞けば、今やっていることも忘れて、すっ飛んでいくような人だから。推理フェチ。重々承知してる。

「…これ」

工藤君の腕がずりりと離れた。彼はポケットから何やらごそごそと取り出した。輝いたような気がした。

工藤君が私の前に手を差し出して、パッと手を開いた。

「…ネックレス？」

チェーンの中央に、キラキラ光る物体がついている。しかしよくよく見てみると、

「ガ…ラス…玉？」

「ははっ…これプレゼントなんだけどな……。こんなのしかないて…」

苦笑いする工藤君が腕時計を見た。

「5・4・3・2・1……。あけましておめでとう！」

「おめでとう」

「俺、なんでお前と大晦日過ごしたかったかわかるか？」

「わかるわけないでしょ」

「宮野が好きなんだ！」

「…はあっ!？」

あまりにも冗談っぽく、明るく、可愛いげのある笑顔で、そんなことを言うものだから。

工藤君が「あっち向けよ」と言うと、私の首にガラス玉のネックレスを付けた。一見子供騙しだけど、嬉しかった。

『好き』

冗談と受け流せない自分。見た目はクールぶってるけど、実はパニック。

皮肉すら言えそうにない。

でもお礼は言えそう。

「工藤君……………ありがとう」

「……………今年もいい年になりそーだな」

「…ええ」

年の暮れに君と（後書き）

…自暴自棄作です。

新一は可愛い感じにしました。志保ちゃんも段々と乙女化してて、微笑ましいかぎりです。笑

あまりダーク？な心理描写はなしにして、ほのぼの系です。

博士、大晦日も一緒に過ごせないなんて…！

中途半端な時間ですが、

今年一年、大変お世話になりました！来年もよい一年になることを願います。

それでは（＾ー＾）／

愛しい患者さん（前書き）

久しぶりの更新でした。軽い気持ちで読んで頂けると、嬉しいです。

愛しい患者さん

「……」

小さな吐息が震えた。やけに体が熱い。景色が歪んで映る。体から湯気が出ているような気分。

次々と述べてゆける不快感に、志保は顔をしかめた。ぼやぼやした頭な中で、思う。

あと……15分だ。

こくりこくりと頭が上下する。視界がぐるぐると回りだす。我慢しろ、と自分に念をかける。

黒板の上をさらさらと流れてゆく文字も見えずに、今は何の問題を提起しているのか、というかどこを教えているのかすら読めなかった。

——原因は何だろう。

働こうとしない能内を、必死に活動させる。

ああ、きつと。

昨日の小雨のせいだ。生憎傘を持たずにいた私（きつと昨日は大概の人間が）は、急に降り出した雨に襲われ、濡れて帰った。しかも晴れると油断していたせいか、遠くの大きなスーパーにまで立ち寄りに行ったのが災いのもと。

「ふう……」

体も心も溜息をついた。

ほてる体が悲鳴をあげる。わかってるから黙りなさい、と言ひ聞か

せては、眠りかけてみたり。

あと、5秒……

チクタクと時計が音をたてる。そして、チャイムが鳴った。

「はぁ……」

気持ちが緩んでいくのがわかる。すぐに「起立」の号令がかかり、ふらつく足で立ち上がった。礼がかけられると、30人ほどが一斉に頭を下げる。教師が顔を上げたと同時に、周囲から溜息が漏れる。周りの生徒が「腹へった」「お腹すいた」などと、空腹の意を示していく中、志保は席に座り込んだ。

お弁当なら、机の横にかけてある。しかし頭痛の方がはるかに勝り、とても手を伸ばす気にはなれない。

5時間、6時間……で今日は終わり。それまでここにいないくては。ただでさえ単位が危ないのだ——新一のせいだ。新一はこの身体になつてから、一層志保と行動を共にするようになった。助手か相棒か、志保をどんな目で見ていいのかは定かではないが、事あるごとに志保を連れ回す。

嬉しい、けれど小憎らしい。

蘭さんが苦しんでいるのを知っていて、私に近づくから。小憎らしい。何より、体が中々拒否できない自分に苛立つ。

「これも、一種の罰かもね」

重い思考は置いておき、気晴らしに屋上でも行こうと考えた。

「宮野っ——」

「へ……」不意に引かれた手に、体はぐらりと倒れ込み、視界がぐにやりと振曲がった。志保を、上手く新一が受け止めた。

「おっと…おめー大丈夫か？」

案外顔の距離は近かったり、それに赤くなってしまったり。そんな自分にまた苛立ちを覚える。そんな二人のやり取りに、思わず見取れているクラスメートは他所に、新一は尚も顔を近づける。

「…なに？…あなたのカオ、こんな…近づけられても困る…んだけど…」

熱で頭が浮かされながら、志保はとぎれとぎれに言った。新一の顔がふたつに見える。口から出る息が熱く、空中に漂っていく。

「いや…弁当あるなら、一緒に食わないかって思ったんだけど——おまえ、熱のあんのか？」

「…あるわけないでしょう」

ぷいと志保は顔を背けた。

「おまえ嘘下手だな」

「こんな顔真っ赤にしといて」と呟きながら、新一はおでこを、志保のおでこにくっつけた。

「な、なにを…」

睫と睫が触れそうなほどの距離。ほてる体の体温が1、2度上昇する。熱の体には危ない行為。

「やっぱ熱いじゃねーか…」

呆れながら離れてゆく新一に、ほっと胸を撫で下ろす志保。熱さに拍車がかかったため、おでこが熱いのも当然な気がした。

「ほら、保健室行つて、今日は早退しろよ。付き添ってやるからさ」

新一は志保の手を引いた。

「…いいわよ。一人で行けるから…」

掠れた声を発しながら、一步を踏み出した志保だったが、その足どりはふらついていた。呆れた溜息をつきながら、新一は無理矢理志保の手をとった。

「…ったく…おまえに倒れられたら、俺が困るんだよ…」

細身の志保を背負うと、新一は歩き出した。背中で熱い吐息が感じられた。「こいつ…軽いなあ」心の眩きも、意識が薄れている志保に聞こえるはずもなかった。

「なあ！俺と宮野早退するから、先生に断つといってくれよ」

クラスメートが新一と志保に目をやる。あ、ああ、と戸惑いがちに男子生徒が答えた。蘭が悲しげに目を細めるのに、全員が気づいていた。

昼休みであり、廊下の人通りもある程度はあった。物凄い視線を浴びてはいたが、そんなこと気にも留めなかった。志保のことではないっばいっばいだった。

＊

「ん」

冷たい何かが額に張り付いている。心地好いものだ。暖かい暖房の音が聞こえた。隣には湯気のたつ何か。

視界がはつきりと見えるようになって、ここがどこだかは一目瞭然でわかる。博士の家。意識がはつきりしたところで、喉と頭の痛みが再び襲う。

かけてある毛布から身体を起こすと、湯気を立てる何かはお粥だということがわかった。おでこに貼ってあるのは、世に言う冷えピタだ。

きっと博士が世話してくれたのね。申し訳ない、いつも。何だか気分が上がらない。風邪では気分が塞ぐって本当のことらしい。ふう、と息を吐くと後ろでドアが開く音が聞こえた。

「はか…」

お礼を言おうと振り向くと、そこには博士とは似ても似つかぬ人物が立っていた。

「工藤…君…？」

「あ、起きたのか」

何気なく言う彼は、制服のままだった。

「何でいるのよ」

「何でいるのよ、って言われてもな…」と工藤君は困ったように頭をかいた。

「オメー、熱で足ふらふらだっただろ？だから背負って帰ってきた」

「背負って!？」

「なんだよ？悪いか？」

目をぱちくりとさせる彼は、相変わらず善意の塊だ。暇人ねと毒づくのは、いつもの悪い癖で。直そうと思っても、上手くはいかない。彼の前だと、尚更。

こんな皮肉が言えるくらいなら大丈夫ね、わたしも。

状況から察するに、工藤君がいろいろと看病してくれたらしい。確かにさっきよりは体が楽になっている。確
ん？

「ちょ…ちよつと待って…」

「どした？」工藤君が私の傍までやってきた。その彼を、キッと睨みつける。

「何で私、パジャマ着てるのよ!！」

「あ…いや……」

工藤君の目が空を泳いだ。

「着替えた方が…寝やすいかなーと…」

「ばか!」

恥ずかしさで体がおかしくなりそうだ。頭がどうかしてしまいそうだ。混乱と焦りと動揺で、手元にあったクッションを工藤君の顔にボンと投げた。

「わかったって！や、でも大したところ見てねーから。ちょっとヘソとか太ももが見えたくらいで：はは」

「ほとんど見えてるじゃない！！」

「あ、あと：博士ん家の鍵も宮野さんの制服あさりました」

「もう知らないから！」

激しい言い争いが崇ってか、否。志保の熱は一日で完治したそうな。

愛しい患者さん（後書き）

大晦日以来の更新でした。

最初はシリアスめでしたが、結局はコミカルなものとなりました。笑

ここでお知らせなのですが、「姫のはなし」削除になるかもしれません。中々次話が繋げられずにいます。申し訳ございません。

次回もよろしくお願いします！

k i s s (前書き)

倉木麻衣さんの「k i s s」からアイデア頂いたので、タイトルも同名で。短めです。

k i s s

「あっちえー」

思わず漏れだすことば。丸い粒の汗が数滴したたり落ちる。新一は運動着の首元をパタパタと扇いだ。

サッカー部員に混じってプレーをすることはしばしばあり、今日は特に用事もなかったので、参加したに至る。夏が近づいている今日この頃。真夏というわけではないが、運動をすると汗が浮かぶ。プレーを終え、日陰の体育館裏のコンクリートの段差に座る。ひんやりしていて気持ち良かった。

新一の隣に腰をかける志保は、新一にタオルと水を何気なく差し出した。

「お、サンキュ」

「まあ、サッカーがお上手なこと」

「だろ？」

新一に用があった志保は、校内中を探し回ったが、どこにもいない。漸くグラウンドで見つけたこの男。サッカーに熱中してゐるではないか。溜息をつきながらも、自分を見つけた途端、新一はプレーをやめ、自分の方に笑顔で走り寄ってきたことに、悪い気はしなかった。傍から見れば恋人の関係。

それでも、『そうじゃない』と言う二人。隣に居る瞬間の気分も、恋人以上。だから、嘘を吐いてるつもりもない。

新一は隣に座りながら、何を考えてるのかも理解不能な彼女を見た。志保は暑さを感じさせない。顔も滅多に赤くなることはない。ブラウスから覗く細く白い腕も。

「オメー健康だよな？」

「え？」

そう、思わず問いたくなる。

「なによ、急に」

「赤くなるとことか、あんまり見たことないから。低体温ってヤツ？」

「まあね。別に好きでこうなってるわけじゃないわ」

「そりゃそーだ…」

納得する新一の首に何かが触れた。「ん？」と新一は目をやる。すると志保がタオルで汗を拭いていた。

「あ、ありがとな…」

女性らしく愛想のある行為に、新一は戸惑いを覚える。

「風邪ひかれて、移されても困るわ」

ちよっとムキになる志保を見て、新一は思わず笑う。志保は「あなたねえ…」と呟いた。何でもない話でも、笑顔も、ときめいてしま

う。志保は黙って正面を向いた。
風が心地よく吹く。

新一のシャツがふわふわ浮いた。汗がヒヤッと乾いた。
志保の髪が風でふわふわ靡く。彼女が髪を手で抑える。そのひとつひとつの仕種さえも気になるから不思議だ。

「はぁー」

少しでも言葉を発すれば、気持ちちが溢れる。風と同時に心が抜け出すような感覚。
確かに宮野を愛し始めてる。

「宮野」

そう呼ぶと振り向いた。
まだ髪が汗で濡れてる。
軽く彼女の腕を引いて、触れるだけのキスをした。

k i s s (後書き)

私は割とこういうの好きなんですが…。あはは。如何でしたでしょうか。短く抑えました。

次回話は、今二話作成中なのでどちらになるか未定です。ミステリー系か恋愛ものです。ミステリーにもちよくちよくお惚気入ります。が。笑

今回は前回よりもっとネタ深くしたいと思います。

読了ありがとうございます！

次回もよろしくお願いします。

舞台The last urge to kill殺人事件(1) (前書き)

題名ながい。

今回は久々の推理シリーズです。

舞台The last urge to kill殺人事件(1)

目を閉じろ、新一の命令に従い、志保は瞼を固く閉じていた。開けたくて堪らない衝動を必死にこらえて。新一の前で目をつぶるという作業も、何だか妙な緊張を生むもと。その動揺が伝わらぬように、志保は息を規則正しく吸って吐いた。ふと、志保の両手が取られた。

「ほら」

言葉と共に、手の平に紙らしき感触がする。

「…?」

戸惑いと期待で抑え切れなくなった瞳が、鬱すらゆっくり開く。

「もういいぞ」

そして、新一の声でぱちりと開ききった。細長い長方形の紙。何かのチケットらしい。志保は紙の活字を読んだ。

「The last urge to kill?」

＊

舞台公演初日を一週間後に迎えた今日、舞台上での練習は、和やかな雰囲気にも包まれていた。しかし残り少ない貴重練習のために見え

る緊張と集中の色も垣間見える。主演女優の草刈麗子は、きらびやかなドレス衣装を身に纏い、袖からステージに向かって歩いてきた。「おはようございます」

礼儀正しく深くお辞儀をする麗子に、皆は温かな視線を向けた。

草刈麗子といえば、日本を代表する舞台女優である。5歳で舞台デビューした後、立て続けに舞台に登場。後、主演を果たした作品で好評を博し、舞台俳優にとって確実な地位を固めた。以後、29歳になる今日まで出演作品は優に100を超える。まだまだ若手ではあるものの、芸歴が長いため、スタッフも気を揉むひとりである。

「おはよう、麗子さん」

監督・三上直人がここにこしながら麗子に近づいた。麗子は皆に背を向けるように立つと、監督に妖艶な笑みを浮かべた。

「おはようございます、監督」

監督はそれに満足したようにニヤリとした。

「ほら始めるぞ！」

パンパンと鳴らされた手に、皆が慌てて準備をしだす。いつも何にも変わらない練習風景だった。

いくつかの照明ライトが熱くステージを照らし出す。主役である麗子は、出演時間が一番長く、ほぼ、そのステージ上で演技といえるかもわからないものをしていた。大したこともしない脇役の者は、数少ない自分の出番を、今か今かと待ち構えていた。…と、脇役衆の中、袖にメイドの格好をした若い女がいた。女性は場面をしっかりと弁え、喉を鳴らした。どうやら次はこの人の出番らしい。女は、小道具のティーポットにティーカップを乗せた盆を持つと、ステージに走り出た。

「お茶をお持ちしました」

ネグリジェを着てベッドに座り込む麗子の前に、女は出ると、盆をテーブル上に静かに置いた。麗子の顔が不気味に光った。

麗子は組んだ足を左右変えた。その途端、去ろうとした女性は、足に躓いて派手に転んでしまった。「きゃっ」ドテツと大きな音を立てて、ふいに掴んだテーブルクロスがずり落ち、上に置いてあった

盆が勢いよくひっくり返った。ガッシャーン！ティーセットが割れる音が鳴り響いた。

「オイなにやってんだ！メイドB！」

三上の声が意地汚く響く。

「いたた…」

「だっ、大丈夫？森口さん！」

慌てて麗子は女に近寄った。おかしくてたまらないという顔を、スツフや、誰にも見られないように俯きかげんで、女を抱き起こす。

「…大丈夫です」

「ほら、めんどくせーから次の場面いくぞ！」

女が立ち上がる間もなく、三上が叫んだ。あっという間に場面は変わり、次々と別の役者が入って来た。出る場のなくなった女は、静かに立ち上がると、舞台袖に向かって歩き出す。

麗子は、ステージの中央にやって来た主役級に豪華な衣装を身に纏った二枚目な男性に近づいた。そう、この舞台のヒーローの、俳優の清水良である。清水に、先ほどとは大違いの、可愛らしい笑顔でウインクをしてみせた。

「がんばりましょうね、清水くん」

「あ、ああ…」

清水は曖昧な返事をする、袖に去って行った女性の背中を見つめた。

＊

夕焼けが綺麗な時刻だった。赤く染まるアスファルトを過ぎ、5時から始まる舞台を見ようと、私達は劇場の中へと入って行った。

10年ほど前にできたこの建物は、新しい方で、内部の至る所に「The last urge to kill」のポスターが貼られている。宣伝はバッチリってわけね。工藤君は受付に行くと、チケットを差し出した。私は少し離れて、いろいろ探索してみたら受付へと向かった。受付の女性がパンフレットを渡してくれた。ポスターと丸つきり同じの写真がパンフレットの正面に印刷されている。

「へえ珍しいわね」

「ん？」

「あなたが舞台に誘うなんて、思ってもみなかったから」

「へへ、今日はな特別なんだ」

少々顔を赤らめて言う工藤君は、いつでも私を期待させる。まだ、付き合って1ヶ月。相棒暦1年。私は気を取り直して、パンフレットにもう一度目をやる。

「The last urge to kill——最後の殺意なんて工藤君らしいわね。舞台も結構な殺人劇かしら？」

「まあそう言うなって！これに付き合ってくれるから、宮野なんだろう？」

こんな台詞を言われては、黙るしかなくなるじゃないか。いつも彼はずるい。

「頼むよ！もうちょっと待ってくれ！！」

突然、誰か（恐らく男）の大きな声が耳を突いた。工藤君が歩みを止めた。その一声だけで、男の助けを乞う声は聞こえなくなったが、工藤君がいつもの何かに首を突っ込みたくなる衝動のせいで、その声のした方向へと小走りをした。雰囲気、来ては行けないと忠告しているような感じの場所。

関係者以外立入禁止の札がドアにぶら下がっている。

「大きな声を出さないでちょうだい。私の名に傷をつける気？言っただけよ。利子も含めて今週中には払って。なに？払えないなんて

言わないでね？私はあるたの首なんかいつでも切れるってこと、忘れないでね」

「くそっ」と男は舌打ちをした。明らかに金銭トラブルだ。気取った、上からものを言う女性が男を脅している。扉に耳をくつつける工藤君の後ろにくつつく。

「あの声って…確か女優の草刈麗子だよな？」

「おそろくね。彼女、今度の舞台の主演女優よ」

個室から、椅子から立ち上がる音が聞こえた。

「ヤバイ、戻るぞ」工藤君が囁いたので、私は元来た道を引き返した。

「なんか幸先良くねえな」

「…彼女、清純派女優だったわよね。結局裏はあるものってことかしら」

私にとってはあまり抵抗のない事実だった。裏の世界は嫌というほど見てきた。工藤君がどうかは知らないが、流行に疎い彼女でも彼女を知っているのだから、かなりの有名人ってことだ。

とりあえず、会場に入り席に着く。ああ、なんだかまた事件の予感がある。彼といれば遭わないことが珍しい。恋人（恥ずかしいが）として過ごすより、助手として過ごす時間が多い。今日ぐらいは…なんて思うのだが、それも仕方がない。

「おっ、始まるみてーだな」

腕時計に目をやった彼が言う。程なくして辺りが暗くなり始めた。

暗闇となった会場。バツと照明がステージを照らした。熱いライトの下には、さっき男を脅していた女優草刈麗子だった。

「どうしたら…私はどうしたらいいの！」

彼女は、両手で固く短剣を握りながら叫んだ。

……さあ、今始まった舞台The last orge to k

いーをざつと説明してみる。この舞台は簡単に、父と母と娘、家族の愛憎劇とでもいいえ満足だらうか。生まれはとある王国の娘、マリエツト。彼女は両親を狂うほど愛していた。両親も自分を愛していると思っていた。いつからだろう、そう、母が新しい子供を産んだ時。その時から、母はマリエツトに冷たくなった。新しい子供に付きつきり、新しい子供を、“狂うほど”愛していた。何故何故なぜ：いくら問いても彼女にはわからなかった。憎しみより不安と謎。しかしそれは父が教えてくれた。母と父の激しい言い争いは、マリエツトが母の娘ではないことを語っていた。憎い憎い憎い：彼女を支配するのはこの気持ちだけだった。母は今まで自分に愛するという感情など抱いたこともなかったのだ。母と父の愛人、母の新しい娘だって……すべてが。

その後彼女は半狂乱になって自分自身で命を絶っちゃうわけだけど。愛と憎しみは紙一重。信じるものが壊れた時、人間なんて何をやらかすか知れたもんじゃないんだから。

隣に座る工藤君をちらり盗み見てみる。珍しく真剣に鑑賞中。それとも見とれているのは、あの草刈麗子だらうか。

劇自体は、まだマリエツトがその事実を知って絶望の淵にいるところ。天蓋ベッドで抜け殻のようになっていた。「お茶をお持ちしました」メイドの女性がお茶をテーブルに置き、舞台袖に消えていった。

マリエツトがカップに触れたその時「ビリッ」何かが天蓋の布を引き裂いた。一瞬の出来事。マリエツトは巨大な照明の下敷きになっていた。

舞台The last urge to kill殺人事件(1) (後書き)

いかがでしたでしょうか。難しいですね、ミステリーは。このシリーズも5話くらいには収めたいなと思います。

本当に駄目な所たくさん見受けられると思います。できればアドバース頂けると嬉しいです。

次回もよろしくお願いします。

スリーピング（前書き）

初高校生コ哀です。あまり期待しないでください。

スリーピング

温かいタオルケットに包まって、目を覚ます。ぼんやりしてるけど、満たされた頭の中で。カーテンの隙間から漏れる光が眩しくて、寝返りを打った。

すると、目の前に新一否、今は江戸川コナンとなった高校生男子が寝ていた。腕は哀の頭上に伸ばして。もうすぐで抱きしめてしまいたいような、そんな距離。

すーすーと気持ち良さそうな寝息を聞いて、哀は頬を緩ませた。

少年の鼓動がしっかりと聞こえる。

何故ふたりで寝てるのか、経緯はまったく覚えていない。

気がつけば、この少年の傍にすることが当たり前となっていたあの頃……そして、今。

初めての愛しさは、ちよつとずつ形を変えながら、それでも抱き続けている。少年がいると、背負う物なんか消えてしまう。

コナンは解毒剤を飲まずに今がある。

彼はずっと傍にいた。必然的なことなのか。この身体では、必然的なことかもしれない。

理由を問う度、「まだ言えない」と言う彼。

その男が目を閉じてることを確認してから、哀は視線を外した。

「……好き…」

ぽつりと哀は呟いた。あったかくて、ぽやぽやした頭の中。コナンの片方の手を哀はぼんやり握りこんだ。

ぽやぽやなんて言い訳かしら。

もう一度コナンに目をやる。次の瞬間目が見開く。

「へ…あなた…起きてたの…？」

「…ああ、そうだな」

少年はニッと笑った。

少女の顔が固まった。

「…悪趣味悪趣味」

「うるせー…できるだけ長くこうしてたかったんだよ」

「どういう意味？」

哀は少し苛立ってそっぽを向いた。そして段々熱を帯びてきた顔を必死に冷まそうとした。

コナンは頭をくしゃくしゃとかくと、赤い顔をベッドに押し付けた。

「さっきのことだけど…よ」

「……」

「おれも…！俺も…灰原が好きだ」

高揚したコナンの声。

「えっ…」

思いつきり哀をギュッと抱きしめた。

さらっとしたワイシャツの感触。彼の匂い。ほのかな体温にほっとした。

コナンの胸に、哀は頭を押し付けた。

「ほんと…？」

「真面目な話」

「あなたホント大馬鹿者ね」

「けっこー見る目はあるって自負してんだけどな」

「そうかしら」

「そうに決まってるだろ！」

「……ちょっと遅い朝食、何食べる？」

「うーん……昨日のカレーだな！」

スリーピング（後書き）

短めでした。ゆるゆるな二人をお楽しみいただけると本望なのですが…；なんだか…すみません…。

性的関係ではなく、ただのお昼寝というのをお間違えないようにお願いします。

沈黙の15分、二回目行こうかななんて考えております。それでは、次回もよろしくお願いします。

ひとりじゃできないこと(前書き)

近頃似たり寄ったり作品が多くて申し訳ないです。

ひとりじゃできないこと

「――なあ…、返事はまだか…？」

新一の声が、こうも透き通って耳を貫くのは久しぶりだった。聞いた志保は、黙って目を伏せるだけだった。

数週間前、俺は宮野に告白したんだ。「好きだ」とただ一言。他に何も要らないと思っていた。この一言で、宮野はすべてを気づいてくれるって。俺の気持ちを…きっと理解してくれるって。それから、宮野は答えすら出さなかった。

「時間を頂戴」なんて、簡単明瞭な言葉すら発することはなかったのだ。

フラれたんだ。俺にだってわかったけど、心ってそんな楽に割り切れるもんじゃねーんだ。

せめて、「好き」とか「嫌い」とか…：「なんでもない」だっていい。俺に何か、答えをくれよ。

それを催促するのが今の言葉だった。

外では雨が降ってて、家の中は異常な静けさだった。珈琲の湯気も、もう消えて。志保は雑誌から目を離すことはなかったが、動揺は打

ち寄せていた。

工藤君が私を見てることがわかるからこそ、あなたを見ることができ
ない。

わかってる。すべては自分のためにしてることだって。

醜い心が顔を出して。それを見たくない自分がいるから、私は答え
を出さないのだ。出す勇氣すらないのだ。

部屋の中は妙に薄暗くて、私を妙な不安に陥れる。

「俺、まだ待ってるからな」

忘れてほしい。すべては無かったことに。
そんな無理強い。私が一番できるはずなのに。

目を伏せて、雑誌の文字を追ってるなんて。こんなにも呼吸が奮え
る。動機が早いのに。

「……嫌いなら嫌いでいい」

「……」

「言えねーほどか…？
…同情は要らねえよ」

志保は初めて顔を上げた。
見開いた目は新一を見据えていた。

「私が同情してるのは……あなたじゃないの」

「え？」

「でも、結局は自分が罪悪感に苛まれたくないだけ」

「宮野……」

「だから……そんな私が一番……嫌」

無表情に見えていた彼女の力オも、時を重ねていくごとに色がついていく。確実に豊かになっていく宮野に、俺はますます惹かれていく。

……それは、どういう意味だ？

「ねえ、これも自分の為かもしれないけど……身勝手だけど……聞
いてくれる？」

「……当たり前だろ」

「工藤君……」

わたし、あなたのことが好き」

「…え」

予想外の展開に、頭が処理しきれない。

「みやっ…」

「…だけど、」

「え…」

「好き、愛してる。だけどそれは許されないこと」

宮野の瞳が澄んでいることに、恐怖を覚える。宮野のことばの意味が、一瞬にして理解できた。

“蘭”

呟いた人の名は、数ヶ月前に俺がふった——捨てたも同然の女性だ。17年間募らせた想いに、終止符を打った。ずっと——、好きだと思ってた。それを超える何かが、コイツからは生まれちゃったんだ。自分の気持ちを知った以上、蘭には伝えなくてはならない。

宮野に想いを寄せながらも、罪の意識に囚われて、蘭に何も告げずに傍にいられるほど、俺は強くない。

理由づけするみたいだが、蘭ももう新しく傍にいる奴がいるみたいだ。

ソファから思わず立ち上がって、宮野をぎゅっと抱きしめた。

「好きになんのも、恋するのも——、それは一人でもできる。けど、愛し合うのって——ひとりじゃできねーだろ？」

少し抵抗しかけた宮野、抵抗は消えて。

表情はわからなかったけど、泣いてるのが感覚で伝わった。

「……キザ」

「うるせー…」

「ばか……愛してる」

俺は宮野を抱きしめる力を強めた。

ひとりじゃできないこと（後書き）

心理描写系が多くて、飽き飽きという方いらっしゃると思います。すみません。気ままに書くタイプなので。どうかお付き合いください。

次回は舞台へに戻ります。よろしくお願いします。

藍色の傘

「……最悪」

志保は空を睨みつけた。彼女は靴を履いたまま、歩みを止めている。ザーザーと音を立てて降り続ける雨は、さっき彼女が窓から見た時より完全に強さを増していた。

これ以上弱まることはない。志保にはすぐにわかった。

傘を借りる人もいない。

傘は持って来た。クラスメートが教室で「降りそう…」と呟いたことがすべての始まり。彼女は傘を持って来てない上に、直ちに帰らないといけないらしく、志保は自分の傘を勧めた。「私はもう一つあるから」そんな嘘をついた。

あの降りを甘く見ていたら間もないほどの豪雨。

工藤君は……事件に飛んでいっちゃったし。

志保は溜息のひとつでも吐くと覚悟を決めた。待っていたって止まないんだから。

鞆を両手で頭の上に被ると、志保は雨の中へと飛び出した。ロープアーがピチャピチャと水の跳ねる音がしたが、それも激しい雨音に掻き消された。

太陽の下にいてのと、雨に濡れて逃げてるのでは、雨に濡れてた方が私らしい。梅雨時期の湿った空気、そして温い雨は、肌を流れ落

ちる度に冷たさへと変わる。

風邪ひくかもね。

……そうだ、工藤君。

彼、傘持ってるかしら。今頃濡れて帰ってたり、してないわよね？

学校からどのくらい走っただろう。まだほんの200メートル。脚が冷たくなってきた。

……後ろから誰かの息遣いがした。私と同じ境遇の誰かだろうか。

「宮野！」

確かに聞こえた。激しい雨音に埋もれながらも、彼の声が。立ち止まって後ろな振り返ると、傘を片手に走って来るヤツが見えた。

「工藤君……」

「ハアハアッ…やっと追いついた…！」

彼は息を切らしてた。制服が濡れ気味だったのは仕方ない。彼はすぐ私を傘に入れた。

「オメー傘ないんじゃないかって思ってたよ」

息を調えた彼は、顔をあげると笑った。

「事件は？」

「ああ、片付けてきた！」

片付けてきた！って。

——ひとりかと思ってたのに。彼の藍色の傘を彼の方へ少し押しやる。必死な工藤君を見て、とても愛おしく思えた。

「ありがとう」

志保は少女のような柔らかな笑みを浮かべた。

「……」 新一は少し顔を赤くし、目線を上へずりあげた。

「ほら、濡れてんじゃないか」

彼の手が頭に触れた。

そう、彼は現場から走ってきたの。まったく彼の優しさにまいてしまう。

「大丈夫よ……」

そんな工藤君の前では、あなただって濡れてるじゃない、とツンとした表情になってしまう。それは私の照れ隠し。雨の中はまだ素直なほうだ。

工藤君の冷えた吐息が顔にかかる度、何かを伝えたくなる。

「帰るわよ」

志保は手を、持ち手にある新一の手の上に重ねた。

「おう」

——ここにある温かさは嘘じゃない。
相合い傘に気恥ずかしさを感じるなんて乙女心を抱えながらも。私
は工藤君に身を寄せてみた。

藍色の傘（後書き）

一ヶ月ぶりです。やはり梅雨時期なのでこれかな…と。藍色^{あい}の傘つてのがポイントですね。

一向に舞台^{うたい}が更新できないですね。

次回もよろしくお願いします。

s i c k n e e s ! (前書き)

今回も「なんとなく作品」です。話は小松未歩さんの同名タイトル「s i c k n e e s」から。

s i c k n e e s !

「オメー何か欲しいものあるか？」

事件からの帰り道。工藤君の一言に、私は足を止めた。

「どうしたのよ、急に」

最近イベントなんてあったかしら、思い返してみる――誕生日でもなければ、俗に言う交際一周年記念日なんかでも、クリスマスでもない。

「……今日みたいになさ…、いつも現場に志保を引っ張りだしてばっかだろ。なんかプレゼントでも、って思ってたよ」

…そんなこと気にしてたの。そんなこと思ってたの。

「プレゼントなら、サプライズにやるもんじゃないのかしら」

呆れた風に肩を竦めてみたけど、嬉しさはカオに出てるはず。

「わ、わるい…」

日に日に愛おしくなるの。
あなたが。

プレゼント……ねえ。

唐突に言われると、思い浮かばないもの。フサエブランドのバッグとか、普段はそんな物欲をねだってる。

……ホントは、

プレゼントなんて毎日もらってるくらいだ。

彼といられる幸せ。そうやって私を想ってくれる幸せ。

願っても願っても叶わない恋だったのに。夢だったのに。

彼は私の傍にいる。こんな幸せってない。

「…思いついたか？」

くいと工藤君が顔をだした。

「……ん…」

顔が至近距離にあるだけで顔を背けたくなるほど、ドキドキする。

「……工藤君、私たちって恋人同士…？」

上目遣いに言うなんて私らしくないけど。工藤君は目をパツと見開く。恥ずかしい？そんな彼は可愛い。

「ああ。あったりめーだろ！」

…なのに。

私はまだあなたと恋人らしいことをしたことがない。

手を繋ぐとか。

抱きしめるとか。

キスするとか。

こんな甘い考え、バカみたい？

「…プレゼント決まったわよ」

「ん、なんだ？」

単純に聞く工藤君。恥ずかしくて言えそうにないのに。

事件は鋭いくせに、女心には鈍い。事件を解くみたいに、私の心も解いてよ。

「…探偵なら、私のしてほしいこと見抜いてよ」

これはちょっとした拗ねと挑戦と期待だ。

私がそう言うと、工藤君は歩みを止めた。

「？」彼の顔を見てみると、街灯が眩しく私を照らした。読まれてる？——何かを。

そう、彼はどこか不敵な笑みを浮かべてた。

「…オレは探偵だぜ」

あっという間。ぎゅっと引き寄せられて、唇を奪われて。

甘い感覚が唇を麻痺させる。

甘いファーストキス。

甘い味がした。

鼓動はただ速まるばかり。

唇を離すと、どこか口惜しい気がした。

ああ、愛おしすぎて。

こんなにも彼が欲しいなんて——もう病気。

もつとしたいなんて欲求。

そんな余裕、あるの？

ほてった顔のまま、

「……もつと」

なんて言った私はバカ。

工藤君は子供をあやすようにもう一度笑って、私に深いキスをした。

s i c k n e e s ! (後書き)

似た作品が多く、申し訳ないです。今ネタが爆発中でして、とにかく書きたい作者です。質が落ちてるかなと思います。

さてさて、小松未歩さんの「s i c k n e e s」！最近「e v e r y w h e r e」をゲットしまして。舞い上がって早速書きちゃったに至ります。

お店の中で流れていたZ A R Dさんの「夏を待つセイルのように」にへっけりしました。

さて、次回は珍しい新哀になります。次回もよろしくお願いします。

「三毛猫失踪事件」(前書き)

ちよつとよくわからないお話。

〈三毛猫失踪事件〉

「最近、ホームズに心酔して作家がホームズを主体とした短編とか書いてんじゃねえか。それ見たら結構いけるんだよな。」

新一の話にまたホームズの火がついた。志保は新一の向かい側で、ミルクティーを口に運ぶと、「へえ。」と相槌を打った。

「オメーは何か好きな探偵とかいねえのかよ？」

「私？…灰原の由来になったコーデリアも好きだけど——興味深いっていったら、エルキュール・ポアロかしら。」

「ああ、アガサ・クリスティーの。」

「ええ。彼の場合、足で情報を稼ぐより、椅子に座った心理学でしよう。面白いと思わない？」

「心理学、なあ……。」

「あら、名探偵さんの性には会わなかったかしら。」

「そんなことあねえけど…。確信が掴めねえからな。物証最良なのはあるかも。」

「……心理学に自信がなかったりして？」

面白そうに志保が笑う。

「なっ…そんなことはない！」

「……じゃあ、あそこの窓際の席に座ってる髪の長い女性。軽く推理してみてください。」

志保は窓際を視線で示し、新一もその女性を見た。

「…ふうん。あの女性は、気晴らしに喫茶店に立ち寄った常連客。」

真剣な悩みがあり、たった今長い距離を歩いてきた。職業は…飲食店の店員ってとこだな。」

「どうして分かるのよ？」

「人と待ち合わせている様子でも、何かを食べに来た様子でもない。現に彼女の頼んだ珈琲は冷めきってる。あと、彼女の頼んだ珈琲と一緒に運ばれたシフォンケーキ。あのケーキは、この喫茶店で常連にしか出されない物だ。」

新一は長い話に息をついた。

「履き慣らしたヒール靴を履いて軽く靴擦れしたらしい。食べ終わったケーキの皿を、机のはじに寄せている。あれは飲食業に携わる人によく見られる癖だ。」

「…はいはい、さすが名探偵さんですこと。」

志保の厭味に、「なんだよ、その顔は。」と新一は彼女を見た。

「でも、確かめないとまだ正解とは言えねえよ。」

妙に謙遜する新一に、志保はクスリと微笑んだ。

「…工藤君、確かめるチャンス到来みたい。どうやらあなたに依頼って雰囲気ね。」志保の言葉に、新一は後ろを振り向いた。――そこには、二人が推理の的にしていた一人の女性が立っていた。

「…あなた工藤新一さん？」

「…ええ、はい。」

新一は当の女性を前に戸惑いながら頷いた。

「ご、ごめんなさい！急に！私、立原江里と申します。」

薄黄緑色のカーディガンを羽織り、白いスカートを履いた自称立原江里は、長い髪を耳にかけながら頭を下げた。

「私、あなたのファンなんです。差し支えなければ席と一緒にしてよろしいですか。聞いて頂きたい事があるんです。」

自己紹介を足早に済ませ、すべてを一人で語ってしまった。ついでに席まで一緒にしろ、と要求してきた。

「ああ、どうぞ。」

戸惑いながらもあくまで紳士的に対応する新一。立原は新一と志保

の間に椅子を持ち寄って座った。志保は露骨に顔をしかめた。

「こんなところで会えるなんて本当驚きました。まさかと思って話し掛けて良かった……。あれ……」

立原は志保を見、

「この女性、やはり工藤さんの恋人ですか？」

と言った。志保は突然の一言に赤面する。

「志保か？ あっああ……俺の恋人だよ。あと兼相棒ってとこだ。」

「ああやっぱり。テレビでよくお二人が一緒にいられるところ、拝見しましたので……ちよつとショックですけど。」

志保は新一が詰まりながらも肯定したことにホッとしていた。

「ところであなた、工藤君に聞いてもらいたいことって？」

志保は新一のファンと名乗る立原に敵意を示していた。

「……あっはい。事件なんです！！」

立原は不意に叫んだ。

「事件？」

「はい。私、ずっと朝から探してました。朝起きたら姿がなかったんです。もう……どこを探してもいなくて。」

「何がです？」

「……猫です。」

「猫オ？」

上げて落とす、というヤツだ。

「呆れないでください！……あの、これ私の猫の写真です。」

と、立原は鞆からそくさ一枚の写真を取り出した。一匹の三毛猫が座布団に寝転んでいる写真だった。

「私……こういうのも恥ずかしいんですが……すごく貧乏なので、アパート暮らしで。ゴマは、そんなアパートに咲く一輪の花なんです。拾ってきたんですけど……もう可愛くて！」

「ああ、はい。わかります。」

「けど、朝起きたらゴマがいなかったんです！驚いて、外も探し回ったんですけど……。」

「その：ゴマは、普段勝手に外に出たりしなかったんですか？」

「いいえ、たまに外に出してやることはありましたけど、私が扉を開けない限り、出ることはできません。」

「……」

黙る新一を見て立原は言った。

「…誘拐ですかね？」

新一はいつもの考えるポーズになると、しばらく口を閉ざした。志保は観察するような目で、新一を見た。新一はようやく口を開いた。

「……立原さんの部屋は、何階ですか。」

「さっきも言った通り、ボロ安アパートなので二階までしかないんです。私の部屋は一階です。」

「…昨日は暑かったですね。」

「え？ あっはい。」

突拍子もない新一の言葉に、立原は首を傾げたものの、慌てて頷いた。

「ムシムシとした熱帯夜で、都内では34度ありました。…昨日はどうやって寝ましたか？」

脈絡のない質問に、立原は少々不審そうな顔で答える。

「…そりゃあ、暑かったので…扇風機をつけて、窓を開け……あっ！」

「窓を開けて寝たんですね？ 立原さんの部屋は一階でしたよね。それなら三毛猫のゴマは、網戸を開けて外へ出た可能性があります。」

「……な、なるほど。そこまで考えていませんでした。」

呆気ない問題解決に、立原は恥ずかしげに頬を染めた。

「動物は必ず家に戻ってくる習性がありますから、ゴロも直に帰ってくるはずですよ。」

新一は探偵の務めを果たした。依頼主を安心させるという務めのひとつだ。志保はがっかりした気持ちを、表に出さぬように気をつけた。

「わかりました！ ありがとうございます。家でゴマを待っています。」

なんだか、お手を煩わせてしまってすみません。」

立原は何度も頭を下げると、二人に感謝と別れを告げて、店を出て行った。

「はあ…、呆気ない平凡な事件だったな。」

新一は肩を落とした。

「あら、事件に大きいも小さいもないんでしょう？」

「うっ…。そうです。」

言い返せずに渋々頷く新一。志保はくすつと笑った。

「ほら、探偵さん。立原さんが食べていたシフォンケーキでも食べない？あなたも、ここの常連客なんでしょう。」

「三毛猫失踪事件」(後書き)

何のジャンルに分類したらよいのでしょうか……。今回は、書き方をちよつと変えてみました。

三毛猫事件から大事件に発展させる話を書きたかったのですが、余裕がなかったので。余裕ができたなら、続がでるかもしれません。

最初の新一と志保の対話は、スペシャルで。クリスティーファンの私はポアロ大好きです。クリスティー本、30冊は手に入れました(自慢です。笑)。

余計な後書きになりました。

次回もよろしくお願いします。

空虚な転校生（1）（前書き）

新シリーズです。

志保ちゃんが記憶を無くしてしまう話です。

空虚な転校生（1）

「はじめまして、宮野志保といいます。今日からよろしく願います。」

志保は顔を上げ、にこりと頬を緩ませた。緊張しているせいか、ほんのり顔が赤い。その姿を見て、クラスの皆が心地好い印象を抱いた。

「よし！宮野の席はあそこ！川崎の隣だ。」

「はい。」

鮮やかな茶髪を揺らしながら、志保は指定された席についた。皆の視線が志保を追った。

隣の席の川崎は、黒髪のサッパリした、やんちゃそうな好印象の男子だった。

「よろしくね。」

横にちらっと目をやり、軽く頭を下げた志保。川崎は一気に顔が赤く染まった。

「ああ。」と言葉を発するので精一杯だった。

「川崎くズリイぞ！宮野さんの隣だなんて。」

「へへっ。いーだろ。」

からかいを受けて盛り上げる川崎に、志保は「あははっ。」と無邪気に笑った。

＊

「…志保はさ、どこから転校してきたんだ？」

明るい川崎と打ち解けることに、そう時間はかからなかった。昼ご飯を誘われた志保は、屋上で川崎と食事をしていた。

生憎お弁当という物を持参していなかったので、川崎と一緒に購買を買いハメになった。買う際に、女子から恨みが籠った目つきを浴びたのは気のせいだろうか。

「……わからないの。」と、志保は屋上の柵によつ掛かった。

思いもよらない返答に、川崎は首を傾げた。

「え？」

「こんなこと言ったら、変って思うかもしれないけど。大きな事故に遭ってね、それから記憶が無くなっちゃったんだって。大事な記憶が……どっか行つたみたいにな、空っぽ。」

「記憶喪失ってことか？」

「…ええ。忘れたかったのかも、忘れなくなかったのかも分からない。記憶喪失って何なんだろう。」

「……そっか……。あのさ……俺に力になれることがあったら言えよな！」

また赤くなった。

志保は表情がコロコロ変わる川崎が面白いと思った。

「そう……ありがとう。」

＊

自分は誰なんだろう。

目を開けたらそこは白い世界。真っ白な病室。黄色い花が飾られて
いることが、この真っ白な部屋に彩りを添えていた。

酸素マスク、点滴、心拍の。いろんな物が身体から生えているよう
だった。静かなこの部屋で拍動が聞こえる。体中がひりひり痛んだ。
突然、病室に入って来た一人の男性がいた。男性は頬に包帯をして
いた。その男性と目が合うと、その人は目を輝かせた。

「志保！」

そう呼んで近づいてきた。

「気がついたのか……。よかった！本当に……。ったく……心配させん
な。オレおまえがいなくなったたら……。」

関を切ったように溢れ出す言葉。私には何のことだかわからなかつ
た。

何もわからないんです。そう言うと、皆の顔が蒼白になった。宮野
志保、それが君の名前なんだと教えられた。けど、何もわからない。
ただ「わかった」という他無かった。

昨日、今日からこの学校に通うんだ、って新一っていう人から教え

てもらって。
あっという間だった。

「宮野さん！今日一緒に帰らない？」

帰り支度の際、クラスメイトの女子数人が声をかけてきた。

「うん。」そう返そうとした時、入口に新一君が立っていたのに気がついた。

「志保！帰ろうぜ。」

すらっとした体に、整った容姿。話しかけてきた女子も、新一君を見ると興奮しだした。

「えっ。宮野さん、工藤君と知り合いなの！？」

「志保！」

新一君がもう一度強く呼んだ。

「ごめんなさい。今日は一緒に帰れない。また明日ね。」

「いってらっしゃーい！」

断ってしまったのに、何故か彼女達はにんまりとした顔つきで手を振ってきた。

＊

「…志保、学校どうだった？」

「学校？楽しかったよ。友達もできたの。みんないい人達だね。」

「うん、そうだろう？」

「新一君ってB組？」

「…あっああ。B組。隣のクラスだ。」

本当は、志保と同じクラスが良かった。気になって仕方ないんだ。彼女のこと、心配すぎて。

それでも彼女、今日は楽しかったらしい。友達もできたということ、ホッと胸を撫で下ろす。

志保が新一君と呼ぶのは、今だに馴れない。

「そっか。ありがとね、新一君。登下校、いつも一緒にいてくれて。心強いよ。」

「どうってことねえよ…。」

志保は記憶喪失してから素直になった。“ありがとう”とか、“ごめんなさい”とか、照れ臭い言葉も、自分の気持ちも、表に出すようになった。

志保らしくない、と新一は思う。志保を遠く感じてしまうんだ。

志保が無邪気に笑う度に、胸が痛むんだ。

「志保ー！！」

と、後ろから叫ぶ声が聞こえた。二人で振り返る。

「あつ、川崎君！」

「川崎？」新一は怪訝に、川崎なる息を切らして近づいてくる男を見た。

「ハアッ…あの、忘れ物！」

川崎はピンクのブックカバーの文庫本を持っていた。新一にはそれに見覚えがあった。

「あっ！それ！」

「俺の机の上に忘れてったぞ。」

「…あれ、なんでだろう。川崎君ありがとう。」

「へへ。」と川崎は顔を少し赤くした。

「志保、コイツ誰だよ？」

しかめっつらの新一は言った後、後悔した。完全に独占欲を誇示してしまった。

空虚な転校生（1）（後書き）

一日で書き上げた上、見直しをしております。見にくい部分あるかと思います。終わり方がおかしい……。笑

眠いので後書き終了します。無責任ですみません。

感想頂けると有り難いです。

次回もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9353/>

彼のとなり

2011年10月6日03時29分発行